

らぬ點がある。

日本人は、日の丸の國旗にたより過ぎる。

支那人もロシア人も、朝鮮人もほとんど國家をもたなかつた。國旗は染め物屋の干し場のやうに、何んべんでも模様が變る。頼る國旗がないから、錢が國旗になる。何んでも錢だ。支那の役人がワイロを取るのも、裁判さへ金次第でどうにでも動かせることも、牢にぶち込まれても、金さへあれば贅澤が出来て、早く出してもらへることも、國旗の變りやすいためと解釋しても半分の理窟はあらう。

ユダヤ人が、多く金をもつことのそれと思ひ合せて、在滿邦人の自省を促したいと思つた。諸君は、海に遠い吉林やハルビンにゐて、なほ、鯛の刺し身を食ふ、味噌、醬油、野菜まで内地から取よせる。酒も日本から取りよせ藝妓も移入する、至るところで、日本料理屋へ案内されて、實をいふとわれ／＼東京人種には、決してうまくない日本料理——それが名物の蠅のもつて来る病菌の恐ろしさに、決して生物を食はぬわれ／＼に對して、高價な鯛の刺し身を出し、植民地すれのした藝妓に酌をさせてくれる。さぞ高い金であらうと、御馳走になつてゐながら、ハラ／＼する。高い御馳走になりつゝ、日本人の食へぬ話し、軟弱外交の攻

撃、そして都々逸の代りに、悲憤慷慨を拜聽するのだ。

新義州で、折角鴨綠江節の出演中なのに、主人役が前へ来て話しこまれるので、感興が滅茶々々になつたのなどは、指摘し得る一つの御馳走上の錯誤であつた。

支那人はもちろん、ロシア人でも、土地で産する肉、野菜、魚を食つて生活するから、銀の安い今日は、特に安く生きて行かれる。支那人は、日本金の五圓もあれば樂に、一人一ヶ月の全生活を營むといふ。

ロシア人も「相當な暮し」をして日本人の三分の一ぐらゐであげてゐる。奥地に暮す鮮農切渡船、ボート、モター・ボートによるより仕方がない。

冬になれば結氷するから、交通至便で、馬車、自動車、橇、何でも通る、陸續きになる。夏は交通不便である。甚だ奇異な交通状態である。

森氏の萬寶山行

問題の滿寶山行きである。

正直に白状するが、僕は行かなかつた。といふとまだ支那語のいはゆる面子はいゝが、行かなかつたのである。山崎猛君もその組だ。

森恪、東條貞の二氏は、乗馬の素養が十分にある。だから行けた。行けたといふよりも、素養に自信があるから、強行軍を敢行した、といふ方が妥當である。森氏は、その上海、天津時代、十年間の乗馬素養があるし、東條氏は北海道選出代議士だけに、北海道の山野を馬で乗りまはしてゐる。

満鐵の北の終點、長春から萬寶山への行程は凹凸萬能の支那途を、往復十二里である。馬賊の本場である。水が悪くて、馬でさへ飲まぬといふところである。滿洲の一番暑い、七月二十九日の眞晝の炎天である。強行軍の條件は完備してゐる。

相當野性をもち合はせてゐるつもりのも、また無理はない。關東廳の松田といふ高等課長は、わざ／＼萬寶山事件を、長春まで調べに来て、本場へは行かなかつたし田代長春領事は、問題が起きてから一ヶ月もして、平靜に歸した潮時を見計らつて、支那馬車で、一泊の旅程をとつて、漸く行つて来たくらゐだ。

一日の往復には、どうしても乗馬でなければ不可能である。従つて、素養のない僕のごと

きは、最初から落伍者の運命を甘受して、ヤマト・ホテルで晝寢をしてゐたことである。

さて、ハルビン發夜十一時の東支鐵道で、朝七時半長春に着く。朝飯を急いでしたゝめ、憲兵隊から間に合はせに借りこんだ乗馬ズボンと靴をつけた森、東條の兩氏は、同行の憲兵隊長、守備隊長など一行九名で、ホテルのハイカラな玄關から、野蠻な格恰で乗り出したのであつた。

後で聞いて、ヒヤリとしたことなのだが、一行が出發してから間もなく、萬寶山方面から長春の日本警察へ鳩通信で、馬賊出現の情報が入つた。

驚いた武並署長は、もし、一行の身の上に萬一のことがあつてはといふので、騎馬巡查を傳令として追ひかけさせ、應援の巡查をも併せて追ひかけさせたのであるが、素人のはずの森、東條兩氏の乗馬成績がいゝ爲に、一行の行程が早く運んで、追つかげが間に合はなかつたのであつた。しかし歸途を、往路そのまゝ引きかへしたなら、襲撃されてゐた、と知れてまたヒヤリとした。「知らぬが佛とは、このことさア」と、森氏が滿洲の陽にやけて歸つて来て、話したことである。

なるほど、憲兵隊長も守備隊長も關東廳の警察も、私かに馬賊を心配して、——さりとして

護衛ともいへず、散歩がてら、再視察にでも行くふりして、「御一緒に参りませう」といつてくれた原因が讀めた。もつとも、森氏も期することがあると見えて滿洲の奥地入り、馬賊やその他の警戒のために、東京から持つて来たピストルを、今日はじめて腰に結びつけたのであつた。

滿洲の馬賊は、今やまさに跳梁期に入つてゐる。高粱が伸びた。鐵道でさへ、高粱の中から現はれる連中に襲撃される。ために支那鐵道でも、滿鐵でも、東支鐵道でも、停車場には兵隊が實彈をこめた鐵砲を構へて守つてゐる。車内には、支那鐵なら巡警、憲兵、滿鐵なら巡查が巡廻してゐる。甚だ物騒な旅だ。

問題の、萬寶山方面の支那農民は、半農半馬賊だ。農繁期には百姓となり、農閑期には馬賊となる。今はもう草とりが終り、そこへもつて来て、馬賊と親類の高粱の背が伸びた。まさにひと稼ぎする時期だ。

鮮農壓迫のために、現地保護に出してゐる廿名の武装警官隊の、武器、機關銃、騎兵銃、ピストル、サーベル等を掠奪するために目を光らせてゐる。

三ツの天幕に露營してゐる警官隊は、夜は三名、晝は一名の對馬賊歩哨をたて、巡廻する

にも十名ぐらゐる組んで歩き、馬賊の奇襲に備へてゐる。馬賊は武器がほしいのだ。「代議士」なんぞが、生やさしい面で行く場所柄ではない。まして僕のごとき紳士においてをや……と負け惜みを白状する。

萬寶山へは行かなかつたがあらゆるニュースを手に入れることは、ぬかりがない。ニュースを基礎に、森、東條氏の實地踏査談を加へて一席辯じる。

萬寶山事件といふのは、簡単にいふとかうだ。長春から六里萬寶山といつても、山でもない土地の名稱だが、その近くの三姓堡といふところへ、千二百歩の水田を作るために、鮮人が、支那人の地主から土地を借り官憲に賄賂よろしくあつて許可を受け四月のはじめから水を引き入れるためのダム工事をはじめ、伊通河から完全に水路を作つて、稻の植ゑつけを終つたところを、官憲と半農半馬賊が一緒になつて、鮮農壓迫をはじめた。一日、支那銀の一圓（鐵砲をもつてゐるのは二圓）だ、五百人も暴民を集め、水路を埋める、我が警官隊に發砲すといふ騒ぎを演じて、彼らのいふ日本帝國主義の先驅たる鮮農追放計畫から、朝鮮各地における鮮人の對支那人の暴動となり、國際問題を惹起したのである。いまだ解決もつかなければ、萬寶山の現地そのものも、危険を十分はらんでゐる。

萬寶山事件が内地の新聞に出たのは、現實に支那側の砲弾的壓迫をはじめ、七月の二三日頃からだ、實はダム工事開始の五月から危険はちゃんと宿つてゐたのである。長春の田代領事が、モダン・ボーイで、カフェの研究ばかりして、大事な外交交渉を忘れてゐたからだ、などと愚痴つて見ても、幣原のもと強卒なしで、致し方もない。

氣の毒なのは現地保護の警官、既に前後四十日も、豆畑の中へ天幕を張つて露營してゐる。排日支那人は、食量を供給しない、水は悪い。氣候は大陸的だ。馬賊の危険が絶えぬ。鮮人を買ひ出しにやれば、物を賣らぬから、武装で買ひ出しに行く。

森氏は長春から、ウキスキーだの、食糧品だの、そして、金一封の見舞ひを携へて行つたところ警官諸君は涙を流さんばかりに喜んだ。そして御馳走に、伊通河でとれた魚をぶちこんだ汁と、鮮人に焚かせた飯を出したといふ。汁鍋は洗面器であつた。

それを聞いたわれらの目にも、涙が宿つた。話す森氏の目もまたうるんでゐた。

下手な外交は民衆を苦しめ、下級巡査に、死の危険を強要する。しかもこの現地保護の難事に當る忠勇な警官は、いつまでもゐるわけには行かない。今年折角の水田も收穫を見捨てた。來年まで現地保護はとても出來ぬ。

外交交渉は甘く見られて、なめられて、解決する模様もない。現地保護を打ち切つた場合に、そこにいる鮮人は再びやられるときまつてゐる。情報によれば、今度は支那人を直接使ふの愚をやめて日本人であるところの不逞鮮人を使つて、表面上の責任を鮮人同志即ち日本人同士の争ひに歸する計畫が行はれてゐるといふ。これは在長春の鮮人居留民會長の話である。最初から現地保護をせず、鮮農を引き揚げさせて、外交交渉に移つたらよかつた。どうせ來年まで水田からの收穫はないのだから。それを、無理に鮮農を留め、現地保護警官の引き揚げの潮時を失ひいはゆる引つこみのつかぬ現狀に陥れたが故に、支那側からは、ますく、足もとを見すかされ、甘く見られて、なめられてゐる。

一事が萬事、これが、紳士的幣原外交の對滿政策である。

現地保護をやるなら、手薄な警察官よりも、長春で遊んでゐる軍隊を使つたらよさうなものである。が、滿洲いたるところで見ることく、軍部は外務省を見限つてゐる。關東廳も馬鹿にし切つてゐる。また領事らは、軍隊の出勤を好まない。意思も感情も、すっかり離れくである。

それかあらぬか、萬寶山事件の起きた時は、關東廳の警務局長が關東軍司令部へ軍隊の出

動を頼んだところが、應じなかつたとも聞く。强硬意見の軍部は、兵を用ひたい、兵力で解決したいに違ひはない。

その兵隊がラツバをふいて、演習をして、手薄な巡查が出て行く。馬鹿くしく不經濟な話だ。

内田満鐵總裁と江口副總裁

大連の郊外星ヶ浦の星の家、満鐵御用の料亭である。海に面して涼風を入れる。その家で内田總裁の招宴に應じた。到る所で招宴おことはり方針をとつて、調査々々でその日を暮す精力家の森氏も、先輩であり親交もある朝鮮の宇垣、満鐵の内田のそれは、あまりに非禮だといふのだ。

主人側からは内田伯に江口副總裁、十河、木村、伍堂の理事連に、總裁秘書の杉、副總裁秘書八木の諸氏。これに元満鐵理事で、今大連取引所信託會社の専務であり、森氏と小學校以來の親友だといふ田村羊三氏が加はり、こちらは森御大、東條君、僕の三人——山崎猛氏

は間島行き準備のため、京城へ先發したので出席しない。

「満鐵王國」の王様も、副王様も着任して、一ヶ月に足らぬ。しかして、江口副總裁立案するところの整理方針に従つて、千何百人の首切りが行はれ、明八月一日、それが發表になるといふ前夜の、この會だ。招ばれて行くのが、何んとなく心苦しいやうに思へたのも、僕自身切られる満鐵社員と同じく、俸給生活者であるからである。

皮肉なことには、整理のため廢止された満鐵計畫部の人々が同じこの星の家で、解散の弔宴を張つてゐる。海に面した庭の芝生で園遊會を開いて、おけさ節を踊つてゐた。それが、われ／＼の二階の座敷から、目の下に見えるのである。飲まぬさきから、今宵の酒はうまくない、と思つた。僕の心は何んとなく重苦しい。

内田伯と森氏は、ニューヨーク以來の親交だといふ。内田伯が使臣で、森氏が三井物産の支店にゐた時のことであらう。兩人の話は、何のわだかまりもなくほぐれて行つた。

そばで、黙つてきいてゐたのであるが、酒好きの内田伯は、今度來てからはじめて、日本座敷であぐらをかいて飲む會合に出たのだといふだけに、甚だ上機嫌である。頻りに飲み、頻りにしやべる。酒がまはつて、ます／＼キュービーが可愛くなる。「好人物だなア」といふ

印象、昔のことを多く語るからでもないが、僕はさう思った。そして滿鐵の事実上の王様は三菱の元老、江口副總裁だといふのは、極めて適切な批評と思つた。

「僕はどういふものか、革命に縁があつてね。不思議なわけさ」

伯は露國大使として、最後に帝政ロシアへ使ひした。ロシア革命が起つた。支那の清朝時代に支那公使をつとめた。やめると、支那革命が起つた。米國大使時代に、メキシコの何んとかといふところの王様の戴冠式に日本を代表して臨んだ。間もなく王様は、革命でベシヤンコになつた。

「今度は滿洲革命の番ですか」

冗談とも眞劍ともつかぬ森氏のこの質問は、軟弱外交と、温室的滿鐵の急所を突いたらしい。

「内閣が變りでもしたらネ……」

内田滿洲王は、呵々大笑して話しをそらせた。

「僕もバリ會議からの歸りに、ハルビンで罐詰に會つたよ。わざ／＼日本から人が来て、あまりレーニンをほめて新聞記者に話しては困るといふのだ。財部君もロンドン會議のかへり

に、罐詰を食つたんだな」

われ／＼一行がハルビンで調べた財部海相罐詰め異聞を話した時に、伯はかういつて笑つたのである。

「ハルビンに、日本役人の罐詰の會社でも建てるとい、ね、ハ、ハ、」

ハルビン滿鐵公館に偽病氣靜養の罐詰にされた財部ロンドン會議全權は、健康な身體をもち扱つた。二階から降りて来る階段下のホールは、新聞記者に占領されてゐる。議會にさへ出られず「病臥靜養中」の者が、のこ／＼散歩に出るわけにも行かない。

しまひには自ら兜をぬいで「内證だよ君……實は病氣でも何んでもないんだが、議會で野黨の質問がうるさいから、歸つちやいかんといふので困つちよる」と白狀した。その話しを滿洲王に話したのからはじまつた笑ひ話であつた。

僕は、隣に坐つてゐる江口副總裁と話す。この人は、内田伯の日本酒黨に對してウキスキー黨と見え、ソーダ水に割つて飲んでゐる。内田伯は日本流に、盃の献酬を楽しむ風があつて、僕もまた、その趣味に従はせられ、滿洲王に盃をさすの光榮に浴したわけだが、江口氏は、ウキスキーのコップを舉げて乾盃をやつた。外交界の大立物たる内田伯よりも、却つて

この老人がハイカラである。

江口氏はいふ。「誰が手をつけねばならぬことなので、僕が憎まれものになつて、今度の整理減俸をやつたのですが、満鐵も随分ルーズになつてゐまして……」まさに實業家式、民政党内閣式であると、まづ思ふ。

單なる營利會社の觀念をもつてすれば、満鐵はまさにルーズだ。温室そだちだ。日露戦争を忘れたやうな人々、金持ちの坊ちゃんやんが親父の苦勞を知らぬやうな風格、そこには清算更正すべき餘地は十分あるが、満鐵の特殊使命は積極的滿蒙開發にあるので、政府のおつき合ひに、緊縮ばかりが能ではあるまい。

江口氏の語るところによれば、滿洲在留民が、支那人との經營競争にまけるのは優越感をもちすぎることに、緊禪一番の意氣がなく生活が贅澤であること、等である。また、國旗の幸福に恵まれすぎてゐることも、氏と僕とは意見が合致した。かつて南洋移民の會か何かで述べたといふ氏の意見を、こゝで再述したが、あちらへ行つたら暫く國旗を忘れること。結婚はあちらの人とすること、どしどし歸化すること。彼れは土人、自分は文明人などといふ優越感に酔ひ、いつでも日の丸の旗を立てたがつてゐたのでは、植民は成功しない。あちらの

人になつても、國籍を變へても、いざとなれば民族の血は湧きかへる。

歐洲大戰の時アメリカに歸化してゐたドイツ人は、擧げてドイツに歸つた。戦争が済むと再び歸つて、自分の商賣を營んだ。

この説にも、僕はまた傾應した。朝鮮で「狹量なる大和魂」は、朝鮮統治の上に大なる害がある、と或る役人がいつたのと思ひあはせて、興味あるものに思つた。

が、さて江口副總裁は、日本人の中にも「感心な人」がゐる支那人と同程度の生活に甘んじてゐるが、さういふ心がけになりさへすればいゝので、また、なり得ると信ずる、と斷じた言は僕の肯定しがたいところである。日本人には到底、支那人と同程度の生活は出來ない。これは長い間の民族の血である。

満鐵自身が、支那鐵道と同じ程度の「生活」に、運賃のレベルを引き下げ得ぬために、どしどし壓迫されてゐる現状が、證據である。

滿鐵奥地の經濟的進展が、日本を救ふゆゑであると説く、それはもちろんだが、江口氏は幣原外交の親類だけあつて、ほとんど一切の政治的壓力を排する。それで滿蒙で經濟發展を遂げ得ると思ふのは魚が空氣の中に住める、と思ふ現實認識の不足である。

試みに、江口氏に質問した。「あなたはかつて、滿蒙を御旅行になりましたか？」答へに曰く「ハルビン、奉天等に行つたことがある」……それぢや駄目だ。三菱大國の一番頭として、大資本をバックに表通りの大都會地を歩いて見ただけでは、失禮ながら、滿蒙の野蠻はわからない。「野蠻」が滿蒙の姿である。

總裁は好々爺、副總裁は認識不足で、算盤一方と來ては、急迫せる滿蒙の行詰りを打開することは難中の難と感じた。加ふるに幣原外交と來ては、まことにもつて申し譯のないトリオである。

そんなことを考へてゐる一方、今度は内田伯が、木村銳市氏の前へ進出して、盃のやりとりをはじめた。この二人は耳の遠い同志だ。どちらも外交畑で、木村氏は外交受持の理事だ。耳が遠いから、自分のいふことだけいつて、先方のいふことは聞えないから好都合だ、などは、少々皮肉かも知れない。鐵道交渉で木村氏が張學良から、まんまとなめられたのも耳の遠いせるかしら……。

東京風な滿鐵御用藝妓も、料理も、大して美しくも、うまくもなかつた。

間島旅行

「劍を撫す間島の夜や明けやすき」

龍井村に泊つた翌朝、卒然として森恪氏が示した句である。「劍を撫す」實はピストルの弾しらべである。それは句にならんで劍にしたのであらう。

間島は物情騒然といふ形容詞の出生地ではないかと思はれる位物騒だ。われ／＼の一行が輕鐵、天圖鐵路に乗る時も領事館警察官が數人で護衛してくれる。町を歩くにも同然である。

その警官のいでたちたるや劍どころではない。裸身のピストルを、百發の彈丸を藏した革帶の前方にはさんで、銃口を下に向けてゐるのだ。いくら夏だつてピストルを裸身にしておかないでもよからうものをと、私かに思ひ執つて見ると、決して浮氣な裸身ではない。かうして持つてゐないと、いざといふ時に間に合はぬ。共匪——共產黨員のこと——がピストルを突如として突きつける。腰のサックから取り出す間に撃たれた例は屢々ある。殊に最近、

去年の五・三十事件以来、共匪の横行劇しく、生かな手段では警戒出来ぬ故であつた。

間島は、排日、排鮮人の本場である。「日本帝國主義を倒せ」をスロガンとする「共匪」は支那人が中心指導者で、いはゆる不逞鮮人がこれに組んでゐる在住四十萬の鮮人の獲得に懸命である。豆滿江を國境とする對岸、朝鮮の咸鏡南北道を襲撃する。

馬賊よりも共匪の方が「傳染病菌」であるだけに恐ろしい。朝鮮總督府も、間島總領事館も全力を擧げて、これが防止に腐心する。

もし日本人の旅行者あり、間島において警察力の、微力ながらも及ぶ龍井村、局子街、琿春等の市街地から、内地のいはゆる郡部へ旅行することは、領事館が承知しない。殺されるものと覺悟しなければならぬからであり、一人でも殺されたら、また果てなき軟弱外交を續けねばならぬ。それは、ハイカラ外交屋の忍ぶべからざるところである。

間島を視ずして、排日排鮮を語る勿れである。而して、朝鮮を語る者が間島を視ないといふならば虎を描いて猫もまた及ばず、畫龍點睛を欠くところの沙汰ではない。間島は、共産主義と帝國主義の日清戦争である。朝鮮人の民族主義の源泉でもある。共匪は、民族主義を織りこんで帝國主義と挑戦する。帝國主義は、事實受け太刀である。

主義の何れがい、かは知らぬ、僕は日本の立場から、従つて帝國主義的な立場から、間島で「明け易き一夜」を劍を撫さねばならぬ。

「間島はどこだ」

嶋でも何でもない。吉林省と浦鹽近領と、日本の朝鮮との間にはさまれた四國位な所をさういふのである。

そこは、絶対に朝鮮農民の天下だ。四十萬人ゐる。支那人が十二萬、日本人がたつた二千恐ろしい故か、野蠻で住めぬのか、西洋人は百人程きりゐない、この中の一人のイギリス人が、支那の郵便局長である。

この土地の行政区劃や國際關係がどうであらうと、先住人は朝鮮人である。鮮人が「掣島」と呼んだのが何時の間にか「間島」になつた。日、露、支三國の間に挟まれてゐるから轉じたのであらう。または韓音で掣島が間島になつたのだともいふ。

しかうして、明治四十二年、日本が安奉線を敷くのと引かへに、間島を讓歩するまで間島は日本の領分（即ち朝鮮）だか、支那の國土だか、はつきりしなかつた土地である。昔は、清と韓の間に、緩衝地帯としての約束さへ結ばれてゐた。

支那は、安奉線と引かへに、間島を發見してしまつた。アメリカを發見したコロンブスは海のない所にも嶋があるのかな、と不審に思つてゐるかも知れぬ。

われ等よりも一足先きに間島視察旅行をした東拓の菅原總裁は、かう言つた。

「東拓としては、間島に投資は出来ぬ」

何故か？治安維持の出来ぬ所へ投資する事業家はないと決つてゐる。東拓の様な國家的使命を持つ會社にしてはなほ然り、民間の算盤一方の事業家が鏝一文の金だつて出せるわけのものではない。日本人がたつた二千人といふ理由も、自然に理解されよう。

萬寶山事件なるものは、朝鮮事件を副産したが故に、在滿鮮人の被壓迫状態に對する國民の眼はむけられたが、實をいふと萬寶山事件などは、庇の河童だ。間島における鮮人がこゝ何年連続的に、壓迫されてゐるかの實例は山ほどある。

支那の軍警が、「お前は共匪だ」と無實の罪を着せて罰金を取る。出さねば銃殺する。耕作物をまき上げる。牛、豚、鶏の家畜を取り上げる。有らゆるいぢめ方をする。

肥料といふものを施さずに大豆、粟、米其他の豊富な收穫がある。鮮人は一戸平均年五六十圓の収入で生活出来る。四國程の大きい所で、既耕地がわづか二十三萬町歩（内十三萬町

歩が鮮人の所有地）未墾の處女地は無限に展開してゐる——こんな土地柄で、もしも支那官憲と共匪の排日排鮮さへなくば、白衣の同胞の開拓し得る富源は底知れない。

東拓が喜んで投資出来るやうだつたら、金に目のない他の資本家も黙つて指をくはへてゐるわけではない。

「間島問題」といふのは、要約すれば、日本外交の強腰で、支那軍警と共匪を排撃して、治安を維持すべしといふ事に盡きる。

幣原外相は、議會で「間島の治安は平靜に復した」といつてゐる。彼は一度も間島を視たことがあるまい。ピストルに護られて二三日歩いて見ないと理解出来ぬのかも知れぬ。それに、總領事館が腰の弱いことつたらなく、何れも事なかれ主義、責任のがれ方針。

一二の例を擧げて見よう。

本年一月、わが領事館警察は四十人程で鮮人共匪の一隊を捉へて、領事館へ護送中、二十名位の支那軍警の爲めに、奪ひかへされた。その意氣地なさを、領事館はひたかくしにかくしてゐる。勿論新聞電報は差押へる。

日本人である鮮人を捉へて、共匪として無暗に銃殺する。去る五月かに、これも新聞には

出ないが、吉林省の奥地で五六百人の鮮人が殺されて畑の中に捨てられたのは事實だ。或る通信員が、實地踏査に行くから護衛警官の派遣を求めたところ、忽ち拒絶された事實がある。萬寶山の仇で支那人が百人やそこら殺された位ではつり合ひが取れぬ話である。が表沙汰になれば免倒だから伏せてしまふ。

通信員の話しの序でだが、問島の總領事館が職權をもつて新聞電報を頻々と押へる。言論壓迫の猛烈な朝鮮總督府以上の猛烈さである。鮮人が殺された、日本人がやられた——一切差押へである。

で、問島の通信員は、電話を使つて、朝鮮の羅新支局へ原稿を送る。羅新から、電報にして内地へ送稿する。

この電話を使ふにも勿論絶対の注意が要る。直接局へ行つてかける。自宅よりすれば、途中で支那官憲に盗聴されるからだ。ある通信員は、此の方法で鮮人壓迫の某重大事件の通信に成巧して、罰金を食つた。六百圓の金を使つて抗争したが、とうとう三十圓取られた。

それ程、わが帝國外務省の出先官憲は本省の事勿れ主義に忠實であり、在留邦人の悲憤をよそに、高い煉瓦塼と、砲壘に圍まれた館事館の中に、文化生活を營んでゐる。

滿洲や問島を捨てる積りなら、それでよからう。在問在滿鮮人を全部支那に歸化せしめる決心ならそれでよからう。二つながら「いやでござる」の日本が、腰の弱い事では仕方ない。頼るべきに頼り得ず、さりとて歸化は許されぬ朝鮮農民に對しては、僕は滿腔の同情を禁じ得ない。

陸軍が、問島に守備隊を入れたいといひ、朝鮮總督府が、問島協約前の状態に歸つて、その警備を自分の手でやり度いといふ。何れも幣原外交に對する不信の聲に外ならない。

こゝに一つの案がある。吉會線の促成だ。前にも述べた通り吉林から、朝鮮の會寧に通じさせる吉會線は、既に例の西原借款一千萬圓を借してゐるに拘らず、支那は、頑として敷設に應じない。

この、たつた日本里數で四十里程の鐵道が通じ、更にそれを雄基でもい、羅津でもい、こゝは鮮内だから、支那の干渉には會はぬ日本海岸の港に繼ぐことによつて、經濟的にも、軍事的にも、日本の勢力は絶対的なものになる可能性が十分である。

また、經濟的にいつても、ハルビン、長春、吉林等の北滿地方の農産物が、遠く大連、浦鹽の遠い港にまはるまでもなく、日本海へ手軽に輸送でき得る。

吉會線の開設によつて、滿鐵がさんぐいためつけられてゐる支那の滿鐵包圍線は、逆に滿鐵の榮養線となる。こんなうまい話はない。兎も角この線の速成は、間島の事情のみならず、問題多き北滿、南滿の事情を一變し得るであらう。

日本が、帝國主義の立て前を捨て得ぬ以上、さうするより途はない。

田中内閣はその末期に、滿鐵を鞭撻して支那側への交渉を急いだが、事成らぬに倒れた。仙石雷君は、幣原外相の事なかれ主義とバツを合せて、木村理事に交渉を一任したきりで、そして張學良に背負ひなげを食つた。

内田總裁は、大いに速進するつもりであらう。木村銳市理事を奉天駐在にして、鐵道交渉専門にするのだといふが、さて、外務大臣が、英國文學の大家たるをもつて自ら誇るハイカラさんと來てはなめられじまひが落ちであらう。

由來滿鐵が普通資本家の錯覺から自己採用一點ばりで大連一港主義をとり、その本社も、滿洲の一番はじつこの大連に置くなぞは、根性が小さすぎる。奉天に本社を置いて、國策遂行本位に立ちかへらねばなるまい。滿鐵株が、一時無配當になつても我慢して貰ふべし。

もし滿鐵が、帝國主義の立場を去り得ないことを自覺するなら、積極的に乗り出すべきで

ある。こつちがへこめば支那が突きこんで來るまでだ。

急げ吉會線。間島問題の焦點はこれだ。

廣軌の吉會線の先驅として、現在輕便鐵道である天圖鐵路なるものがある。これは、飯田延太郎氏と、支那との合辦である。

朝鮮鐵道北の終點たる上三峰から、直に豆滿江を渡つて、龍井村、局子街、老頭溝に通じる總里數十五里位もあらうか、唯一の交通機關である。豆滿江に架けられた、たつた一つの橋であるいはゆる國際鐵橋を、支那側の抗議を拂ひ除けつゝ、軍警、馬賊、共匪襲撃の危険を冒して架けたあたりは、買つてやらねばならぬ。

夜になつても電燈がつかない。時間が不正確だ。車が汚ない、同じ所を何べんも廻る、歩いて眞つ直ぐに横切つた方が早いから國辱鐵道だ、と批評した人がある由で、總辦の入江君が憤慨してゐるが、批評する方がちと無理である。

この天圖鐵路でも、老頭溝と敦化の間二十里を通じてゐたらわれらのやうに、吉林から三晝夜を費して、大まはりに間島に入るの困難を敢てせず済むのだが、これまた支那官憲が増設を許さない。

この鐵道では、つねに共匪、馬賊に襲はれる。故にわが領事館警察の例の裸身のピストル、支那軍警の劍つき鐵砲が護つてゐる、車内はもちろん、停車場はもちろん。

この護衛の支那側軍警は、天圖鐵路護軍といふのだが、その總隊長は、支那の陸軍少將だつた某といふ大人。それが月給六十圓で雇はれてゐる。

われらが乗車した後、森氏は金一封のチップを少將にわたした。

巡查兵隊にチップを出すあたりは、さすがに支那通だなあ、と僕はをかくしてしかたがなかつた。

積極か退嬰か對滿政策の重大性

間島地方を模範的とし、滿洲地方を從的とする支那の鮮人壓迫は支那官憲が幾多の法律を出してゐることでも、十分の一位はわからう。法律の名前を二三。

鮮農驅逐侵入禁止規程（昭和元年）懲治盜賣國土暫行條例（同）朝鮮人土地租借規程（昭和二年）その他、鮮農驅逐辦法、協通鮮農驅逐禁辦法、朝鮮人取締法、制限鮮人居留辦法、

取締韓僑辦法、日鮮人追放令

等々、擧げれば驚く勿れ、法律規則、訓令、密令合計百十三といふ數字を示す。その一々の内容について、もしこれに列記註釋を加へるならば、一卷の書をなすであらう。

何すれど、支那官憲がかくの如き大努力を拂つて、百萬の鮮人追放に苦慮するか？ 水田火田を作ることにかけて世界一の技能を持つ鮮人に對して、その技術を有しない支那人が經濟的迫害を蒙るといふことは考へられぬ。たゞ、鮮人は、日本人である。もしくは、日本帝國主義の先驅である、追放せざるべけんや、と云ふ觀念に止まる。排日である。重ねていふ萬寶山事件の如きは、腫物の一部にすぎぬ、毒は全身にまはつてゐるのである。

而して、こゝに考へねばならぬ問題は、朝鮮人が果して日本帝國主義の先驅であるか否かである。

僕は簡單に答へる。然らず、と。僕の測定に誤りなきものとすれば間島において農業に従事する鮮人の大部分は、日の丸の國旗を掲げる者は殆ど一戸もない。「職業的親日鮮人」と雖も、他の同胞の反感を恐れて日の丸の國旗を掲げ得ないくらゐである。

といつて、支那の青天白日旗も掲げられない。朝鮮人は、かくして國旗のない民族であ

る。だから何とかして國旗を持ちたい、と民族主義が根を張る。甚だ尤も千萬である。

あの廣い滿洲、間島を通じて日本内地人は二十萬しかない。しかも恐らく月給取り、日本の金で俸給を貰ひ得る官吏軍人會社員が三分の一位を占めてゐるであらう。なのに、全く「國旗をもたぬ」自主の状態で在る「白衣の同胞」は實に内地人の五倍百萬を突破してゐるのである。

彼らの中、居留民會長とか何とか、幾分でも日本側に屬すると見られる朝鮮人の人々は、吾々に對し泣いて訴へる。もつともつと保護して貰ひたい。日の丸の國旗で守つて貰ひたい。それが出来ねば、支那へ歸化することを許して貰ひたい——。

たとへ支那に歸化することによつて、今までよりも一層支那の法治下に苦しむとしても、どうかしなければならぬといふ白衣の同胞の絶叫は、腹の底からの叫びであることを認識しなければならぬ。

幣原外交は、内地人を保護しないと同じく、鮮人を保護しない。さりとして歸化も許さない。それは人道上の大罪惡である。

朝鮮を有することが日本の存立上絶対必要であるここに間違ひはない。滿洲間島を特殊地

域とせざるを得ないことも亦、日本の存立上絶対的のものである。そして朝鮮統治の問題とひいて對ソヴェート問題とは、引きはなし得ざる日本對外政策のトリオである。それは常識だ。

これを解決するには、退嬰晝寢外交で、滿蒙を捨てるか、又は積極進取の外交で、日本の生命線を確保するか、何れかである。

歐米旅行記

滿洲事變直前の滿洲を歩いて、東京に歸つて來ると滿洲事變が起きた。やがて犬養内閣が成立して森は「大書記官長」になり、私は、一方に新聞に關係を有しながら森の手助けをする爲めに内閣囑託になつて彼の側にゐた。やがて五・一五事件で犬養内閣から齋藤内閣に更つた。私が歐米の旅に出かけたのは、滿洲旅行に東京を立つてからかつきり滿一年目七月十四日であつた。米國でも歐洲でも、問題はすべて「日本の滿洲征服」にかゝつて居た。私の旅行中に、森は臨時議會で滿洲國を承認すべしとの質問演説を行ひ、内田外相が有名な「焦土外交」の名を残す答辯をした。歐米の空氣は、日本に頗る悪かつた。國際聯盟脱退の空氣は森の手によりて漸次濃化されつゝあり、やがて松岡全權がジュネーブへのりこんだ。私の旅行記は、極めて暢氣にかゝれてある。しかし、讀返して見て、自分亦森恪の弟子たるの資格あり、と微笑されるものがあるのである。

滿洲行は森恪と行を共にした。歐米旅行は森恪の出資によつてゐる。昭和二年、彼が革命の支那視察に出かける時、いつしよに行かないかと誘はれたのに、勤め先の都合で行かれなかつたのは、今考へても頗る残念にたえぬ。もし思ひ切つて同行して居れば、私はもつと森恪の考へ方に近づいてゐたであらうと思ふのである。

涼風の太平洋を渡る

この爲替の悪い時に、圓を土臺にして世界一周の旅に出るなどは餘程經濟觀念の薄い奴か、よく／＼用事のある人か、または金があり餘つて、及び閑のある人間か、何れかである。

僕が、その何れに屬する人間であるかは讀者の御想像に委せるとして、旅行に出ると決つてから、毎日新聞をひろげて第一番に見る所は、經濟面の爲替欄である。對米三十一弗何ぼの時に五千圓正金銀行の窓口へ持参したら千五百七十ドルの信用狀をくれた。出發の數日前にまた行つて小使錢を五十ドル替へたら、二十七ドル何ぼに下つてゐて百八十餘圓を要し

た。一ポンドが十三圓以上であつた。一百ポンド替へるのに二千六百何十圓を要した。

世界一周の一等船賃(但し大西洋は二等にする)米大陸横断の汽車賃は爲替が二十九ドルかの時にポンドで買つた。約二千圓、百五十何ポンドかであつた。これは安いと思つた。ドルで、しかも切りはなして買へば、三千數百圓に及ぶはずである。然り而して、僕の旅費は約一萬圓である。今年の一萬圓は、去年の今頃の六千圓である。行先きで足りなかつたら、ウゴケヌ、カネオクレのつもりである。

かういふ風に毎日爲替の心配ばかりしてゐる。船に乗つても、煙草や、酒や、床屋や、洗濯屋に至るまでドル建てだと聞いてヒヤリとした。日本船だから、日本煙草に事を缺かさぬつもりで、横濱から乗船する時は、朝日とバットの喫みかけたのを一袋づつ、ポケットに入れたゞけであつたが、早速、バーへ行つて見ると、何れも外國煙草で、ドル建てとおいでなすつたのには、甚だ憂鬱ならざるを得なかつた。

日本船だから圓で勘定して、大和魂を發揮すればいい、ものを船賃から、船中の雜費までドル建は情ない。船中から出す郵便電信だけが、日本の切手を使ふ。こいつは、逓信省の管理だから仕方がないさうだ。それ見ろ。日本の役所だつて、たまには好いところもある、と出

發早々日本讚美の第一聲を發する。

この聲が、僕の世界一周の結論になつたなら、甚だうれしいと思ふ。先づロスマンゼルス
のオリムピック大會で、日章旗の掲揚と、君ヶ代吹奏の光景に接しなくてはならん。どうし
ても接するつもりである。先に行つてゐる選手達もその意氣だらう。フアンの僕さへその意
氣なんだから……。

錢勘定ばかりしてゐると、何となく自分が猶太人にでもなつたやうな氣がする。少し景氣
のいゝ話しを書かう。

春洋丸は二十年も使つた古船だけれど、僕は秩父丸だの龍田丸だのと最新式の優秀船に乗
つた経験がないのだから王國だ。構ふことはない、俺の乗つてゐる船は世界一の船だと決め
てしまふ。十年前までは、確に王様見たやうな船だつた。いや船は女性だから女王と訂正し
よう。

世界一の春洋丸は「オリムピック・シップ」ださうだ。食卓のメニューにさう書いてある。
二等の方には見學の團體が澤山あるが、一等の方は、百餘名の定員に對し三十人しか船客が
ない。オリムピックの馬術を見に行つて、序でに、ドイツに留學してゐる(ムスコ)夫婦の

所へ寄つて來るといふ順天堂病院長の佐藤男爵、ワシントンの大使館駐在武官として赴任するといふ田中大佐、ハリウッドへ行く松竹キネマの俳優城田二郎君、三井物産の連中數人、東京市會議員が五名、その他等々々。

太平洋の夏は涼しい。こんなはずではなかつたほど涼しいのであります。

七月の十四日に横濱を出て、明日は布哇へ入港しようといふ今日、僕は合服の背を抜いただけの服を着てゐる。風を切つて船が進むので、汗をかくことがない。昨日から、デッキへ海水を張つたスキミング、タンクが作られたけれど、入り手がなほ涼しい。蚊がゐるでなし蠅が飛ぶでなし、夏は何處の國にございますか、といひ度いくらるである。

七時に始まる夕飯に音楽をき、ながら食ひ終つて、八時ごろにダンシング・デッキへ出て行くと、或る晩は活動、或る晩はダンス、或る晩はボーイ連の芝居——昨夜は船客の夕といふのが催はされて、僕はおけさ節をうたつた。この夕涼みも、おそくなると、肌が冷えるくらゐだ。

船に乗つてしまふと、丁度借金取をまいたやうな具合で、誠に氣が樂だ。電話もかゝつて來ないし、人を訪れる必要もない。訪ねられることも要らぬ。船内新聞といふのがあつて、

毎朝無線電話によるニウスを印刷して來る。桑港のラヂオニウスも英語で刷つて來る。が扱ていくら國事を心配して見ても航海中では手の出しようがないところから、生々しいニウスでもヴェールをかぶつて景色を眺めるやうな刺激しかない。

頭の中は勢ひ空っぽになるだけである。佐藤醫學博士は「私にはこれが一番の靜養であり東京にゐればこんな閑な時間は作れません」といふ。僕また頗る同感である。

頭を空にして、うまく飯を食ふこと、よく眠ることより他に念願はない。まさに靜養である。歐米大陸へ行つたら、こんな靜養は出來ぬから、今のうちにうんと怠ける、とばかり、僕は乗船後十日、ハワイに着く昨日まで、繪葉書一枚書かず、食つて寝て起きれば即ち甲板でチェイヤに寝ながら手輕な讀書を日課にしてゐた。おかげで日方が四百日ふえて、十二貫百目になつた。

船は洋上ホテルと思へば宜しからう。

船に強い僕は、殊にこの平穩にして涼しい航海に、未だ一度も食堂を缺席しない。僕のテーブルは、菊池君といふチーフ・オフィサーがテーブルマスターで、大阪商船の黒川君夫妻大阪の綿花輸入商でアメリカ大學育ちの和田君、明大講師の藤江君、松竹の城田君と僕であ

る。年配が三十から四十がらみにうまく組合せたチーフスチワードの頭はい、と思つた。

一日二日はお互に肩の張つたやうな話しばかりしてゐたが、日が経るに従つて、へだたりが取れ、冗談、シヤレはもちろん、黒川夫人缺席の時には、エロ漫談も飛び出すといふ香気な食卓である。藤江君などは、朝飯から、若い妻君の、ろけを手放しでやつ、ける。船が横濱港を出るか出ないに、今埠頭まで見送りに來てゐた妻君に電報をうつたといふ先生だ。その妻君が埠頭で赤いバラソルを振つて別れを惜んだ、といふので、ミスターバラソルといふ綽名をつけた。

和田君は、毎食事のオニオン（葱）を食ふので、ミスター・オニオンにされてしまつた。その他は未だに仇名がない。城田君と僕は毎晩、スモーキング・ルームで飲んだ揚句に、ダイスを振つて、拂ひつこをやつてゐる。さし當り兩人はミスター・ダイスとでもいふのが宜しからう。

二等船客は、八十名ほどである。出口林次郎君の率ゐる文部省奨健會の一行十六名が斷然巾を利かしてゐる。V・M・C・Aの團體も頑張つてゐる。學生がゐる。各府縣の體育主事とかれら學校の體操の先生とかいふ人々もオリムピック視察のため乗りこんでゐる。一等船客

のやうに目的が區々でない上に、一等船客のやうに、乙にすましこんでゐない。フランクである。ボートの監督深澤政介君と、出口君とが中心人物で、水泳の小母さん和田トヨ子先生が赤毛布を發揮して愛嬌をそへてゐる。

この連中は、一等船客のみ入るを許される甲板でも、遊戯室でも、讀書室でも占領してしまふ。一等の先生達が却つて小さくなつてゐる始末。船長も黙認してゐる。それでこそ「オリムピック・シップ」だから、一等船客である小生も喜んで諸君の前に小さくなつてゐる。幸にして外人客が少い。一等の方で食堂へ來るのが三人ぎりしかない。一人ボービーとよばれる悪戯小僧がゐるけれど、子供は大人と一緒に食堂へ入れぬから、奴さん室で小さくなつてゐる。

二等にはミッシヨンらしい婦人、フィリッピンの大學教授、音樂家夫妻等、それに名古屋のブカナン君その他がゐるくらゐである。船の二等は、汽車の三等と同じく乗つてゐる人が概して氣輕で宜しい。このくらゐなら二等で來ればよかつたと思ふ。名古屋金城女子専門の先生であるブカナン君は日本語が達者で「船客の夕」には日本の歌をうたつた。僕が、英語の片言でいふと、彼は英語でしゃべる。途中でこちらが判らなくなると、「日本語でたのむ」

のである。

三等に珍品米人がゐる。何とかレスコといふ二十五になる青年、羅府の土木技手ぐらゐの男、五百五十弗の金で、三ヶ月で決行した世界一周のかへり、「君は殘金を幾らもつてゐるか」と訊いたら百ドルほどある、といつた。では四百五十ドルしか使つてゐないのである。圓の悪い今日にして千六百圓ほどにしか當らぬ。爲替がバーの時なら千圓だ。

餘り不思議なほど安上りだから根掘り葉掘り訊いて見たところが、荷物といふべきは小形の手提鞆たつた一個。着る物は、紺サージの冬物、ズボンのかけがへを一本準備し、その他に靴は黒い奴をはいたなり、外套に、シャツの着更へ數枚、たつたこれだけだ。ニューヨークから歐洲へ渡つて、シベリア鐵道で浦鹽に出て、船で敦賀へ渡つて横濱、東京を見て、鎌倉の大佛の美男ぶりに感心する餘裕もあつて……僕自身の旅費と荷物（手に提げられる程度の大きさの鞆二個、手提一個）に比較して、急にこの青年が偉く見え出した。かういふ元氣な、簡単な奴がゐなくちゃ駄目だと思つた。

彼は横濱で日本着物を二圓五十錢で買つた。これは姉さんへの土産の由である。「ペリ・チープ」と彼はいつた。物を見ないから判らぬが、いづれ浴衣の類でもあらう。ペリ・チープ

に違ひない。「貴君は妻君が居るか」「ゐない」「貴君は？」「ある」「子供さんは？」「二人……但し女房は一人ぎりないぜ」といつたら先生笑ひ出して「自分には一人の女房でも多すぎるといつた。「女房がなくともスキート・ハートはゐるだらう」とからかつたら顔を赤めて「ノー」といひながら手帳を出して、そこにはりつけた姉さんの寫眞を見せた。なるほど婆さんだ。スキート・ハートぢやあるまい。

こんな呑氣な、王公貴族氣取りな旅行は初めてだ。三井高精氏の一粒種だといふ學生が從者をつれて米國見學に行くのと同船だが、彼も、僕も、同じ春洋丸の一等船客で、すべての權利義務が同じである。船が難波した時、ボートに乗る練習があつたが、彼も、僕も浮袋をつけて、指定のボートのところへ集まつて、「さて死なばもろともですな」と笑ひ合つた。

時計が毎日二十分から三十分、進めさせられ、十九日は二回繰り返した。理屈は船長に説明を聞いたがわからぬじまひで、明日は布哇のホノルルに着く。そこでこの便を出すため、大急ぎの勉強だ。

ハワイ素描

ハワイから羅府までの航海は、むしろ寒かった。殊に七月二十九日羅府着の二日前からは念のため持参した毛メリヤスのズボン下をはいた。婦人連は毛皮を出して巻き、男は外套を着るといふ始末である。僕は外套と冬着は、ロンドンへ着いて買ふつもりにしてゐる。役に立つたのはシャツだけであつた。

ハワイは軽井澤と、旅順と、東京と、神戸をちゃんぼんにしたやうな街と、そして郊外である。誰れもする赤毛布見物を避けることは、ハワイ報知の今井讓君によつて全然可能であつた。今井君は、その同僚岩井君と共に棧橋まで迎ひに来てくれた。しかも自家用自動車を持つて来てくれた。

その自動車は、午後四時着港翌午前三時に船へ歸るまで僕を運搬してくれた。

ハワイは熱帯の由である。熱帯地方は暑いにきまつてゐる。故に僕は薄いワイシャツ一枚と紺の上着、白ズボン白靴といふいで立て下船した。ところが、驚くなかけドライブしてゐる

る中に外套がほしくなつた。殊に世界第二の強風の名所で古戰場だといふ何とかいふ名の丘の上に立つた時は、晩秋の寒さを感じた。

聞けば年中一着の洋服で、下着さへ加減すれば通せるといふ。貿易風といふやつが吹くから、熱帯にして暑からず、而して冬寒からず、氣候の變化がないから刺戟が餘りないのだといふ。

日本人が七割ゐる。お百姓さんが自動車を運轉してゐる。電車もあるにはあるが、餘程間の抜けた先生でないと乗つてゐない由、自動車も人間も、右側通行で日本と反對だ。電車が停電してゐる時は、自動車はこれを追ひ越すことが出来ない。それをよく守つてゐる。

豆腐屋が、二十五仙の豆腐を自動車で配達する。どこの家にも電話があるから便利だ。日本のやうに電話に市價があつたり、申込んでもなか／＼架けてくれなかつたりはしない。わが春洋丸の如き、入港すると直ちに、市内電話が架設された。十五ドル費用が要るといふ。

今井君の家で、夫人の手料理になる野菜料理、自動車で配達した豆腐で味噌汁、本物の白米を馳走になる。船の米は舶來物だから甘くない。自家製の日本酒も馳走された。禁酒國でも酒はのめる。たゞうまくない。ハワイでは禁酒になつてから、どこの家でも密造するので

却つて誰でもが酒のみになつたといふ今井君の説明であつた。

僕がキャビンに持参してゐたキング・ジョージを見て、今井君も岩井君も、ヨダレをたらした。ホノルルでは密賣一本二十ドル、日本金の約七十七八圓である由。そこで半分程残つてゐたのを兩君に皆飲んで貰つた。

ワイキキの濱でも、又は市街でも、茶店の前に自動車を留ると御用き、の小娘（大概日本人）が走つて来る。流暢に「ハワイ英語」を操つて、御用をきく。アイスクリームでも、サンドイッチでも、それをアルミニウムのお膳へのせて、車の中へ運んで来る。お膳は車の縁へ取りつけるやうに作つてある。下車してイスへかけて長尻する客などありはしない。またないことに定めてゐると見える。オール・ビジネスである。

密藏の酒を、方々で飲んでのかへり、朝の三時だつた。ワイキキの濱で車中で食べたホット・ドックは實にうまかつた。（夜中まで彼れらは商ひをやつてゐるのである）——

サーピスしてくれた小娘は、沖繩だといつた。日本語よりもハワイ英語の方が勝手らしくつた。彼女はゆるゆるハワイボーン、二世である。國民性はどつちに屬するかなど、日本魂的考へ方をしながら、又だ熱帯の深夜をドライブして船にかへつた。さうしたら寝てゐる

る中に船が出た。おかげで花の首飾りを買ひそこなつた。

船の中では華族も、ユダヤ人も、金持も僕のやうな「あなたまかせ」も、一律一體である。

横濱から羅府へ半月。

食卓の仲間、スモーキング・ルームの飲み仲間。或はダンシング・イーブのパートナー等々々。誰も彼もこゝで金もうけはない。月賦の洋服の言譯もない。人間は皆洋服を着てゐれど眞つ裸の交際である。

あすはロスへ上陸して、八方へ、各々のビジネスに走るとも今宵一夜は、せめて飲まう。ロスに着いたら禁酒國だ。酒はあつても密藏で密賣だ。大びらに飲めるのは今宵だけだ、と思はず盃を重ねる。

明朝六時半にロス港外着、七時朝飯平日は八時半といふので、殊に婦人連は早く寝た。最後まで、スモーキング・ルームに残つたのは、ジロマンこと松竹の城田二郎と僕と船長和田氏であつた。

船長は飲まぬ。城田君と僕はいける口だ。毎晩ダイスを振つて、ビルの書きくらをして二週間餘つき合つた。別れようとして別れにくい。甚だ別離の情濃やかである。

彼れも僕も、既にバーの勘定を拂つた。

拂つてしまふと、又た飲みたい。今度は現金で拂ふ。洋酒はドル拂ひ、ビールは日本金拂ひ、實にややこしい。が、やゝこしさを超越して「エキストラ」を何杯も重ねたのである。

われらの食卓のマスターは、チーフ・オフィサーの菊池氏である。黒川夫婦、和田章、藤江利雄、城田二郎、僕である。何となく別れにくいので夕飯が済んでも、長いこと煙草をふかしながら、又の逢ふ瀬を約束した。黒川夫人は、ロスアンゼルスにテンプル・フレンドの訪問するのを楽しみにして待つ、といつてくれた。世辭ではないことは、日本人同士の間と目でわかる。何となく涙ぐましい氣持である。

日本を出て幾日もたゝぬのに、人種の批評でもないが、日本人は善良と思ふ。けふ逢ふてあす割前の金勘定をしてグット・バイで別れる西洋人の方が、生活が簡單でよろしかろ。

日本人は金もうけの點においてユダヤ人にはかなはぬさうな。國家をもつてゐては、金より國土が大切だ。生命から二番目である。それで満足だ。「俺は機械でないぞ」と叫びたい。僕がこの通信をかいてゐる時は、七月二十八日、明朝ロスへ着くといふ前夜、十二時半のライティング・ルームだ。

正直にいふと、日本を出る時子供に握手して別れて来る時以上、感傷的狀態にゐる。誰れも彼も、あすの上陸を夢みて、寢言でもいつてゐる時間だ。僕には、ロスアンゼルスが外國といふ感じが未だしないのに、半月の日本人の友達と別れるのが淋しい。

お茶の時、和田船長（一名エンサイクロペディア）曰く「船に乗ると、人間が陸にゐる時とは全く變ります」——さうかも知れぬ。航海心理学を研究して博士になつた人があるかどうか、は聞きもらしたが、ともかく、明朝は「外國」に上陸するのである。くすぐつたい氣持だ。（七月二十八日夜）

世界の平和は遠し（オリンピックにて）

第十回國際オリンピック競技會の入場式を見た。もちろん、本社特電、その他が詳細を報道してゐる筈である。僕は今、電信、電話、ラジオニュース、號外の新聞記者的センスを離れて、素人としての印象を書く。

カリフォルニアの空は何處までも青い。雨の降るのは珍らしいといふ位な空だ。ホリウツ

ドの活動寫眞の撮影所が天下を壓してゐるのは、空氣が澄んでゐてハッキリ寫るからだといふその土地柄である。

七月三十日だから日本は土用最中、午後二時半の開式だ。十萬人を入れる大スタジアムのスタッドにゐてもちろん暑い。けれど浴衣がけで、麥稈帽子の下から、手拭やハンカチをのぞかせてゐる人はもちろん一人もゐない。この暑いのに、厚ぼつたい毛の洋服を着て「白人」はすましこんで見物してゐる。中には毛のスエータを着た男、或は外套を抱へた女もある。「白人」はやり方がちがふな、と思つた。白い着物を着るのは餘程金持か、ボス（親方）だといふ。さうだらう、洗濯賃が高い。

浴衣を、女房が只で洗つてくれる國とはちがふ。これも一切經濟から割出される。

三十九ヶ國の選手が入場式をやるのだ。僕のやうな無智な者には、先頭に立つ國旗でわかるのは、まづ第一に日本の日の丸、米國か英國位なものだ。

ギリシヤはオリンピック・ゲームの元祖だといふので先頭だ。次はA B 順でアルゼンチンだ。わが日本チームはイタリーの次で、廿五番目だ。その二十五番目の出て來た時、僕はどんなにうれしかつたか知れない。僕は思はず立ち上つて拍手を送つた。

白人がまはりに一ぱいにゐる中で、夢中で拍手した。知り合ひの顔が黄いろつぼく、黒つぼく、紺の上衣に白ズボン、白靴、ストロー・ハットを一着に及んで、(女子は白のスカート白靴) コンバスの長い白人チームの間に、短い脚をのばして歩調を揃へてゐる。いちらしい位であつた。

「勝て日本」と日本語で書いた長い布に、數百の風船玉をつけて空に飛ばせたは、何處の愛國漢であらう。「日本よ勝てといふのだぜ」と隣席の米人に説明してやつたら、うれしいではないか、彼れは手を拍つてくれた。そして僕に望遠鏡を貸して、「君、日本チームをよく見たまへ」といつた。——のぞく。知つた顔がハッキリ映る。「このメリケン話せる、うい奴だ」と感心した。だから、米國チームの入場して來た時「よく君の友人達の顔を見たまへ」といつてやつたら「イエス」と、ニコニコしてグラスを目にあてがつた。

二百五十人で組織した大げさなバンド。千二百人の女の子のコーラス、これらが音楽をぶか／＼と／＼やつたり、歌つたりする。大げさだ、が景氣がいい。

早く、彼れ及び彼女らをして君ヶ代を奏でさせてやりたい——慾が早速に出る。

正門の上の高塔でオリンピックの象徴である、篝火が焰々ともえる。繪にかいてある、裸

體の男の持つ、あの棒の先の火だ。

青空に火だ。一寸つり合ひが取れなくもある。カリホルニア産の石油で燃やしてゐるかも知れないから、今昔の感にもうたれる。

平和の鳩が二十羽、萬國旗に包まれた箱の中からとぶ。征服して獲得された植民地の選手が、果して「平和」をのみ考へ、強者と弱者の比を考へぬだらうか、と思ふ。インド、ヒリッピン、カナダ、滿洲……？オリンピアードの發生地ギリシヤの今日は如何、讀者の中即座にギリシヤの國旗を判別し得る人が、失禮ながら何人あるであらうか。

チャイナとプログラムに書かれてる支那軍が、滿洲の旗を先頭に立てたのは、然し僕の氣に入つた光景であつた。

平和は、お互の力が五分五分の時にはじめて生ずる。四分六の場合は、モウ六分の方が四十分の方を征服する。國際外交然り、現にオリムピック・ゲームス然りではないか。

浮氣やイミテーションの平和主義で世の中が渡れると思つたら、おめでたい話した。――

これが入場式を見物した日の一旅行者の感想である。(七月三十日夜ロスアンゼルスにて)
八月十日の夜、オリビック・スタジアムで、各國のマスゲームがあつた。アメリカでは

夜、野球や蹴球をやつたり、マスゲームを見せたりは平氣である。日本だつて電燈さへ強くすれば出来るのだ。

早慶戦に、會社や學校や自分の商賣をはうり出して、神宮球場へ出かけなくても、夜ゲームを見せてくれさえすれば、仕事と遊ぶのと區別出来るのだが、一時間何ぼで働いてゐる米國人だけあつて、夜のゲームで金を取るとは考へものだ。

さて、マスゲームを見た。日本は、柔道と剣道をやつた。アナウンサーは英語で、柔道と剣道を説明してゐるが、白人の觀衆にはわからぬらしい。その證據には、柔道の人々が、型をやつたり、又は芝生の上で亂取を演じたり、剣道の人々がかげ聲勇ましく眞個の刀で型を見せたり、お面お小手竹刀で野試合を演じて見せると、頻りに拍手する。が、それが感心の拍手では決してない。おどけ芝居を見た時の笑ひと拍手である。

少し癪にさはつたから、僕は背ろを向いて大きな聲を出して「オリムピック・レコード！」といつてやつた。新記録の出る度にアナ君がいふ調子をまねたのである。シャレと同時にたしなめてやつたつもりなのである。

すると、外人の一郡、最初わけのわからぬ顔をしてゐるが、シャレとわかつたのか「イエ

ス／＼」とうなづいて拍手した。こいつは面白いと感じたが、たしなめられた方は、たしなめる人が人丈けに、通じなかつたらしい。

水泳では日本が斷然氣焰をあげたのは、毎日見に行つてゐる僕等にとつては甚だ愉快であつた。

こゝに一つの悲話がある。

「水泳の小母さん」こと和田とよ子さんだ。この人は、水泳の方の、殊に女の選手の世話を随分よくした。男の選手も大分厄介になつてゐる。

だから「小母さん」は、彼れ、彼女らの泳ぐのを見に、わざ／＼米國までやつて來た。來る時は僕と一緒に春洋丸であつた。ロスアンゼルスに着くとすぐに、水泳場へ練習を見に行つた。その時も一しよであつた。

所で、その小母さんは、五六日姿を消した。五六日すぎて都ホテルの廊下でまたぶつかつた。聞いて見ると氣の毒に、折角こゝまで來たのに、水泳の監督が小母さんをノックアウトして、オリムピックへも入れなければ、練習を見に行つて、選手の席の方へ入れることも禁じてしまつた。小母さんは憤慨して、ブイト、アメリカカ旅行(?)に出てしまつたのである。

「餘りに情なうてなりまへん」と、小母さんはいつた。お察し申す次第だ。監督先生も、義理人情をわきまへぬ。

羅府には日本人が三萬位ゐる。各縣人會が、その出身の選手を招ぼうといふのでも、監督が出席を許さぬ。殊に女の選手は全くの籠の鳥だ。

愛知縣人會が、十三日の夜、漸くにして歡迎會の希望を果し、僕も陪賓に招ばれて行つて見たが、前畑、渡邊など、女の人氣者が來てゐない。まいて見れば杉本とかいふ監督が、交渉に行つた縣人會長加古清一氏に向つて暴言を吐き、あまつさへ記念品だけでも贈りたいと言つたに對し、「荷物になるから貰はぬ」と答へたさうだ。かういふのは、無禮者である。スポーツにファンがなくて發達すると思ふ馬鹿者である。

競技中ならまだ理由はあらう。十三日にはもう全部済んでしまつた後である。それでも檻から出せぬやうな危険を感じる程、女子の選手を輕蔑し、血と涙で今日の位置を獲得した在留邦人の母國なつかしき心情を汲まぬといふのなら、たゞ、馬鹿野郎といつたゞけでは済まされぬ氣がする。

祖國なき二世

百メートル競走の決勝で星條旗を掲げたのは「米國人」だ。二着も「米國人」だ。ところが、この兩人とも黒ン坊である。ハテナ、これは間違ひぢやないかと、僕は望遠鏡を取り上げて見なほした。が、やっぱり顔の眞ッ黒な、頭髪の縮緬な黒人だ。しかし胸には、ちゃんと星條旗のマークをつけてゐる。まさにアナウンサーの呼ぶごとく「オブ・ユナイテッド・ステーツ」である。

問題はこゝにある。

日本人のいはゆる第二世、すなはち米國生れの日本人は、米國の市民権をもつ。もし第二世の中からオリンピックの選手を出せば、黄色米國人として、星條旗を掲げ得るのである。が、黒色米人は、果して「米國が勝つた」名譽と感激をもつであらうか？ 決勝に勝つた黒い米人君は、米國歌の奏されるとき、他の人々が直立不動の姿勢で敬意を表してゐるのに、足を開いて、ダラシのない恰好で、高く掲げられた星條旗の方を眺めてゐた。彼れは自分が

勝つた嬉しさ以外に米國の名譽なんていふことを考へてはをるまいと思はれた。

御承知の通り、國籍の如何を問はず、米國で、黒人は最も卑しめられる。支那人、日本人以上である。平常はいぢめられてゐるが、國旗を掲げるときだけ尊重されるんでは、ロボツトに過ぎない。

日本人が卑しめられる程度は、黒人や支那人よりはましである。支那人だと、船員の場合など港へ着いても上陸させぬ。ナイヤガラ瀑布見物に行つて、對岸のカナダに渡らうとしても許可しない。日本人は「支那人と間違へられぬ爲に、特に旅行券を持参すべし」と旅行案内に注意してゐるくらゐだ。

いはゆる第二世は直ぐにわかる。日本生れのそれの如く目がきつくない。顔にしまりがない。彼れらの日本語は、われ／＼が日本で聽く支那人のそれである。

米國の小學校で教育される彼れらは、日本語學校へ「制限された一時間」通ふのと、家庭で「父母からいぢめつけられて、日本語をしゃべらされる」以外に機會がない。彼れと彼の女に取つて、いかに日本語が苦痛であるか知れない。

或る同郷人の家庭で、僕は、M夫人から嘆聲を聽いた。「懲り／＼した」といふ言葉を、子

供がわからぬ。子供は字引をひくがなほわからぬ。母親は英語の「こり／＼」を知らぬから説明のしやうがない。と、倅と娘が、母親にわからぬ英語で、いかにも楽しさうにふざけはじめるのである。日本語をしやべるとき、子供達は甚だ憂鬱に、借金取りに責められたやうな表情をするのである。

M夫人は子供に、天皇陛下と日本帝國の有難いことを教へこまうとする。日本人が米國で黒人や支那人より威張つて(?)をれるのは、國家があるからだと説明するけれど、よくわからない。米國市民としての公民教育を受け、米國第一主義を教へられる子供達に取つて、無理ではないのである。子供に取つては先生が一番偉い人だ。その先生は米國化教育、米國第一主義、米國大帝國主義の蓄音機である。M家の十二になるボーイに、「君の友達はみな親切か」と、日本語で質問して見た。よくわからぬ。次に英語で同じ言葉を發して見た。すると彼れは急にニコニコして、「僕の友達はみな親切です。僕のクラスに日本人は僕一人です」と答へた。

しかし、彼れが先生に連れられて、皆といつしよに或る泳ぎ場へ行つたところが、日本人なるがゆえに入るを拒絶されたといふ悲話がある。

かういふ子供が成人して、大學を出る。就職難となる。こゝではじめて、白人が自分達の敵であることを知る。就職し得ても、それから先白い友人とはとても競争が出来ない。ますます憂鬱になる。人種を考へる。ネーションを考へる。日本歴史を眞剣に研究し出す。が遅い。日本にかへつても中途半端で食へぬ。メリケン大學出と割引される。日本へ還して學校に入りたい——これが移民諸君の念願である。

米國化主義大いによろしい。日本もケチくさいことをいはずに、どし／＼米國人にしてしまふがいい。が米國が、米國化した日本人を、依然日本人として差別するところに問題がある。悩みがある。反目がある。万が一、日米戦争でも起つたら? 恐るべきことだ。目下のところは、第一世なるものが存在する。M氏やM夫人は第一世である。第一世がみな死んでしまつた後は、米國の市民権を有する第二世以下第三世、第四世……になつてしまふ。市民権のない者は、永住の目的をもつて入米されることを、移民法で拒絶されてゐるからである。この次ぎあたり催されるオリンピック大會には「黄ろい米國選手」が澤山出て來て、星條旗を掲げるであらう。

第二世に向つて「日本チームが勝つてくれなくちや困るね」と呼びかける。彼れと彼女の女

は不審な顔をする。「どつちが勝つても同じぢやないの」といふ。甚だしいのになると「米國チームに勝たせたい」とハツキリ答へる。

こゝで大和魂を論ずるのは野暮だ。

米國通であり、肚も膽もある桑港の若杉總領事は、僕にかう話した。

「一番大きい問題は、二世である。下手をするとアメリカ・インヂアン同等になつてしまふ。うまく指導すれば、米國の中に、或る特殊な日本人が米人と對等に存在し得る。自分は一生懸命で研究しつゝある。君達は、祖國に在つて大いに應援してくれたまへ」

二世の親は「移民」だ。自分達は苦勞して今日をなしてゐる。せめて子供には樂をさせたい。——そこで子供は、のんびり育つ。少くとも白人との差別待遇を知るまではのんびり育つ。日本魂の代りに、米國流の社交術に長ける。ダンスは彼れらの重大なる題目である。オリンピックなどどうでもよろしい。ダンスの會合が何日あるかに、重大な關心をもつ。親達が日本流の道德觀念から止めさせようとしても、白人道德を奉ずる二世には通用しない。世界の人種展覽會場だといふロサンゼルスに来て、僕の關心はオリンピックを超越した。

この通信は八月一日、ロサンゼルス・オリンピック・スタジアムの新聞記者席で書いてゐる。兩隣は米國の記者である。頻りにタイプライターを叩いてゐる。僕のかいてゐる字はもちろん彼れらにわかりつこはない。わかつたら憤慨するかも知れぬ。初日から星條旗が頻りに上る。日章旗はまだ一度も上らぬ。黄ろい米人でも我慢するから、何んとかしてくれといひたい氣持ちだ。

酒の自由な禁酒國

ロサンゼルス・スタジアムの新聞記者席で書いてゐる。八月十日頃、夜、オリムピック・スタジアムで米國式フットボールの試合があるので見物に出かけたが、合の外套がなくて寒くてやりきれない。日中暑いには暑い、汗をかくといふことがない。七十度を越えぬ。たゞ無暗に空が透明なので、色眼鏡をかけずにゲームを見るのはかなり辛い。色眼鏡は別嬪さんでもかけてゐる。蚊も蠅も虱も虱もない。夏の輕井澤と思へば適當であらう。それでゐて、冬寒からず、ゴルフリンクの芝は年中青いといふ。金持のゴルフ狂は、こゝへ來るがいゝ。

道路のいゝのは、又た一驚に價する。カリフォルニア州は、米國一道路がいゝといふが、なるほど、京濱國道や阪神國道よりも上等な、アスファルトの自動車道が、どんな片田舎へでも通じてゐる。四五十マイルのスピードで障害のない田舎道を走ると、日中でも肌の寒さを覚える。道がいゝのは結構だが、どこへ行くにも距離が遠すぎて困る。僕の泊つてゐる日本人街の都ホテルから、陸上と水泳の競技場へ三十分。ロングビーチのボートの競技場へ五十分。馬術のリベラへ一時間、といふ風に、道路を自動車で飛ばせてこれだから、電車や徒歩で、オリムピックを見物して歩くわけにはとても參らぬ。

「一寸そこまで行つて来る」といふから「何マイルあるか」と訊けば、三十マイル、五十マイルだといふ。

幸ひに、僕も自動車を一臺手に入れた。青山學院を出て、ロ市郊外のホイテイヤといふ所のカレツヂにゐる辻亮君といふ學生が、フォードの二人乗りを持つてゐる。その人を紹介された。僕は彼れのために、オリムピックの新聞記者章を工面した。暑休で、暇で、しかも働くに口がなく、競技は見たい。といつて全部の通し切符を買へば五六十ドルを要する。僕は彼れと共に歩く。彼れは入場券を手に入れた。ガソリン代と飯代は僕の持ち、といふ約束で

ある。

通譯にもなれば、案内人にもなる。時には祕書の仕事もしてくれる。競技の合間々々には見物にも連れて行つてくれる。まことに便利で安い。ガソリンを五十仙買へば百マイル位走れる。飯代は贅澤(?)しても一日一ドルである。

酒さへ飲まねば、豫算(一日十五ドル)の半分も要らぬ。

その酒だ。殆んど自由に飲める。

僕は同郷の人に頼んで、日本酒を手に入れた。ビール壘詰一本一ドルである。もちろん日本酒の味とは遠い。が、アルコール分は強い、故に効果はある。夜おそく、室にかへつて来て、一風呂浴びて、コップで冷を一杯ひつけて寝るのである。

土曜の晩に、郊外のキャバレエに行つた。白人きりしか行かぬ所へ、日本人が男女數人で押しかけたのだ。印度人の踊りを見たり、或は自分達が踊つたりするのだが打ち見わたせば、彼所でも此處でも、大分酔つばらつたのが氣焔をあげてゐる。隣のテーブルの男が、僕らの方へ向いて「君酒を上げようか」といふ。先生、内ポケットからウキスキイを入れた平べつたい魔法壘を出し、かくすやうにして、ポツチリついでくれた。これもオリムピックで

日本人が好評を博した餘慶だと知つた。

ひどい奴は、女と踊りながら、内ポケットから例の奴を出して飲んでゐる。もしそれ、テーブルの下をのぞいて見たまへ、大概の所に、清涼飯料の壘が、酒を藏してすましこんでゐる。

そのくせ、入口には、巡查が「酒の監視」をしてゐるのだから、米國つて、斷然愉快な所である。

酒は自由である。

但し、僕に物足らぬは、飯を食ふ時公然と飲めぬこと、まづくて高いことだ。従つて量を多く過ごさぬから、僕にとつてはそれだけ、禁酒國の效能はあるわけである。散歩のかへりに、カフェによつて一杯、といふわけには行かぬので、甚だ間が抜けてゐる。

僕の泊つてゐる都ホテルといふのは羅府では安宿だ。體育協會の事務所がある。幹部平沼の亮さんはじめ今村次吉氏等々大勢ゐる。岸會長と、加納名譽會長は、三四十ドルの室代を拂つて一流のアンバセダ・ホテルにゐるが、各社の特派記者は大概こゝだ。期せずして日本新聞ビルディングになつた形だ。その上、放送局の寶田、松内、河西、島浦の諸君も僕の隣

室を四間占領してゐる。

學校の先生がゐる。縣の役人がゐる。東京市會議員がゐる。毛唐人は一人も泊つてゐない。

禁酒の國にゐながら酒に不自由はない。もつとも日本酒と僭稱するドブコク様のが、一寸大きいウキスキグラス一杯五十仙。日本金の二圓だから、友人よ安心せよ、酔ひしれるほど頂戴するわけには參らんのである。

或る所から放送局の連中へ、上等な「藥」が一本贈られた。松内君が自分の室へ持ちこんで、右の睡眠藥をのんで寝てしまつた。僕はおそく歸つて、たゞき起した。そして同じく香りの高いスコッチの藥を飲ませて貰つたなどいふ事件も、笑ひ話になつてゐる。

禁酒になつて、酒をのむことが流行する。飲酒は一種のおしやれである。女學生さへ飲む。上等な宴會では、ひそかに酒を出すことを以て、最も御馳走とされる。禁酒令は逆に飲酒を奨勵した。

禁酒解禁に反對の急先鋒をつとめるのは、密輸入業者だ。もうからなくなるからである。酒をのむな、煙草をすふな、赤い本を讀むな、何でも彼でも「な」で片づけられると考へ

たがる日本人の役人に、一寸御参考に供したいと思ふ。

圓は安いが物價も安い。メインストリートのキャフェ・テリヤ。御承知の通り自分で盆をもつて料理を貰つて、金を拂つて、自分のテーブルにもつて来て食ふ所である。カレツヂ・ボーイに連れて行つて貰つた。スープ、肉、野菜、パン、菓子、コーヒイ、これだけで二十五仙である。うるさいやうだが日本金になほして一圓。一圓でこれだけ食はせる所が、銀座の真ん中にあつたらお目にかゝりたい。

靴、上等らしいのが二ドル半、三ドルの札がついてゐる。洋服が純毛三ツ揃ひで二十五ドルなら上等だ。ワイシャツはポプリンで七八十仙、一ドルならよろし。

都ホテルの室料は最高五ドル、三ドルから二ドルである。圓爲替が安いから、おつき合ひにこちらの物價が下落したのではない。百圓が五十ドルの時の考へでなくとも、日本より却つて安い。

ドルと圓とを、いつでも爲替勘定で考へるくせはだん／＼ぬけて来る。仙は錢と區別なく考へる。危険でもあるが、かうならなくては重苦しくて仕方がない。こちらにゐる日本人は、決してドルといはぬ。圓と呼んでゐる。「上等の靴が二圓五十錢、安いな」といふ風であ

る。二ドル半だから十圓だと考へるのは、うるさいのである。(十圓でも日本より安い)

電話のサービスは實に速い。電報も會社の競争だから速い速い。オリムピック・スタヂアムの新聞記者席へは、各電信會社、電送寫眞會社が出張所をおいて、そして實に奇觀なことには、注文取りが競争で記者席を縫つて歩く。タイプをたゝくそばから、ひつたくるやうに持つて行つて、電信技手に渡してゐる。

スタヂアムの上へ、飛行船や風船で廣告が行はれる。飛行機が煙幕で廣告の文字を書いて「買へ買へ」を責め立てる。それどころか、競技毎に馬券ならぬ人券が、公然と賣られてゐる。

スポーツ精神よりもまづ商賣だ。

スタンドで目につくのは、誰れも彼れも光線よけの色眼鏡をかけてゐる。空氣が透明すぎて光が強すぎるためだ。

日本製の日傘を賣つて歩いてゐる。「スーベニア・バラソル！」と賣子が呼んで歩く。一本十仙が元値で四十仙になるのだといふ。さういへば市中で十五仙の煙草が、こゝでは二十仙である。

明治神宮野球場の、或る時代のやうに権利金があるのかも知れぬ。

墓と自動車

オリンピック競技のスタンドに、日本人が殆んど来てゐない。松内君の放送を聞きに行つたら、彼れは頻りにスタンドの同胞云々をアナウンスしてゐたが、あれは負け惜みである。いはゆる「名調子」である。来てゐるのは、新聞記者席の連中、日本からわざわざ見物應援に來た連中（それも爲替が餘りに悪いので取止めた人が可成り多い）位なもので、米國中における日本人の名所といはれ四萬人もゐるといはれるロサンゼルスにおいて、この風景は實に奇觀である。

がしかし、一枚皮をはいで見れば不景氣の仕業だ。入場式の入場券が三ドルである。日本金にすれば、十二圓に近い。普通の日が二ドルである。失業してゐる諸君に、そんな金はない。業務にいそむ人々に、そんな時間の餘裕はない。ロサンゼルスの日本人街は、オリンピックが始まつたら、日本人が澤山來て商賣が繁昌するだらうと狸の皮算用をしてゐるが、

景氣のいゝのは日本人宿都ホテルだけで、その他の商人の手へは、一向に金が落ちない。土産ものでも買はうといふ餘裕のある人は、ブロード・ウェイの白人商店へ行く。

體協の或る役員が、在留邦人の母國なつかしき歓迎會の申入れに對し「移民の厄介になんぞなるものか」と放言したとかで、問題になつてゐるのを聞いて、僕は目を閉ぢた。

スポーツもよろしい。オリムピックも結構だが、この或る役員のやうに、國家を忘れたやうな考へ方をしてゐる人間は、大會々場で日章旗が掲揚され、君ヶ代が奏されるやうな場合に、それは單に「スポーツに勝つた」感激以外ないかも知れぬ。大馬鹿者である。

さういへばアンバセダ・ホテルに泊つてゐる岸會長の室料は一日四十ドルだといふ。アメリカを見ろ！ 何でも彼でもアメリカ第一主義だ。「世界一」だといふ、ロサンゼルス の墓場を見て、なるほどアメリカン・ファストだなと苦笑した。まるで大公園である。僕が行つたのは日曜日であつたが、自動車が澤山ドライブしてゐる。金持が死體を預けておくといふホワイトハウスがある。月に十何ドルとか拂ふと、死體をガラスの瓶詰にし、アルコールで漬ておいてくれる。遺族や戀人は、時々死體にお目にかゝりに出かける。僕が行つた時には、子供を連れて若い未亡人らしい美人が、しめつばい顔をして白聖館の中から出て來

た。この美人、何れ近い中に死體の保管料を納めなくなり、誰かと結婚するであらう。も一つ、アメリカ人らしい考へ方。

墓の石を立てることが流行しなくなつた。地面に、鐵や石の平つぺたい板を置いて、それに誰々の墓とかいておく。一面の、公園らしい芝生の中に、ポツ／＼と順序よく、平板の墓が在る。

墓標を立てると、つひ感傷的になつたり、又た美觀を損するからの由である。死んでしまつた者が、生きてゐる人間の目や神経に損害を與へることは「公園」の手前、甚だ相濟まぬことである。説明を聞いて、僕は微笑を禁じ得なかつた。

自動車の多いことでも、アメリカン・ファストださうだ。ハワイでもさう感じたが、ロサンゼルスへ来て、更らに目を圓くした。四人に一人の割合で、車を持つてゐるといふ。一寸用足しに行くはもちろん、散歩オーライ、買ひ出し、出勤、何でも自動車だ。田舎の百姓が俵を連れて、十マイル二十マイルを突破して買ひ出しに来る。

オリムピックを見に行くに、誰でも自動車に乗つて行く。従つて駐車場が不足である。丁度明治神宮の野球場で自轉車を十まで預かるやうなものだが、安い所で二十五仙、五十仙、

スタヂアムに近い所は一ドル取る。「ここは安いぞここに預けろ」とせつてゐる。

駐車で金を取る所は、市中至る所に在る。ブロード・ウェイの如きは、街に車を止められぬので、近い所に、十五仙から二十五仙位でパークする所がある。パーキングとガソリンを賣つて儲ける。

不景氣につき、ビルディングを潰して、駐車場を作つて、もうける方が割に合ふ由である。そのかはり、車はポロポロだ。東京の圓タクの方が餘程立派だ。古自動車の賣場へ行つて見ると、十ドル位がある。三百ドルも拂つたら相當のが買へる。自分で運轉出来たら、一臺買ふ方が、タクシーを雇ふより遙かに安い。

タクシーの高いことも世界一だらう。二十分位走ると二ドル。一時間位郊外を走つたら十ドルは當然だ。電車は七仙均一だが乗りようがわからぬ上に、自動車の都ではポツリ／＼とやつて来るだけだから、餘程貧乏人で、もなければ乗らない由だ。

僕の春洋丸が、サンペトロに着いた時、放送局の寶田、松内、河西、島浦の四君が車を持つて出迎へに来てくれた。車にはJ O A Kの紙がはつてある。

「何だ、君達は自動車を持つてゐるのか、せい、澤だな」と僕が驚いたのは百姓である。今期

中、百ドルとかでかりたのださうだ。運轉手は日本人の大学生。暑中休暇の稼ぎである。

電信・巡査・女

電信會社の勉強ぶりには一驚を喫した。オリンピック大會の競技場の新聞記者席へ、ウエスタン・ユニオンとポスターに、テレグラフの二會社が、競争で注文取りに飛び歩いている。記者連中がタイプで打つそばから、ひつたくるやうに持つて行つて、矢張り記者席にゐる電信嬢のところへ運ぶ。嬢は、ピアノを弾くやうな調子に、タイプライターから超スピードで電信を打ち出すのである。嬢らは記者席にありながら、ゲームを見てゐる閑を持たぬ。嬢のタイプライターが、桑港への直通線で運ばれて、そこから日本へ飛ぶ。記者の手から原稿がはなれて三十分後には、日本の新聞社の受信機に文字が流れ出てゐるのだ。

競技場でなく、事務所から電信を打つ場合には、事務所と會社直通のベルを押せば、時を移さずボーイがオートバイを飛ばして取りに来る。日本への新聞電報、一語二十仙（日本金で八十錢也）。

これが日本だつたら如何？ 逓信省のお役人さまだから、電信はお上で打つてやるのだ、といふ顔をする。注文取りになどもちろん來はしない。

まだニューヨーク方面を見ないから、知つた風な口は利けないが米國の巡査は、日本の先生たちより愛嬌がある。

僕の車が、人ごみ——ではない車ごみの中へ駐車しようとして、前にゐる車の泥除けへはまりこみ、動けなくなつてしまつた。辻君と兩人、甚だ困惑してゐると、丁度そこへ、兩人の巡査が自動車を運轉して來た。理由を話すと、「オーケー」とばかり、兩人が車から飛び降りて、われらと共に車を擔つてアウトサイドへ出してくれた。

罰金でも取られる覺悟でゐたのに、この親切さだから、甚だうれしくなり、無暗にサンキユーを繰り返したら「ユー・ベツト」といつたまゝ、叱りもせずに行つてしまつた。

僕の感心した女がある。

僕は、不用意にも、自分が新聞記者たる證明書を日本から持参しなかつた。世界一周旅行だから、米國にのみ通用するオリムピック用の旅券でなしに、正式のものを持つてゐた。

日本係の女の書記が、なかなか僕に記者章をくれない。うっかり信用しては大變だといふ

面をする。癪にさはるが致し方ない。體協で證明してもらひなどして、再び行つたら、はじめてわかつたと見えてすぐに「サンキュー」といつたら、日本語のサンキューは何かといふ。アリガトウだと教へたら、愛嬌たつぷり、大きな聲を出して妙なアクセントで「ウオアリガタウ」と笑つた。

癪にさはつたが、この女が僕を疑つて、質問することは一々ツボにはまつてゐる。日本の若い女には男を相手に、この藝は出来ないと思つたのと、さて、疑が解けたら釋然として「ウオアリガタウ」をいつた調子が氣に入つたのである。

女のことをいへば、女の奴、男と手を組んで街を歩く時、必ず店のショウウィンドウの側にある。中をのぞいて歩く。デパートへ行つて見ると、女の物ばかり賣つてゐる。男物は景物だ。活動でも踊りでも食物屋でも、男と女と一しよに行けば、支拂ひは當然男である。

こんな女どもを女房に持つたら、破産することうけ合ひだ。デパートの女店員が、オリムピック記念のコンバクトを僕に買へといふ。僕には贈るべき情人がないと答へる。奥さんと更らにいふ。奥さんは白粉をぬらぬと答へる——日本の奥さんは皆デコレエートしないかと不思議な顔をするから、白粉をぬる時間に家事を働らいて、良人や子供の幸福を増進する

のだと答へてやつた。女店員は目を丸くしてゐた。女事務員や女店員は、ともかく働らくから尊敬するが、オリムピックの見物も半分以上女である。月曜日にチャイニーズ・コーマンシアタといふハリウッド第一の活動を見物に行つてもその七分は女である。亭主や親父に働らかせて、女どもが遊んで歩く。

米國の女は、女房にする氣になれぬ。こゝへ来て、日本の女は尊敬すべきを發見した。目下、大統領、下院、その他の總改選をひかへて、酒や淫賣の取締が、いやに嚴重になつた。

日本なら、選挙にでもなると、そんなことは却つて寛大になる。をかしい、と思つて調べて見れば、わかつた。米國は女に選挙権がある。再び候補者たるべき現當局者が、女のご機嫌取りをやるんだと知れた。投票の結果を見ると、男は働いてゐるから棄権が多く、女は閑で困つてゐるから投票に行く。閑にまかせて投票する女の一票が大切なのである。

これでは婦人參政權も考へものだ。ニューヨークのコロンビア大學の社會學の教室で、ある時、教授が偉大なる發見を發表した。

「合衆國のある地方には、十九歳の處女が存在してゐる」
すると、滿堂の學生は一齊に笑ひ出した、といふのである。
「そんな馬鹿な話があるものか」——これは日本人の學生から僕が直接聞いた話だから間違ひはない。

「アメリカに處女なし」

これは、日本人の旅行者に取つて甚だ珍妙な話である。日本で十九歳の處女があつた、などといふ大發見を發表したら氣ちがひと思はれるに相違ない。

僕は、しばし見た。夏の夜の公園の芝生、あるひは海岸に灯を消して止つてゐる何十臺の自動車、そこには必ず若い男と女とがゐた。通行人の吾らが顔をそむけるやうな眞似を平氣で行つてゐるのである。この分では、十九歳の處女はもちろん、アメリカに處女のないのは當り前だと肯定できる。

これもある日本人の、ニューヨークにゐる若い會社員から聞いた話である。彼れは米國へ來て半年にして、女の友達を見つけた。ニュウジャージー州から、ハドソン川を渡つて通ふ渡船の中で、ある朝、飯を食つてゐる時、何かの拍子にコーヒーをこぼした。隣の女の着物

にかゝつた。あやまつた。それから、毎日顔を合せた。彼女も會社へ勤めてゐた。——活動へ誘つた、オーライ。飯に誘つた、オーライ。次に……オーライ。
かくして、彼れは白人の女を獲得した、といふのである。結婚する積りは、お互にない。パース・コントロールは女の方がよく知つてゐる。お互に生理的調節をするだけだ、と眞面目になつて話した。

「こんな例はいくらでもありますよ、珍らしくはありませんよ……日本の女のやうな貞操觀念なんか屁とも思つてやしません」

昔はいざ知らず、今日の米國の人間が、貞操觀念をすりへらして平氣でゐる、といふ一つの大きな原因は、自動車にある由である。

自動車は小さな家である。二人の若い男女が、ある時間この小さい家に住む。小さい家は一時間五十マイルの速力で郊外に移動する。海岸なり、山なり、丘なり、勝手な所に移動できる。

移動ハウスは、親父や、おふくろや、近所隣りの金棒引きの目や耳や口から自由に避難できる。

自動車は時間とそして男女間の距離を短縮した。これは米國の學者の説である。僕の發見ではない。

アメリカでは一家族五人と見て、平均一臺の自動車を持つてゐる。誰でも自分で運轉する。男でも女でも。職業運轉手といふ奴は、全米約三千萬臺の自動車に對して五十萬人くらいしか存在しない、といふから推して知るべしである。

自動車革命……まさにさういひ得る。貞操に革命を起した自動車といふ怪物は、經濟革命を伴つた。三十マイル五十マイルの田舎から、ニューヨークとかシカゴとかいふ大都會へ、勤人でも百姓でも勞働者でも平氣にやつて来る。故に田舎町の小商人が立ち行かなくなる。

また、農村では、農耕用自動車の出現で六百萬頭の馬が廢馬された。その結果馬の食ひ物たる草や燕麥の畑が五百萬町歩も無用となり、従事する百姓が轉業しなければならなくなつた。安いガソリンしか食はぬ器械力は、農産物の生産を過剰にした。價格が下落した。百姓は食へなくなつた。そして日本でも同じやうに都會へ、都會へと農民が都會をあこがれて逃げ出すといふのである。

米國人は器械で自然を征服したと考へる。しかし機械は人間を征服しつゝある事實は、こ

の一つの自動車革命に證據立てられてはしないだらうか？

米大陸横斷

ロサンゼルスからニューヨークまで米大陸横斷の汽車は、まるで日本人で占領したかの觀がある。一行十一人。放送局の連中が四人マネージャー格の寶田君、アナウンサーの松内、河西、島浦君、大毎のニューヨーク特派員高田君、東日の寫眞班三浦君、中外商業のニューヨーク特派員奥山君、梁田社長の令息鈴次君、北海道の中學校長で南部選手の恩師だといふ戸津氏、神宮外苑管理所の幸田君に僕といふ一行である。

高田君は米國には長いし、英語もうまし、寶田君も數回の米國通ひ、大して上手ではなさうだが會話に不自由はなし、切符の世話から、食堂で飯を食つた割前の後始末まで兩君に一任して、七日間の汽車旅行を、途中グラランド・カニオンやら、シカゴ市やら、ナイヤガラ瀑布やらを安樂な赤毛布に暮す。

同じ放送局の矢部部長が昨年、やはりこのサンタファイの線に乗つた。たつた一人の日本人

でどこへも下車せず、五日間ぶつ通してニューヨークまで行つたつらさを聞いてゐるから、こちらは大名旅行の氣持がする。

たゞ心細いのはニューヨークから歐洲へ渡る仲間は松内君と僕だけだ。そして兩人とも言葉が自由でない。ラヂオでは、あの位おしやべりな松内君の平常は至つて無口である上に、時々白人にものをたづねてゐる英語の調子はアナウンサーの試験に、いの一に落第する資格がある。何とかいふ米國の名アナウンサーに松内君が會つた冒頭に、僕は英語をしゃべれぬ、といつたら、相手の先生が、僕も日本語がしゃべれぬ、といつて笑ひながら肩をた、いたさうだ。それ以來彼れは、急に氣が強くなつたらしい。寶田君でさへ、チキンサンドウキツチを注文したら、チーズのやつを持つて來られた位である。(僕に至つてはボトルをバターとまちがへられた位である)。

氣取つちや駄目だ。子供の心持になるが、わがらなければ何べんでも聞きかへすがいい。僕でも大概な用のたりののは、旅行中子供になるからだ。こつちが子供になれば、相手は愉快に、面白く話して教へて呉れる。

僕らは、若い娘の四人の友達を汽車の中に持つた。暑中休暇を利用して、小學校の先生や

カレッヂ・ガールやハイスクール・ガールが旅行して東へ歸るのだ。男の乗客が四分で、女が六分である。こゝにも「女のアメリカ」がある。

彼女らは實にフランクである。僕は會話の練習臺に使ふ。彼女らは僕及び僕らから、日本語のオハヨ、サヨナラを教はる、かうしてゐる間に、米國人を理解したり、彼女の給金が一週二十五ドルであることを知つたりする。

これも、しかし白人と黄人だから、男と女の關係を考へずに、こんな面白い交際が出来るのだらう。殊に僕達一行がオリムピックのかへりと知つた彼女らは、異常な興味を持つて交際した。

現にかういふ事實がある。グランド・カニオンで、親子四人連れ、二人の美しい娘が乗馬姿で歩いてゐるのを追ひかけて、頻りに何んべんでもカメラを向けては、やれ向ふの谷を指さしてくれの、笑つてくれのと注文をつける。注文される通りになつてくれた。そして彼女ら姉妹は自分達の住所を聞いて、寫眞が出来たら送つて呉れといつて別れた。

母ぢや人がいふには「これが白人だつたら、娘達を、こんな自由にさせません」

われ／＼が、日本で、日本人の若い娘を追ひかけでもしたら、巡査の厄介になり兼ねない

が、人種が違ふと、性を超越して考へられるらしいのである。黄色人種を輕蔑してなら、かくもフランクではない筈である。

いや待て！ グランド・カニオンや大陸横断の汽車の中は別世界だ。諸君は「黄」がどんなに「白」にいちめられてゐるかを直接知るまい。オリムピックの羅府で、或る日本人は自動車を買ひに行つて「私の店では日本人に賣らぬ」と斷られた。或る人はダンスのパーティーへ夫人を連れて行つて「日本人お斷り」を喰つた。日本選手さへ、或る店で侮辱されて憤慨した餘り「馬鹿野郎！」と呶鳴つて拳を突き出したら、はじめて番頭があやまつた逸話がある。

トウラン、メトカフ等の黒人米選手が勝つた時に星條旗は揚げられて米人が敬禮したが、入場式の日は、彼れら米選手である黒人は、行列に加へなかつたではないか。

僕達は、この汽車の中で、米國禁する所の液體を飲みながら「問題は人種である、そして國家があるか否か、弱いか、強いかである」と意見の一致を見た。一致する所の場所は、白人よりもゼイ澤をして取つたドロイイング・ルームである。

シカゴ屠殺場の感傷

牛、豚、羊を殺すところをストックヤードといふ。シカゴは、それで世界一を誇つてゐる。その中でも世界一だといふアーモア會社の屠殺場を見物した。

午後一時五十分についたら、二時に案内するから十分待て、といふ。その待合室が宣傳室で、コンビーフだ、罐詰だ、ラードだ、バターだ、いろいろの製品の見本が並べてあり、パンフレットに繪葉書に、繪葉書を書いて出すテーブルまで準備してある。二時には二十人ぐらゐの見物人が集まつた。毎日何度もやつてゐる案内者が、名所案内人のやうに先頭に立つ。

いきなり牛の殺し場を見る。

高く鐵板で圍つた中へ三頭づ、牛を追ひこんで足枷をはめる。せまいから、牛の身動きが自由でない。黒人が、慣れた手つきでハンマーをふり上げる。牛の額をいやといふほど一撃する。それで、彼はお陀佛である。次々に三頭叩き殺す。鐵圍ひの戸を開ける。四足を縛ら

れた三頭の牛が小山のやうに、ゴロリとコンクリートの上へ轉がる。可哀相に、まだバタバタやつてゐる。

時を移さず、鐵の釘に逆さにぶらさげられる。黒ン坊が、首を落す。次の黒ン坊は腹を割る。次のは腸を出す。次のは皮をはぐ最初の刃物を加へる。次のは……次から次へ、器械は徐々に運轉してゐる。黒人はめい／＼分業で、次から次へと、職場々々の仕事を果して行く。彼らの着物は牛の血に染んでゐる。手には刃物が無氣味に凄く光る。彼らの顔はもろん眞黒だから血がついてもわからないが、目玉はギョロリと凄い、女子供は一目見たゞけで縮み上つてしまふだらう。(但し、この一行の中には白人の若い女が愛人らしい男と手を組みながら、平氣でしゃべつて歩いてゐた)

一頭の牛が、額を叩かれてから、奇麗に料理されて、肉屋の店頭につるされる如く、氷室につるされるまで三十二分間を要するさうである。

牛は、この屠殺場で、一時間に四百五十頭叩き殺される。豚に至つては一時間に千二百頭、羊が三千頭とある。但しパンフレットには可能力がかいてあるので、不景氣だから、さうは殺さぬさうである。豚は殺される時キヤ／＼いふ。羊は可哀さうだ。屠所の羊といふく

らるで、羊先生は殺されるといふことを第六感で感じるものだから、なか／＼屠殺場へはいらうとしない。そこで、サクラの羊が飼つてある。この羊は先頭に立つて殺されるところにはひる。ほんとうに殺される羊の群もこれについて行く。サクラは誘導の任をおへて檻の外に出される。このサクラのやうな人間が日本人の中には多いやうだ。

移民官への密告は、大概日本人同志だと聞いて、苦笑しながら羊のサクラを思ひ出した。

さて羊は、牛より樂に殺せる。頭を叩く必要はない。足をしばつて逆さにつるした羊の行列に向つて、手に刀を逆さに持った例の黒ン坊は、何の雑作もなくその頸動脈を刺す。それでおしまひ……血をだら／＼流しながら、彼れは次の、首を落す職場へ回轉されて行く。

ストックヤードを見物しながら、生命を考へる如きは、アメリカ女に女大學を説く如く野暮の骨頂である。僕は、たゞ黙々として歩いてゐる中に感じたことは、殺したり、皮をはいたりする役目はみな白人の目から見れば、牛、豚に等しい黒人である。仕上げ場の方へ行くと白人がゐる。美しい娘も箱の中へレードを詰てる。そして白人の方が餘分に金を取つてゐるといふ事實がある。も一つ、かうして殺された肉を、上等の宴會のテーブルか何かで、女と戀を語りながら食ふのは白人だといふことである。こゝでは、白人のみが人間なのだ。

人間を殺すには羊以上に楽なことであらう。たゞ殺しても食糧品にならぬだけである。食糧品にする野蠻人諸君が、人間さへ見れば殺したくなるのは、極めて當然である、としか考へられぬ。

その晩、僕は、ビールの密賣所で、したゝか酔つた。いくらかセンチメンタルになつてゐた證據である。(シカゴ市スチブンス・ホテルにて)

ナイヤガラ瀑布と

グラント・カニオン

シカゴで、牛、豚、羊の簡単な生命を考へた翌日、僕はナイヤガラ瀑布を見物した。學校で習つた通り大きいものである。壯觀である。アメリカとカナダにまたがつて、國境を通過するのに十仙の橋税が取られたり、旅券を見せたり、密輸入者の有無を調べたりするのが、瀑の壯觀を國際的にする。

きのふ見たばかりの牛、豚、羊の生命を思ひ出したので、聞いて見たが、ナイヤガラで自

殺する人間はないさうだ。小便見たやうな華嚴の瀧で哲學的自殺とやらをやつた藤村某といふ男も、こゝへ來て死んだらなほ効果があつたらうが、旅費に不自由したのかも知れない。

日本だと、かゝる名所には必ず自殺者防止の工夫がこらしてある。高い柵をもうけるとか、鐵條網を張るとか、又は制札を立てるとか……。

グラント・カニオンでもさう思つた。景色のいゝ所で死ぬことの好きな日本人なら、好適の場所がいくらでもある。……但し圓が安いので、まで自殺行の旅費が作れまい。アメリカ人もよく自殺するさうだが、死ぬにも金だ。旅費をかけても名所まで來る不經濟な眞似はしない。ガス自殺、ピストル自殺……汽車往生も、デパートの屋上から飛び下りもない。

世界一——何でも世界一だといふアメリカでも、これだけはウソではないといふ——の高い建物、ニューヨークのエンバイヤ・ビルデンクの百四十何階から飛び下りて死んだらさぞよからうに、米人は智慧がないと見えて、金網も何にもめぐらしてはなかつた。

ナイヤガラも世界一だらうが、世界一の看板は残念ながら河向ふのカナダ國にうばはれさうだ。カナダ側から見物した方が、アメリカ瀑も、カナダ瀑もよく見える。もし、それが口惜しかつたら、カナダを占領して、アメリカの領土にしてさふがよろしい。こればかりは

いくら無茶なアメリカでも出来ぬと思へば、苦笑禁じ能はぬものがあつた。

米國旗と英國旗と（カナダは英國なのか、カナダ自治國なのか、兎も角、見覚えのあるカナダ旗でない）を二本立てた小蒸気でナイヤガラ瀑布の下を航行した。ゴムの帽子に、同じく外套を着て、シブキをよける。天龍下ればしぶきにぬれる、持たせやりたや槍笠」どころの騒ぎではない。

この瀑の上を、針金の綱わたりをやつたり、樽の中に入つてころげ落ちて見たりした米國人があるさうだ。自殺するつもりではもちろんない。

更にカナダ側で「裏見の瀑」といふ氣分を味はつた。矢張りゴムのカッパを、着て、今度は魚屋のやうにゴム長まではく、エレベーターで地下へ降りる。トンネルがある。ぬけて行く。カナダ瀑が弓なりになつて落下するその瀑裏を見るのだ。

噴火口に入つた経験はないが、こんな音がするだらう、と思ふ位ゴウ／＼たる音がする。瀑の懸つてゐる岩が、今にも崩れ落ちさうで剣呑だ。岩が欠けて瀑は年々後退すると聞いている。もちろん向ふは見えぬ位、はげしいシブキである。ゴムの上からビショぬれになる。

一ドルの見物料をとられるときいた故でもあるまいが、にげを打つて見物しなかつた松内

アナ君一行に「あんな壯觀はない。これがナイヤガラ見物の底をついたものだぜ」とホラを吹いてやつたら、先生口惜さうに「瀑は表から見ても景色がいゝんだよ」といつて、更に見に降りるとはいはなかつた。

汽車に乗るまで十時間程の見物には時間が餘りすぎだ。カナダへ渡つたら公然ビールが飲める、と聞いたのも泡。この州は米國へのおつき合ひに禁酒だといふ。そのくせ、内所で、いくらか飲めるあたりまで、アメリカにお交き合ひをしてゐる。現に僕らは頂戴いたしたのである。

米國側のナイヤガラ公園の青々とした芝生の上へ一行十名が寝ころんで、白人環視の中に日本語で無責任な無駄話をしたのは愉快であつた。その無駄話で一致した點は、米國の景色とふ奴は、グラント・カニオンでも、ナイヤガラでもやけに大きいだけで、滋味といふものがない。やはり日本のやうに、山と川と水と谷とある風景の方が上等だといふのである。

新婚旅行にでも來たのなら、もつといゝ景色だつたかも知れないが、日本魂にみがきかけるやうな旅行では、アメリカ何者ぞといひたくなるまで、ある。（シカゴ、ニューヨーク間の車中で）

米國人は時間が正しいと聞いてゐるが、米國人經營する所の汽車時間は、人間でない故であらう、時間の不正確な點で、到底日本のその如きではない。

三時間か四時間に一度位づゝ停車場に止る。發車まで十分だ、と車掌がいふ。廿分位には平氣で延長する。黒ン坊のボーイが十分停車だと知らせたのに、三十分停まつて、車掌が驛の食堂で飯を食つてゐた。僕は、あの車掌が食つてゐる間は大丈夫だ、といふので、同じく驛のホテルの食堂でゆつくり飯を食つた位である。

昨年旅行に滿洲でもさう思つた。米國でもさう思ふ。日本の汽車位、神經質に正確で、安いのはあるまい。

この汽車は五日間で横斷するのに、汽車賃が約百三十ドル、寢臺が約四十ドル、百七十ドル、日本金によると六百八十圓である。日本で六百八十圓汽車に乗つたら、日本中を何十べんまはれるだらう。

汽車そのものだつて、なるほどゲージは廣いが、東京、下關間特急の一等車の方が、これより氣持がいい。殊に滿鐵の一等なんか、アメリカ人に見せたい位だ。アメリカが第一主義もこんな安石炭をたいて、大切な洋服や顔を、インド人のやうにしてくれたのでは大したこと

はない。

汽車は暑い砂漠に行く。能なし猿の考へ出したやうな大平原を走る。アメリカ・インディア人が、到る所の驛へ土人作る所の土産物を賣りに来る。メキシコ人の住んでゐた証據に、驛名も多くメキシコ讀みが多い。アメリカ人は、アングロ・サクソンの移民である。英國から獨立した。先住の印度人やメキシカンを征服した。それでゐて、自由だの平等だの、やれ滿洲で日本がどうしたのとホザク。これに恐れをなす日本人がゐる。

おみおつけか濁つたスープで、面を洗つて出なほしておいでといひたくなる。
強い奴が勝つのだ。日本よ、強くあれ！

日本に、徳川の鎖國時代がなかつたら？ 米大陸は、日本だつたかも知れぬ。ハワイ、ヒリッピンはもちろんだ。徳川家光は自分を守ることだけ知つて、國を考へぬ先生だつたらしい。惜しいことだ。

こんな感慨を、僕は太平洋を走る汽車の中の、ドロイイング・ルームの中の二階のベツトで紙に書いてゐる。下では、連中の四人が頻りに眞裸で花札を弄んでゐる。不幸にして僕は勝負ことを知らぬので、國禁液體氏と仲よくするより外に能がないのである。

国立公園グランド・カニオンを見た。要するに下らぬ。

たゞ広い。昔は海だった。氷河が解けた跡だといふ。一同、一向に感心しない。山あり、水あり、青い木あり、溪谷ある箱根あたりの方が遙かに景色がいい、と評議一決した。無理に感心して見せろ、と注文されるなら、自動車が、この山の中を、アスファルトの路の上を、二十五マイル位の速力で六時間走りまはることだ。その運転手が、カウ・ボーイである。一人前七ドルは高い。サンタ・ファイ會社の獨占だから高い。

車を止めてわれ／＼が見物してゐる間に、カウ・ボーイ先生、フランス女を口説いたらしい。後で「ベリ・ハード、ベリ・ソリイ」と苦笑して見せた。赤いシャツを着てツバの広い帽子を被つて粹な長靴をはいて精悍無比な男らしい面つきをした先生の口説きそこなつた告白は、一同の拍手と哄笑を、暴風の如くまき起した。(米大陸横断の車中にて)

華盛頓・紐育

アメリカの首府ワシントンを見物した。例によつて日本人一行六名の多数である。朝の九

時から、夕方の五時まで、自動車を一臺雇ふ。一人前四ドル五十仙の割前である。(何でも割前で行くのがアメリカ式だ)

何とか博物館、記念館、記念塔、議會、街、さては郊外遠くヴァージニア州のヴァーモントといふ所まで飛ばせて、國父ワシントンが隠棲して死んだといふ家まで滞りなく見た。彼はこの上で死んだといふベッドまで見物した。

さて見物を了り、夜になつて一風呂浴びて、精神を落つけて、雑多な印象を整理して見ると、残つてゐるものは「俺はけふ、要するにアメリカの侵略史を見て、アメリカのデモンストレーションを感じたのだ」である。

到る所にワシントンの肖像が掲げてある。次いでリンコルンの像がある。星條旗が出てゐる。驚き入つたのは造幣局であつた。こゝでは、ドルの紙幣と、切手を印刷して作る。

おせつかいに、ヒリッピンのまで作つてゐる。専門の女案内人が數人ゐる位だから、見物人が多い證據だ。女案内人が、見物人のかたまり出来るのを待つて、連れ歩いてホラを吹く仕掛けである。幸ひにして英語のホラだから、こつちではホラとして驚かなかつたが、目に見るものは、英語も日本語も同様だからビーンと来る。

紙幣の印刷機、番號をうつ機械、揃へる機械、裁斷器、何しろ器械のアメリカだけあつて器械萬能でドル紙幣を作る。その器械の一つ一つに必ず星條旗がひらく／＼翻へつて、ワシントンの像が御神體のやうに掲げてある。幼時、櫻の木を切り、長じてはアメリカを獨立させたワシントンだから偉いには相違ないが、かう小うるさく見せつけられては、少々馬鹿げて來る。ドルの米國のドル製造所だから、ワシントンと星條旗で姿勢をつけてゐるのかも知れないが、國旗運動はこゝばかりではない。アメリカ到る所、ホテルでも商店でも、料理屋でも、まるで女が白粉をつけるやうな氣で國旗を掲げてゐる。

アメリカでは、世界大戰以來國旗が流行り出したさうである。世界戰爭に参加してドイツを敵にまはすための算盤勘定を立てるのに、時のウイルソン大統領は大分苦心をした。それはわかる。アメリカといつても、英本國と獨立戰爭を争つて、USAを作り上げた英本國の系統といふものは、一億二千萬の中一割位しかるない由である。殊に米國一の大都會たるニューヨーク市においては、六百萬の人口中二百萬が「米國人の卑しめる」ユダヤ系米人である。シカゴにおいてはドイツ系米人、ボストンにおいては、英本國とはつねに犬と猿のアイランド人が多數を占めてゐる。

その他、イタリー、オーストリー、ハンガリー、ギリシヤ、メキシコ、ニグロ、支那人、世界のあらゆる人種が「米國人」になつてゐる。

建國當時の英本國系米人達は、自分達が宗教的迫害を受けた苦い經驗と、廣大なる米大陸を開發する必要から、自由平等を吐の底から叫んで歐洲移民を歓迎した。藥が利きすぎて、英國系ならぬ異宗教の東歐移民や、アイルランド移民がどしどし入りこんで、本家アメリカの姿はどこへ行つたかわからなくなつた。ニューヨークの如き、金もつけはユダヤ人に占められ、政治の方はタマニーホールの本家アイルランド人に獨占されてしまつて、本家本元はワシントンに在つて、僅に政治的支配階級の美名を有するに過ぎぬ状態だ。

しかも、全體的に米國人に取つて、大統領なんか誰れでも構はぬ。邪魔にならぬ人間ならよろしい。實際政治は「見えざる政府」資本家や大工場主や、新聞やが左右する——といった状態で、世界戰爭には、必ずしも國論が一致せず、いざ參戰と定まるや、ドイツ系米人はドイツに對する愛國心をふるひ起してどしどし參戰する。といった變態米國民が出る始末、そこで、支配階級はあわて出した。

國旗の掲揚、ワシントンやリンコルンの肖像の流行を刺戟した。何でも彼でも、米化運動

のシンボルとして星條旗やワシントンを使ふ。

かゝるが故に、ワシントン市の博物館でも、記念館でも、議會でも、どこでも政府自ら進んで見せる仕掛けに出来てゐる。見物した者は、アメリカの歴史と、その偉大さに感心してアメリカ第一主義者になるやうに仕向けてゐる。

ワシントン市の見物は、要するにアメリカのデモンストレーションと、そして、歴史といふ箔をつけてゐないアメリカが、俺の立派な歴史を見よ。といつて、子供らしく肩をいからせてゐる姿を見るのである——と感じた。

アメリカは不景氣だ相だ。が旅人の殊に都會地ばかり歩いてゐる僕のやうな男には感じられぬ。人から聞いて成る程さうかな、と智識的に知るより仕方がない。

ニューヨークの貧民窟を見に行つた。何れもアパートである。五階位のレンガ建てである。その中に貧民が住んでゐるのだ。が、日本人にはレンガの五階建てといへば、堂々たる氣がするだけだ。

案内してくれる人の説明によると、窓へ洗濯物が干してあるのが貧民窟の證據だといふ。が見れば何れも白いものばかりで、日本のやうなボロがない。また、街頭に果物だ、野菜だ

家具だと露店が出てゐる。これも貧民窟でないと見られぬ風景だと説明してくれたが然らば日本で夜店の出る街は皆貧民窟でなくては義理が悪いと思つた。

世界一の高い建物、八十何階のエンパイア・ステート・ビルディングといふのが破産した相である。けれども依然として開業してゐる、一ドルの見物料を拂つて、テッペンへ上つて大ニューヨークを瞰下した。屋根の上に、室の方へ向けて廣告してゐるデパートの廣告を見て、成る程かうすれば飛行機や高い家の窓から見えるわけだ、とニューヨークらしい點を感じた位である。破産しても、持主が代るだけで閉店しない。が然し、中味の貸室はガラ空きだ相である。室といへば、ニューヨークの不景氣は、夜になつて建物の窓に、灯が見えぬのわかる相だ。好況時代だと、事務所も店もホテルも料理店も、活況を呈してゐるから高い建物の窓が、晝をあざむくやうに輝くのだ相である。

「成程さうかな」と思ふだけでビーンとこない。

一度ビーンと來たのは、ベールブルースの野球を見に行つた時、入場料一ドルの外に十セント取られた。妙だなと思つて聞いて見ると十セントは税金だといふ。この七月の年度變りから、二十八億といふ赤字埋めに新税、増税をやつた。そのとばつちりとわかつた。十セント

でアメリカの不景氣を感じた次第である。

増税——切手を一セント値上げし、銀行の小切手一枚につき二セントの新税をかけ、自動車一臺買ふと五十ドルの取得税をとられ……かくして赤字の穴埋めをやり、その上海軍力でも増すつもりなんだらう。アメリカだけに話しが大それてゐる。

物價は四割位下つた相だが、爲替の悪い圓による旅人には、別に安いとも感じない。すぐに圓の換算をして「高いから止めやう」といふ氣になる。

酒はニューヨークが自由だ。日本食も自由に喰へる。僕は夜になると刺身と奴豆腐とテンブラを喰ひに、日本料理店へ出かけて行つた。酒は大びらに飲める。ちやんとワイロが使つてある由である。

もつとも驚くべきは、禁酒國にあつてはならぬ筈の酒場（スピーク・イージーと號す）が所々にあることだ。公々然と開業してゐる。

僕はしばし、或るイタリ人の酒場へ、ビールを飲みに行つた。コップ一杯二十五セントだ。ウキスキーも、ジンも、ブランデーも……ないのは日本酒位のものだ。看板はレストランとなつてゐる。たゞ普通のレストランと違ふのは表のドアが開けつ放しになつてゐないこ

とだ。巡查なんか鼻薬が利いてゐるから、来たことがない相だ。便利な巡查である。

そのイタリ酒場の親爺、僕がいよゝ明日はニューヨークを發つてロンドンに行くと話しながら三杯のんで七十五セント拂つたら一杯出して「これは僕から君にあげる」といつた。送別の意味だらう。何となく嬉しい氣がした。

あの親爺の顔が、いま大西洋の眞中を航海してゐる僕の目に、ハッキリ浮んで来る。（ペレングリア號にて）

◇
この手紙は、紐育から森に宛てたものである。彼は家族の者に、「山浦君にかへせ」と渡してをいたのださうである。

今九月六日、堀内總領事の案内で、銀行支店長等と飲を食ふ。正金園田、三井高木、住友原田、日銀嶋居、臺銀平野、鮮銀櫻澤、彼等が小生に聞かんとする話は「日本の政界がファッショに轉向するや否や」可能性充分ありと答ふ。彼等が米國にありて取りつゝある情報、感じ方も亦同一にして、寧ろ小生より先走り居るのを發見せり。

森恪の存在は、フアッシュヨが話題化すると同時に何人にも問題にさる。殊に今議會の演説は米國新聞の評論となり、邦人の話題となる。而して邦人は「森は亂暴なことをいふて米國を刺激して困る」に一致す。ワシントンの加藤參事官然り、支店長等は可否を言はねど「アメリカの新聞は、森君は現在責任ある地位に在る人でない故、彼の言説をシリアスに考へる必要なしと評して居れり」と云ふ。スチムソンの感情を刺激すること勿れ、彼は面子の問題として、又選舉題目として、日本にやりこめらるゝことを甚だ好まず。日本は黙々として己れの行く途を行けば足り、之を以て最も有利となす。

これ邦人の一致した意見なり。森は今日の話題の人にして危険視されて居れり。

白鳥情報部長の評判、アメリカ新聞記者に悪し。日本外務省のスポークスマンが白鳥なることは誰も知る。而して彼が強いことを放送すれば「また白鳥か」といつた調子なり。

白鳥氏の放送に關し、ワシントンの加藤參事官は「彼は軍人の若い連中や、森恪や、平沼と相通じ居るが故なり」と解し、堀内總領事は「白鳥のは對外より對内意味、即ち外務に人なきに非ずといふ所を軍部乃至フアッシュヨ連に示す爲めなり」と解す。

白鳥氏が米國側を刺激する放送をなしつゝあるは事實なるが如し。ワシントンにて陸軍のアッタツシエ田中大佐、補佐中西少佐と酒を呑む。彼等はサスガに森を危険人物視せず。

米國が日本に對し積極的に戦をいどむことはあるまい。支那がロシアの尻馬に乗ることはあり得べしといふ。

加藤參事官は、これも米國が先に戦ひかけることはあるまいと斷じ、日本の自重を要望し、日米戦争なきを切望し居れり。

明七日はベレンガリアでロンドンへ。

元氣で旅行して居ります。

九月六日

紐育ペンシルベニア・ホテル

山 浦 貫 一

森 先 生

日米戦争起りなば

「日米戦争は果して起るか」

かういふ質問は、到る所の在米同胞から受ける。「もし起きたら君はどうする」と反問すると、「カナダへ逃げる」と答へる。或は、船が都合よく間に合へば東部の者は歐洲へにげるか、西部の者は太平洋をわたつて日本へ歸るといふ。

彼れらは眞剣に日米戦争を豫想し、その時期を氣にやんでゐる。

ところが、アメリカ人の方は一向平氣らしい。日米戦争が起らうが、起るまいが、金も上がりさへすれば差支ないのださうである。

『上海事變の起つた當時である。大學の教授達が日本品のボイコット運動を起し、絹の使用をやめるやうに宣傳したがもちろん成功しなかつた。

『アメリカの女は、今更ら絹の衣物と靴下を木綿に還元する氣はない。不景氣だからやむを得ず人絹の靴下をはくが、お金さへあれば、最上等の日本絹のシャツを買ひたくてしようがな

い。それに、衣物は薄地のものからだん／＼厚地の流行に變つて、日本の縮緬様のものがトップを切つてゐる。従つて絹の需要が増しつゝある。さういふ際に、かけがへのない日本絹のボイコットをするなどは、米國婦人の存在をないがしろにするものである、と憤慨する。

女にとつて、上海よりは靴下の方がより大切である。この女が、御承知の通り參政權を有してゐる。大統領選挙をひかへてゐる。おまけに、女は戦争の慘禍を、近くは世界大戰で見た。故に平和運動は女の中のミツシヨンによつて行はれる。アメリカで女の輿論を無視すると、大統領でも何でもすぐ落選だ。落選したら戦争を命令する力を失ふ。

絹のついでに、米國は日本から絹を輸入して、それを原料に衣服、靴下はもちろん、飛行機その他、いろんな生産をやる。この生産高と、これによつて衣食してゐる人間と、これが大學教授の机上の空論と引きかへに出来るか出来ぬか、一寸考へればわかる。

日本の絹を原料にしてゐる製造工場が千六百四十八、従業員が三十萬人、家族を加へれば百五十萬人に上る。

おまけにも一つ、米棉において日本は、米國に取つて世界一のお客様である。米棉輸出總額の四十七パーセントは日本へ輸出される。も一つ、米國が、株式や公債社債で日本へ投資し

てゐる額が四億五千萬ドル……戦争をやれば、これがファイになる。だから大多数の實業家は日米戦争に賛成しない。賛成なのは軍需品製造屋位なものである。

たゞしかし警戒を要するのは米國人、殊に米國女の付和雷同性である。政府や新聞が盛んに「日本怪しからぬ、支那援くべし」の太鼓を叩いてその宣傳が効を奏した場合、ヒステリック性の女は逆上して、宣戰論者に看板をぬりかへぬといふ保證はつけられぬ——これは専門家から僕の聞いた話である——。

また人種の複雑さから来る問題であるが、對獨宣戰のやうに困難ではない。日本人は全米に數へる程しかるない。ドイツ系米人、乃至ドイツ人に味方する歐洲人に比べれば物の數ではない。政府の方針が日本と開戦するに決定したとしても、自分達に直接影響はないから「やりたければやるが、儲かるやうにしてくれ」位で済ましこんでゐるであらう。

たゞ、いろいろな方面から見ても米國が積極的に日本一國を相手に戦ひかけるといふことは萬々ありさうもない。といふことが、ワシントンやニューヨークにゐる日本の外交、軍事、實業等各専門家が口を揃へていふ所である。

編 スチュムソンが、艦隊を太平洋沿岸に集中した。彼れ一流の神經質の作用である。これを米

海軍の當局者にいはせれば「スチュムソンの大馬鹿野郎」である。艦隊を集めて日本を刺戟して、萬一ウソからマコトが出て戦争になれば、日米兩海軍が共倒れになる（米國が負けるとはいはぬ）、何の効能があるか、といふのである。

排日新聞として知られるハースト系の新聞は「日本が滿洲をどうしようと、米國さへ侵さなければこつちの知つたことぢやない。スチュムソン君、あまり神經を昂ぶらせるな」と皮肉つてゐる。これが米國國粹主義者の代表的言辭のやうである。

スチュムソン國務長官といふ先生は新聞からも、政治家仲間からも外交團からも、評判甚だ香ばしくない。もし十一月の大統領選舉に共和黨が再勝して、フーヴァーが再選されても、國務卿だけは取りかへねば納まるまい、と評判される位だ。

そこでスチュムソン先生、自分の面目保持のため、選舉のため意地になつて滿洲問題で日本をいぢめようとする。つまり對内政策に日本を使つてゐるやうなもので、こちらに取りまこと有難迷惑の話である。

スチ君は辯護士で、金持ちで、苦勞を知らずに育つた人で、従つて正直者ではあるが氣の小さい神經病みである。そして自分の面目を考へ、手柄を誇りたい。だから米國內で評判が

悪い、とかういふわけである。

彼れが氣の小さい證據にかういふ挿話がある。今年の正月だ。錦州が陥落した日だ。その晩、丁度ワシントンで出淵大使がスチ君を晩餐會に招んであつた。ところが、錦州陥落と來た。スチ君機嫌が悪い。

「僕が今晚、足下の晩餐會に出席したとあつては、世間の聞えもどうかと思ふが、如何にしたらよろしからう」

と、日本大使館へ電話をかけて來た。「左様であれば貴下は病氣といふことにして御缺席になつたらよろしからう」と返事をしたさうである。

肚と膽のある政治家なら、大びらに出席して、大使秘藏のうまい酒でも飲みながら、

「餘り僕の面目をつぶして貰ひたくないね」

位のことをいつて、出淵大使の肩でも叩くところなんだが――。

困つたことに、米國のデモクラシーにおいては、大統領は萬人向きの凡人でなければつとまらず、大統領の任命する國務長官なる先生が事實上の總理大臣なんだといふから始末が悪い。

序でながら、アメリカのデモクラシーは建國當初のものとは全く趣を更へ、腐敗し、行詰り、不景氣が深刻になるにつれて、獨裁政治の傾向が強くなりつゝある。と觀察する玄人がゐる。日本の政黨政治行詰りとよく似てゐると思ふ。

建國の當初は、農民中心主義で行かうとした。それが歐洲移民の大群に押しつぶされた。移民は、都市において商工業を盛んならしめて、建國精神を踏み破つた。農民は商工業者の犠牲になつてゐるのが現状の由である。故に農民はラヂカルである。急進的社會政治思想と運動は、農民の間から起りつゝありといふ玄人の見解である。

話しはもとへ戻つて、日米戦争が起るかどうか、これは甚だ微妙な題目である。やれば米國も損だ。日本も損だ。日本が勝つて見たところで、米國の心臓たるニューヨーク、ワシントンを占領出来る見込みはつかぬ。

理窟ではわかつてゐるが、さて戦争はチョツとした點火から大きくなることは、世界大戰が近いところで證明してゐる。

兎も角、日米の間に危機と素因はあるのだから、萬一の場合を考慮して、カナダ行きの手筈も考へておく方が安全である。(大西洋上にて)

大公使無用論是非

松平駐英大使に會つた。ロンドン大使館である。土曜日の午後十二時四十分頃と思ふ。一時に、どこぞの大使と晝飯の約束があるといふ。十五分會つた。

彼れは僕の質問に答へて、英國の偉大さを話した。マクドナルドの舉國一致内閣を支持して、國民が英國の再建に努力する状態は、とても日本人の眞似出來ぬ所である、と述べた。かくして財政は立てなほつた、と觀測した。その他いろいろある。あとで、ある若い人にこの話しをしたら

「松平さんは英國の酔つばらひですよ」

と批評した。英國は保守と自惚れに災されて、衰運を辿りつゝあるのみだ、とその若い人は觀測した。松平大使は、英國の偉大なこと、そして國際聯盟を絶對的に支持すべきことを語つてから、やをら腰をあげて、その机の上に置いてあつた英國紳士特有の山高帽を被り、ステツキを抱へて、

「では失禮、いつれ又來週ゆつくりとお目にかゝりませう」

と、出かけて行つた。僕は黙つて頭を下げた。この人を式部長官にしたら立派なものだらう、と感じながら後姿を見送つた。

英國にゐる外交官の集まるといふセントジエムス・クラブで、澤田參事官から晝飯に招かれた。

松井男が昔、この大使館の參事官か書記官であつた時分、日英同盟のキツカケをこのクラブの、このストーブの前で作り上げたといふストーブの前の、英國流の腰掛けを見た。

英國外務省の何とかいふ役人と晝飯後の漫談を、このストーブの前の腰かけに試みてゐる間に、

「それぢや一つ日英同盟を結んだら」

といふやうなキツカケになつて「然らばお互にお互の方へ話しをはじめて見ようではないか」——それから日英同盟がデツチ上げられたのだ、と澤田君が昔話しを、食前のカクテルの味につき交せて話してくれた。おかげで、僕の食欲が進んだことを、ハッキリ記憶してゐる。

澤田君はハイカラな洋服を着て、ハイカラなネクタイを結んで、英國か佛國流の外交官であることを思はせた。にも拘らず、談たまたま滿洲承認と、英國の態度に及ぶや、相當肚のすわつた見解を述べてくれた。だから私かに、君の馳走になつたことを喜んだ次第である。

僕は昨年滿洲を一巡した。本年、滿洲問題の仕上げが外交の中心問題化してゐる歐米を一巡しつゝある。僕は外國語が出来ぬから、従つて、日本の在外使臣を多く訪ねる。外務省の出先役人と、陸軍の出先の人達とを叩くことにしてゐる。

滿洲でも歐米でも、霞ヶ關と三宅坂とはハッキリ別れてゐる。いはゆる二重外交がハッキリ僕の目に映る。外交官は、ハイカラで弱い。陸軍は蠻カラで強い。お互にお互を輕蔑もししくは恐れてゐる。陸軍の連中にはせれば、外務省の連中は、外國人の鼻いきばかり氣にしてゐる腰抜けた。

大公使館の（殊に上級の）役人をしていはしむれば、陸軍の奴らは外交の邪魔ばかりしてゐる。

いづれも帝國の忠良なる臣民である。理窟はいづれもあらう。が僕をして率直にいはしむれば、大使館の役人は慨して怠け者だ。朝の九時か十時頃役所へ出て、夕方の五時には歸る。

しかも晝飯を二時間位休む。日曜祭日はもちろん出勤しない。故國から電報が來ても、時間外は机の上に積んでおかれる。その電報も、高い金を拂つて、新聞の論説の概要か何かを、暗號か何かで打つて來るのが多いからこそ、受ける方も怠けて然るべきかも知れぬ。

陸軍の駐在武官の事務所へは、日曜に電話をかけても出勤してゐる。時間外、夜間でもゐる。表面的に觀てもそれだけの相違はある。

内容に至つても、われ／＼外來者が調査したり、ものを訊ねたりするのに、外務省の出先よりも陸軍の出先の方が、よく目的を果し得る。大公使館は不親切で、陸軍の方が親切だ、といふ差異もハッキリしてゐる。

大公使無用論といふものがある。僕は残念ながら賛成する。國際聯盟脱退に異論のない僕は、大公使廢止説に加擔する。外交條文の字句訂正でなら、他に適役があらう。眞の外交なら、外國語と儀禮の技師では駄目である。肚のない外交は、帝國を害すればとて益はない。山高帽にステッキなら、チャプリンの方が餘程上等である。

千萬長者の夢 (茂木惣兵衛君)

ランズベリーに紹介してくれた茂木惣兵衛君を紹介せねばならぬ。十數年前の彼は、日本の大財閥であつた。七十四銀行頭取、茂木商店の大將、三井物産の向ふを張つて、貿易の大宗たる生糸をはじめ等々、世界的の商人であつた。今日彼れは一介の社會學、政治學の學徒としてロンドンに十年の年月を費してゐる。七十四銀行の閉店、茂木商店の破産、日本の大財閥の一人であつた彼れは、追はれるやうにして故國を出たのである。

彼れは、今や資本主義に對立して社會主義を奉ずるの學徒である。もしランズベリー老人のいふ如く、資本主義的帝國主義が破産して、社會主義の社會が現出すべくんば、茂木君はその型を、身を以て體驗してゐる人物である。

僕は覺えてゐる。僕が新聞記者の小僧をはじめたのは横濱であつた。當時茂木君は、僕と同じ明治二十六年生れの、二十代の青年で、しかも少壯大資本家として、政治家と伍し、實業家と相談し、支配人、支店長以下、何万の使用人を指揮して威風堂々たるものであつ

た。いかに僕が彼れに刺激されたか……。

「さうでしたかね、その僕が、今はあなたに相談するんですよ」

雨の降る日の、うすら寒い彼れのアパートの書齋兼住居の中で紅茶をすゝりながら、感慨に堪へぬ調子で語る彼を見た時、僕の心の底には、さびしい秋の足音を聞いた。

彼れは、政治學を研究する。英文の、二巻に成る「ゼ・プロブレム・オブ・フェデラリズム」の著書がある。今また、新らしい出版が市に出でんとしてゐる。

もし彼れが、幸か不幸か、十九歳にして父の死に合はず、大學を廢學せず、財閥の家督を相續せず、學徒として全うしたならば、大學の教授の地位は得てゐた筈だ。

彼は英國の社會主義學者、實際家の間に知名である。日本では忘れられた實業家である。

「僕は、あの當時、金も受けそのものには少しも興味がありませんでした。組織を組み立てること、自分の考へたことを實行に移すこと、そんな場合には生き甲斐のある自分を發見したのです。何でこんなに金がもらへるか、どうも實業家といふ者は悪いことをするに違ひない、といふ煩悶が、しよつちゆう離れませんでした。はじめから、他を押しつけ、自分だけうまい汁を吸ふといふ實業に適しなかつたのでせう」

さうも告白した。昔の使用人達が、今日は手紙の返事もくれぬ、これが人間だらうと話した。親類に富者はある。しかし今日の自分は省みられぬと嘆いた。何とかして、月に五十ポンドの収入があれば、永久に日本に歸りたくないといふ告白を聞いた時に、僕は一昔前の千萬長者の茂木君を、不幸に生れついた人だと思つた。

今、彼れが日本へ歸つて實業界に復活すべくんば、唯一の後見人たる井上準之助（當時の正金頭取）は亡き人である。改めて人に使はれようにも、使ふ人が煙つたい。といつて、自分自ら商賣をすべくんば資本もなく、資本主義の罪禍も知りすぎてる。

ジャーナリズムに入るか、學校の教壇に立つか？ 日本のせまい量見の人々が果して彼れを容れるや否や？

茂木君に取つて、日本は住みにくい。ロンドンにはよき英國の友人が多い。但し、収入がない。

夫人は、一足先きに日本へ歸つた。たしかチャップリンと同船で歸つたことを新聞で讀んだ。萬里の異郷に、ひとりの茂木君は「淋しい人々」の中の主人公である。

雨の降る日、傘片手に、トボ／＼とテムス河のほとり、猫脊をして歩む彼れの姿を見る

時、そして彼れの實に純潔な性情を思ふ時、日本の社會の不具な、或るいたましい縮圖を見る様な、はかない心持になるのを禁じ得なかつた。

英國労働黨首領ランズベリーを訪ふ

小雨降るロンドンの九月末の或る朝である。故郷日本ならば晩秋、僕は外套の襟を立て、議會の前にシヨンポリ立つ。大時計の鐘が十一時三十分を悠長に鳴つた。茂木惣兵衛君の案内で、労働黨の首領ランズベリー氏に、議會の中の労働黨首領室で會ふためである。

前首領マクドナルドは變節した、労働黨は除名した。裏切り者と罵つた。マツクは政黨的足場を取除かれたまゝ、宙にぶら下つて、昨日まで真正面の反對黨保守黨と、そして自由黨の上に、マクドナルド舉國一致内閣の首班である。政黨主義の破産であると共に、社會主義を奉ずる労働黨首領が、國難の美名の前に兜をぬいだことは争はれぬ。これで國難が救はれるとすれば、英國の誇りである政黨主義の政治は、誤りであつたといふ證據になる。

英國の議會と政黨の破産、行き詰つた資本主義的帝國主義……そんなことをまともりなく

考へてゐる所へ茂木君は、雨外套の襟を立て、傘と小鞆を片手に、一昔前の大資本家たりし夢をのせるやうな猫背をしてやつて來た。「やあ」といふ「やあ」と答へる。腕時計を見ると、丁度十二時十五分前である。僕は、彼れの英國化を私かに思つた。

七十になるといふランズベリーは、茂木君の紹介で固く僕の手を握りながら「ハウ・ゾウ・ユー・ゾウ」といつた。

「さあお掛け」僕に眞中の椅子を與へ、彼れと茂木君の間へはさんだ。ラズ先生白髪が禿げてゐる、短かく刈りこんだ髭も白い。面の皮がたるんでゐる。紺の縞のダブルブレスのシワになつた服で、ズボンの折目も何もついてゐない。雨の泥で汚れた大きい靴を、いきなり机の抽斗しを引き出して載せた。僕を日本の批評家だと紹介した茂木君は、何でも話せとけしかける。ラズ先生もまた「僕も聞きたい。君も遠慮なく聞いてくれ」といふ。

讀者は覺えてゐるであらう、本年一月の頃、上海事變の起つた當時、英國議會で日本を海賊呼はりして攻撃したのは、このラズ先生である。議長が注意して訂正させようとしても肯かず、飽くまで日本は海賊である、と頑張つた。英國の議會で日本を明々白々にやつつけるのは、反對黨の首領ランズベリー一人であつた。これが僕をして彼れに會ひたいと希望せし

めた重大な理由である。保守黨は、なか／＼口を開いて率直に意見を述べぬ。

「貴方は日本を海賊にたとへたが、英國の方が海賊では大先輩と思ふが如何」

ズバリと斬り込んだつもりだ。すると彼れは、

「もちろん。だから、自分は、日本のみを攻むるのではない。英國の帝國主義を攻めるのだ。インド植民地の放棄を主張する吾々同志は、英國の帝國主義の誤りを指摘してゐるのだ。英國が香港を占領した時、クリスチャン主義を振廻しながら、一方アヘンの密輸入を行つた。南阿征伐やアイルランド問題、すべてが悪い。日本も滿洲を占領しようといふのは、同じ誤謬をくりかへすものだ。だからその帝國主義を攻める……然るに新聞は自分が日本のみを攻めるやうに傳へる、これはジャーナリズムである」

といひ、そして英國一世紀に亘る大英帝國主義が、今や全く破産に瀕してゐる状態を説明し、ローマ帝國の失敗を説き、日本もまた帝國主義の建前を取る以上、必ず失敗するに違ひないから、その誤りを捨てねばならぬのだ、と、卓を叩かんばかりに叫ぶのである。

「貴方の社會主義的立場からいふ説は、よくわかつた。然し日本は……」と質問の方向を改めた。

「然し日本は、生きんだがために全く満洲が必要なんだ」率直に、齒に衣せずといった。先
生も物わかりがいゝ。さうだ。それは自分も知つてゐる。然らば何故ケロッグ條約、不戰條
約に反して戦ふの方法によらず、お互に手を握らぬか、東洋のため、日本は支那と手を握つ
てはじめて……」

彼も素人である。何にも知らぬ理想家だ。

「貴方は支那を知らぬ。支那人は大昔から嘘つきだ。紳士の約束や信頼が出来ぬ。だからこ
そ力を用ひねばならぬ。また支那のためであり、満洲國を保護しその共榮を圖るゆゑんであ
る」

と説いたら、ラズ先生「支那はいぢめられつゝけてゐる故に、嘘もつかねばならぬやうに
なつたのだ」など、認識不足を展開したから、僕は大概なところで切り上げて質問を改めた。
「社會主義者の立場、労働黨首領の立場からいふ貴方の言は率直に受け入れるが、しかし、
アメリカでも、英國でも、その他日本の對滿政策を邪魔しようといふ連中は、自分はメキシ
コや中央アメリカや又は南阿やインドを併呑してもいゝが、獨り日本が生きんがために満洲
と共存しようといふのを故障する、これは餘りに我まゝすぎるではないか」

と突つこんだ。すると彼れは、手もなく僕に賛成して了ふのだ。

「その通りだ。アメリカでも英國でも、自分がクリーン、ハンド（清い手）でないのに、自
分の慾を推して日本に邪魔するのは罪惡だ。大きな聲ではいへないが、英國だつて大分支那
滿洲に野心があるのだ。……だから、帝國主義はいけないといふのである……君、誤解しな
いでくれたまへ」

僕はランズベリー君のいふことはよくわかつた。日本でも青二才の書生がいふ、インター
ナショナルの理想論である。しかし、四十年労働運動に従事した、前内閣の閣僚たる七十の
老首領の口から聞けば重々しさがこもる。空論とはいへない。その證據に彼れはいふ。

「今度労働黨が内閣を組織したら、アメリカでもロシアでも（要注意、ロシアを帝國主義と
思ふこと、われらと同じ）日本と支那を妨げるものはこれを懲らすに吝かなるものではな
い。帝國主義を打破することがわれらの最高目的である……どうか、支那と手を握つて東洋
の平和を維持して呉れ給へ」

彼れの言は、彼れの言として受け入れる。別に日本だけを悪くいふものでない、といふ告
白が、彼れがお上手者のアメリカ人ではなく純粹のロンドン子で、貧民窟の中産階級の

生れで、今も貧民窟の中に住んで、小父さん小父さんと懐しがられるほどの人柄故に率直に受け入れる。

が、しかし、彼れの認識と理論には、大分缺陷があるやうに感じた。

一時間程、このオフィスのうすら寒い室に話して、別れる時、彼れは大きい掌で僕の小さい掌を握つた「グット・ラック」といつてくれ、僕は「有難う」と禮を述べた。

彼れお爺さんは、僕の外套を取つてかけてくれた。この外套は、ロンドンで買つた代物で、雨と寒さとのロンドンで發明されたレエンコート、と、毛の外套とが裏表一體に作つてある專賣物だ。

ラズ先生、毛の方をかけようとした。僕は、雨用の方を着ようとしてひつくり返して見せた。すると先生目を丸くして、

「これは不思議な外套だな」

といふ。そこで僕は、これはロンドンで買つたのだと説明しながら、バーバリーの名を話した。すると先生「僕のもその會社だ」といひながら、隅つこの椅子の上から紺色の古外套を持ち出して見せたが、僕のやうな新式な專賣特許ではなかつた。先生、恐らくこんな新式

物の出来る餘程以前に買つたのであらう。彼れはロンドンの田舎者であつた。

かへらうと、次室に入れば、ラズ先生の娘で代議士候補の何とかいふミスと、彼れの孫である青年が丁寧に送つてくれた。兩人ともラズ先生の忠實なる秘書である。

戸外に出れば、ウエストミンスター・アベーの黒く煤けた建物が、雨にけぶつて秋はいよ／＼深く感じられた。

恨みは残るロンドン塔

(ロンドンで金を拘れた話)

「金は敵」と聞かされてゐた。親子の間も金から割れる、とえげつない實例も聞かされた。

僕が、今度の旅行に出る際、森格氏がかういつて戒めたものである「君はどうも金錢にルーズだ。旅では、殊に外國旅行では金が第一の頼みだから、なるべく最初は儉約して、最後の、いよ／＼見當のついた時に有りつたけつかへ」

僕は彼れの戒めを守つたつもりだ。アメリカは物が高い上に、圓とドルの爲替が悪い。そ

の上ギヤングが住んでゐる。ホールド・アルプがはやる……かるが故に氣をつけて、腹をしめ、なるべく餘計な金を使はぬやうに、——そして大西洋を無事に渡つて、紳士の國、禮儀の國、英京ロンドンについたのは、九月十四日の午後七時であつた。

その晩である。百日の説法を屁一つにして、永遠の恨みをロンドン塔に残すに至つた次第は……。

その晩、(翌朝になつてはじめて判明したのだが)僕は、僕の全財産を取られてしまつたのである。五千圓以上、一萬圓以下に換算し得るポンドとドルの、正金銀行の信用状と、現金三十數ポンド、インド洋の船切符、全部ソツクリ右の内ポケットから抜かれたのである。

自分の恥を秘しておくのは、今後洋行せんとする人々のためにならぬと考へるが故に、先輩に叱られるであらうことを恐れながら敢て記述する。

ロンドンに着いた。「いよ／＼來たぞ」で安心した。しかも、禁酒の米國で祕かに飲むやうなドロクの代物ならぬ、はる／＼印度洋を越えて來たところの灘酒にありついた。トキワといふ料理屋で久しぶりに刺身を食つて、日本酒をのんで、いゝ氣持になつた。これがそも／＼外國旅行者の不心得なのかも知れぬ。外國では、洋食を食つて、飲むならビールかうキ

スキを飲んで居ればいゝだらうが、さうはいかなかつた。

改めて考へるのに、日本酒は日本人の心を捉へる。その酔ひに乗じて、ピカデリー・サーカスといふ東京でいへば淺草のやうな街に出かけたのである。「俺はロンドンを歩いてゐる」朗らかである。

そこでやられたらしい。

といつて、怪しむなけれ。ピカデリーの名において知らるゝ街女にやられたのではない。女にでも取られたのなら、未だ話はわかつてゐるが、でないのだから、二重の赤毛布である。

その晩一しよにロンドンに着いた松内君とN氏とが僕のトキワでの晩飯の仲間だつた。酔つて散歩に出たのは松内君と僕と二人きりであつた。

一時間位でピカデリーを歩いた。最後に、或るカフェに寄つて、サンドウキツチとウイスキを取つた。その勘定を僕が拂つた。内懐から全財産入りの財布を出して、中からポンドを出して、一ポンドの新らしい奴をボーイに渡し、十シルリング何ペンスの釣を受取つた。それはズボンポケットへねちこんだ、翌朝氣がついた時、それは御丁寧にちやんと残つてゐる

のである。(これが無くなつたのなら、こんな苦勞はしないのだが)

その酒場を出て、松内君がタキシを呼び止めた。兩人は乗つた。ホテルに歸つた。

そして翌朝、僕の内懐に全財産の影も形もないのを發見して、「ロンドンで金をとられた話」が始まるのであつた。

私事がこれ以上にわたるのはうるさいが善後處置は、御参考になると思ふ。

朝十時、いよく出かけようとなつて、洋服をきかへて、さて「取られた」とわかつて、

眞つ先に頭へ浮んだのは正金銀行である。

ヨコハマ・スペシー・バンクを電話で呼び出した。交換手は毛唐女だから日本語は知らぬ。

「支配人(マネヂヤ)プリーズ」といつた。日本人の聲でモシ〜といつた、そこで「私は

……何の某で、おはづかしい話ですが……」といひかけたら、皆まで聞き終らず「ぢやその係へつなごせ……」で、他の人が出た。

「私は……何の某で……」

「あなたは新聞の方の方でせう。」

といふ。

「さうです、どうしてご存じで」

「お名前はかねて承知いたしてをります」

と來た。十年の知己を得た氣になつた。多分、僕のかいたものか何か讀んでる人だらうと思つた。

「黒田です」と名乗つてくれた。

幸ひにして、書止めてあつた信用狀の番號と、覚えてゐる残高を申告し、ともかく、至急支拂ひ停止の手續をとつてくれるやう頼んだ。宜しい、と答へてくれた。

ロンドンの警察は訴へを歓迎する、と注意を受けたから行つた。遺失届を口頭で述べた。

巡査は親切に、綺麗な字で僕の訴へを書きとめた、とまつてゐるグレフトンホテルの事務所へも遺失として届けた。

僕は赤毛布の恥よりも「日本の紳士」が英國人をうたがふの無禮を感じたので「盗まれた」といふ言葉を使はなかつた。いつでも無駄だ。出て來はしない。自分の不注意を責める方が先決で、そして外國に對しての儀禮である。

午後、正金のロンドン支店へ行つた。松内君も一しよに行つてくれた。黒田氏に會つた。

そして僕は赤毛布の本人である証明をして、何とか早く手続きをして、金をもらへるやうにしたのんでくれた。「日本で、たれか保証人を」と要求した。つまり、盗られたか遺失したか知れぬ信用状が、萬一、僕の偽造のサインで正金の取引銀行から引き出されてしまつてゐた場合、僕にわたした金がダブルから辨償する、といふ保証人の意味である。

もつともである。即座に東京、新愛知支社長勝田重太郎氏を指定した。僕自身からは勝田氏へ、正金からは信用状作成人たる東京丸の内出張所へ電報を打つた。五千圓の金は、留守の家内が工面して送つた。勝田氏が送金の手続きをして、即日電信でやつて来た。

正金は、僕のドル残高を、ドル扱ひ在外支店總本山たるニューヨークの支店へ電話で問い合わせ、ポンドの方は同じくポンドの總本山ロンドン支店で判明してゐる。「確かにありません」といつてくれた。

全世界の支店、取引先へ手紙を出して支拂ひを差止めたのはしかし僕が電話で頼んだその翌日である。そして、遅くとも一ヶ月すれば、差止め効力が全世界に行きわたる。その效力のために僕は、三ポンドの手數料を支拂つた。電話料も全部被告（さうだ、まるで被告といふ感じだ）持ちだ。正金は既に信用状作成の時に賣と買との間に約一ドルの差をもうけて手

數料を取つてゐるはずだ。その手數料の上にまた手數料だ。當然の權利には相違ないから、文句といふのではないが、僕と大西洋航海の同船者であつた大阪のK商店のO君といふ店員は、同じく旅行者手形（トラベラーズ・チェック）を紛失した。これはアメリカの銀行のであつた。「手數料を」ときいたら「そのために五ドルにつき五セントの手數料はすでもらつてある」として受け取らず、電報を方々へ打つてくれたといふ。そして彼の二百五十ドルは、手形が発見されぬにか、はらず、再發行してくれた由である。

僕のは「正金であるが故に」、本人が證明され、残高が判明してゐるのに、再發行はおろか、一ヶ月後差し止め効力發生後といへども、來年の六月末信用状の期限の來るまでは拂つてくれぬ、とキツイお達しである。今後再び外國旅行する時には決して正金の厄介になるまい。むしろアメリカの銀行か、トーマスツクの旅行者手形にしようと決心したほどである。

同じ日本の銀行でも、三井、三菱、住友のやうな、民間の銀行はもつと親切だ。僕らの同行者に正金を利用しない人がある。聞いて見れば「通人」なのである。大使館のある外交官さへ正金の厄介にならぬと告白したくらゐである。

半官半民、客を客とも思はぬ銀行がどんなに人民を無視し而して迷惑をかけてゐるか、日本内地でもよく知れてゐる所、それに氣のつかなんだは誤りであつた。

幸ひに僕の場合は、電報一つで五千圓の保證金を納めてくれる人があつた。もしかういふ人を持たぬ旅行者は、ロンドンで立往生せねばなるまい。アメリカの銀行とくらべて、僕は妙な氣がしてならぬ。

僕が信用狀を紛失したのは、重々誤りである。がしかし、現金で持たず、信用狀にして持参する理由には、紛失した場合のことが八分通りふくまれてゐるはずだが、その場合に役に立たなくては、信用狀は不信用狀だ、といふよりほかに仕方がない。聞けば、トーマスク社の旅行者手形など、かなりしばしば紛失することがあるのだけれど、もつと手軽に救済してくれる。前記アメリカのA・B・A（アメリカン・バンク・アソシエーション）のその如きは、サインの偽造絶対にありえず、といふ信任の下に、訴願を朗らかに聞き入れてゐる。

正金のロンドン支店の多分日本人係りであらう黒田氏の扱ひは親切で宜しい。けれど、正金そのもの、日本人旅行者に對する態度は冷血である。これは僕の場合のみではない。僕の

問題が話題となつて、同じ路を行き來する人々が、ロンドンの日本ホテルで話しあつた結果、正金に對する苦言と、今後の旅行者に對する参考のため代表をして受難者のナンバー・ワンたる僕が述べるまで、ある。

附記 私の信用狀そのものは發見されなかつたが、期限が來ても引出されてゐないことが判明したので、東京の正金支店から返してくれた。其の時は、もつと圓が下落してゐたので約二千圓程餘分に受取つた。金を紛失して儲けた、といふ落語のやうな話である。

ビヤホールの主戦論

一九三二年九月下旬行はれたドイツの秋季大演習は、ベルリン假想敵國、攻められて陥落する場面を演出した。八十餘歳の老大統領ヒンデンブルグ元帥が、帝政華やかなりし頃そのまゝの軍服姿で外國使臣に接した。國防省はもちろん、外務省、大藏省の役人が總出で接待した。この努力は何を物語るか？ しかも、外國使臣のうち、佛國、白國は特に參觀することを拒絶してゐる。何を物語るか？

日本で大演習を行ふ場合、假想敵國として、某々國を數へ、その使臣を招待しなかつたとする……いや、さすがの軍部でもそんな勇氣はあるまい。白・佛といふ假想以上の敵國の使臣の參觀を拒絶することの豪膽といふか、向ふ見ずといふか、ドイツ魂が、燃え上つてゐるやうな氣がして、思はず拍手したくなるのである。

歐洲大戰に敗けて臥薪嘗膽のドイツ——正面の敵はフランスである。ベルサイユ條約に、どんな恨みを持つことか。この恨みを既に演習において表現する。

フランスとドイツは昔から戦つてゐる。勝つたり敗けたりである。われ／＼の東洋の外國人から見れば、痛くも痒くもない。然し、ベルサイユ條約で、日本は何を獲得したか。國際聯盟で、何を得たかを考へて、そしてドイツ人の「こん畜生」魂を靜觀する時、少し痛痒くなる。世男の五大強國とか何とか美名を頂戴して、しかも手も足も、國際正義に縛られて、自分のものである滿洲國承認にさへ茶々を入れられ、そして外交官といふ國際正義の酔っぱらひが目を白黒させてゐる時に、戦敗國のドイツが、敢然として、立ち上りつゝあるのである。はづかしい、といふ言葉は、かういふ所へこそ應用して然るべしと思ふ。

日本政府が、滿洲國承認を中外に聲明したのはよろしい。その前々日、パリに集つた某々

三大使が（日本ののである）、リットン報告を氣に病んで、滿洲の自主權を支那に委せる方が安全だ、といふ相談をして、そして霞ヶ關へ電報を打つたといふ。それと行きちがひに、滿洲國承認の電報が來たので目を白黒させたといふ。かういふ喜劇役者が、帝國の使臣だといふ現實に對しては全く笑へないのである。

米國が日本をやつ、けるために、英・佛を抱き込んだ、といふ情報は僕の耳に大きい響きである。九月の中旬、米のリードは、ロンドンやパリのあたりを遊弋して居つた。暫くしてスチムソンは英・佛が米國と同意見なるを喜ぶと説明してゐる。

今まで日本に好意をもつてゐたパリのタン紙が論調を更へて來た。ロンドンタイムスも奧齒にものゝはさまつた論説を書き出した。滿洲問題は、早急に片づけるのはよくない、云々。米國から、英國、佛國、ドイツ等々を歩いてゐると、神經衰弱になる位、外交官の弱音を拜聽する。僕はドイツ人の魂を藥にして飲ませてやりたいと思つた。

然し、こゝに注意すべき現象は大使館の參事官以下、外交官補に至る若手外交官の間には、今までの平時的儀禮外交官の型破りが隨所に發見出来ることだ。彼れらと酒を飲んで大使公使の腰ぬけぶりに憤慨した話はよく聞いた。これなら、日本將來の外交もあながち悲觀

したものではない、と思ふのである。

ミュンヘンの名はビールによつて僕の知己であつた。續いてネオ・ムツソリニをもつて任するヒットラーの本據として知己であつた。晝間の見物にナチスの本營ヒットラーの住宅の屋根にひるがへるナチスの旗を見てドイツの政情を考へた晩、僕たちは名物のビールを飲みにでかけたのである。

僕たち——ベルリンから日本人の團體十二名を組織して、チエツコ、ハンガリイ、オースタリイ、南ドイツの旅行をつゞけた仲間である。ベルリンの中官商店主中西賢三君の盡力による團體である。八幡製鐵所の技師三名松浦道徹、志道鐵造、日高政一の三名、朝鮮總督府の技師加藤正擴君、お醫者さんでは金澤の人川端榮正、エチオピア王國へ招聘されて行くといふ小平、井出正三の二名、文部省の留學生では、東京工業大學の助教授精密機械の海老原敬吉、横濱商工の教授で應用化學の今井行雄、佐賀高校の數學の先生で一行中の最年長者西谷茂春、早稲田の留學生で法政史を研究してゐる金澤理康の諸君と世話役中西君と僕とである。

私はファツシヨは嫌ひだけれど、ドイツ人は好きである。議會主義は好きだがイギリスは

どうも好きでない。

ロンドンで、高級なレストランに入つて見ると、まるでお通夜の様である。私などは、タキシードしか持つて行かず、燕の尾のついた最大級の禮服の洋服を着ないと入れぬ様なレストランへは入つた經驗は遺憾ながら持ち合せてゐないから大きな口は利けないけれど、タキシード級の所でも、食卓にむかふ客は敵のスバイにつかれた政治家で、もあるかの様に、極度に聲を落して話してゐるし、飲物や食物を運ぶボーイがまた泥棒猫の様に足をしのいでいさゝかの音もたてまいとする。あれで酒をのんで面白いかと思はれる位である。

ところが、ドイツの方は、だいたい服装がイギリス程うるさくない上に、談論風發の光景をビールの泡と紫烟の間に、たゞよはせて頗る景氣が好い。私は、ロンドンで、何とかいふスコットランド生れの女の長い裳を階段で踏みつけて、どえらくツムジをまげられた事がある故もあつて、どうもロndonは好きになれない。この女といふのが、實はかり物である。誰が在ロンドン日本人のかこひ者であるが、婦人同伴で踊りに行くために借りたのである。だから淑女面をした賣女なんである。賣女でもなんでも、男に對してはやけに權力をふるふのである。おかげで私は何ポンドかの辨償金を出した。

さて私はドイツ人が好きである。彼等は、おでん屋で酒を呑む趣味を、教へたら直ぐに會得するであらうと思はれる程快活である。

何ををいても、お上りさんにとつては彼の有名な大ビヤホールで一杯のばねばならん。

そこで、着いた夜隊伍堂々(?)二千人の客を容れるといふシーベンゲロイ・ケーラーと稱する店に入つた。夜の九時であつたが、階下の大ホールには空席がない程満員であつた。われ／＼を日本人と見るや、支配人らしい男が親切にも軍樂隊の演奏臺の直ぐ下の席を見つけてくれた。この軍樂隊が問題なのである。ビヤホールで軍樂を聴く、いかにもドイツである。

その晩は、こゝで「勳章の夕」といふのが催されてゐた。つまり在郷軍人會である。で、場内中央にたてられたのは、舊バイエル王國の皇族旗である。この側のテーブルに倚つてゐる赭顔肥大の紳士が、世が世ならばドイツ聯邦の大なる構成分子であるところのバイエル國王であるべき、アールフオンズ殿下といふ人物であることは、説明されてわかつた。この王様のまはりには軍服勳章の在郷軍人がづらりと並んで、歐洲大戰の苦戦と武勳とをビールと香と紫煙の間に物語つてゐるのである。

これ等の人々の一團をとりまく多くの民衆が矢張り卓によつてビールをあふつてゐる。女も百人ぐらゐるはゐる。十歳ぐらゐるの男の子もビールの大カップを舉げてプロジツトしてゐる。非常な昂奮が堂を壓するといふ感じである。その又ビールの呑み方が豪快なもので、陶器の一リットル入りの大カップである。ぐい／＼あふる。三パーセントしか酒精分がない、日本のビールより二パーセント低いのだ相であるが、それでも、われ／＼には三杯とは飲めぬ。第一、腹がふくれてしまふのである。ビールの中から生れた様なミュンヘンの人種だけあつて、丁度われ／＼が番茶をがぶ／＼のむ様にのむで見せるのには恐れをなした。

さて軍樂隊の力強い、ドイツ一流のマーチが終つたと思ふと、場内は水を打つた様に静まりかへつた。と、指揮臺の上に取りあがつた紳士がある。白髮童顔、タキシードを行儀よく着た立派なお爺さんである。

演説をはじめたのである。ビヤホール演説をはじめるのは、日本なら酔つぱらひにきまつてゐる。彌次り倒されるか、引つりだされるかにきまつてゐる。こゝでは深山にも以た静寂境を現出し、給仕女も足音を盗む。誰も彼れも盃を卓上においたなり謹聴してゐるのである。

紳士は卓を叩き、聲をしぼり、顔に血をみなぎらせて、三十分にわたる熱辯をふるつた。内容は驚くべし、主戦論である。

彼れは、バイエルの民がいかに舊ドイツ帝國の重きに任じたかを説いた。世界大戰でドイツが、最後の五時間に媾和（敗戦といはぬ）を余儀なくさせられたのは狡猾な英國とアメリカのおかげである、と英米をコッピどくこきおろした正面の敵、佛國に對しては、逆賊の如き口吻を用ひた。要するに、ドイツを救ふ責任は舊バイエル王國の國民の肩にかゝつてゐる。けふ、貧困と不當なる條約に壓服されてゐるドイツ國民が、あすの光輝を期待するためには、政黨を超越し、舉國一致の力をもつて事に當らねばならぬ、と結論した時には、割れるやうな拍手が三十分の靜寂を破つた。感激のあまり卒倒して場外へかつぎだされる男があつたほどである。

この紳士は、ミュンヘンの辯護士でパウドルフといふ聲望のある人、政黨には關係なく、もちろんヒットラーの一味でもないがとにかく熱烈な國粹主義者である、といふことであつた。

バイエルの人種は、佛國、奥國西國などの國境にあつて、ブルドックのやうに喰ひ下つた

ら殺さねば離さぬといふ猛烈な氣風に富んでゐるといふ。

國民社會黨のヒットラーの本據が、ミュンヘンにある理由もわかる氣がした。

祖國愛に燃える紳士の熱辯が終ると、軍樂隊は猛烈に強い調子の行進曲を演奏しだした。音樂の門外漢である僕にも、その小太鼓の響、ラツパの音が、敵軍に突進せんとする軍の士氣を鼓舞するものであることが感じられた。

續いてバイエル王國の國歌である。殿下をはじめ滿場は起立した。そして合唱した。次はドイツの國歌である。同じく昂奮に燃える人々は聲高らかに合唱した。僕たちの隣席にゐた三人の若い娘も起ちあがつて緊張して合唱した。

ジイツとこの光景を見ながら僕の目頭が急に熱くなるのを感じた。

ヒットラーが好んで靜養に行くベレヒテスガーデンの一夜は靜寂であつた。こゝは避暑地で、冬の客はない。だからでもあらうが、山の上の靜かな所である。何といふホテルか忘れたが、其處の主人が村長か何かしてゐるといふ小さな山莊といった感じのホテルに泊つた。他には客がない。私共數名の日本人だけであつた。

客のない故もあつたかも知れないが村長も主婦も、女中達も非常に好遇してくれた。私

は、その女中の一人に忘れ得ぬ女がある。

といつて變に氣をまわして貰ふ程のことではない。いさゝか耳が遠くて、トンチンカンだつたが、うれしい事に英語の片言がわかるのである。

一行の連中は留學生や何かで、伯林常住の人が多いから、ドイツ語は話せるが、私は英語の片言しかわからないのである。だから、それが通じる相手を見つけると、頻りに好感を有つのは、人情の然らしむる所であらう。

夕飯後のダンスに、私はこの耳の遠い娘を選んだ。踊りながら何を話したか今ではもう忘れてしまつてゐる。何しろ兩方片言なのだから、覚えてゐるやうにも覚え様はないのであるが、たゞ、踊りながら話す時に、その娘の口のくさいのに閉口した事は今でも覚えてゐる。耳が遠くて口がくさくて、そんな娘を何で忘れ得ぬのか、と理屈をいはれても困るが、旅に出ると、人間といふ奴は得て感傷的になりたがるのである。

歐洲大戰で父を奪はれた、戦争後家の娘であるといふ事が、何か淋しい感慨を起こさせたのかも知れない。

この娘も、バイエルの女であつたのである。

あす(十月二十一日)は一ヶ月のドイツを去つて、ひとり巴里に去る。その前夜僕はここで、ドイツの結論を得たやうな氣がしたのである。記念のため一マルク拂つて、バイエル地方獨特の陶器の大カップを買つた。このカップを見るたびに、ドイツ國民とは切り離して考へられぬビールと、そしてそのハーターランド・リーベ(祖國愛)を想ひ起すことであらう。(十月二十一日、ミュンヘンよりパリへの車中にて)

嘆きの像(ブタベストとウキン)

戦敗國民の敵愾心と祖國愛を見る時、僕はてもなく感激してしまふ。それをハンガリーで見た。

ブダベストの市街見物をした。ドナウ河に沿うた議會の前の大廣場に美しい花壇がある。秋草、秋の花で、いろ／＼な模様やら、文字やらが書かれてゐる。何のことかわからぬので案内者に聞く。すると彼れ案内人は、今まで名所舊跡の説明をしてゐる時とは別人のやうに毅然とした。花壇の眞中にかいてある模様は地圖である。ハンガリーの地圖である。歐洲大

戦前には、かくの如き領土を有してゐた。大戦に敗れては四分の一の國土に減らされてしまつた。それを色分けにして描いたものであつた。そして周囲の文字は「減少された國土を取り戻せ」といふ意味の標語の由である。

その花壇の前に、三色旗をつけた高い柱が立つてゐる。三色旗は半旗である。柱の頂上までとゞいてゐない。お弔ひのやうである。その半旗をめぐつて四ツの女の石像がある。「嘆きの像」といふのださうである。國土を減らされたハンガリー國民の嘆きを象徴したものである。これで半旗の由來も讀めた。

半旗と、嘆きの像の前には年中愛國少年團が起つてゐる。守つてゐるのである。ムツソリ一ニの「條約は永久のものに非ず」といふ語が、嘆きの像に彫つけられてある。

「條約は永久のものに非ず」……ベルサイユ條約は、ドイツ、ハンガリー、オーストリーを滅茶苦茶にしてしまつたのであつた。やがて近く、條約の永久性を叩き潰してやらうといふ意氣が讀まれる。

も一つある。繪葉書だ。

花壇の地圖と同様に、大戦前と後のハンガリーが描かれてある。この地圖は開いたり閉ち

たりするやうに出來てゐる。玩具によくある仕掛けである。人形の耳や目玉がうごく玩具の仕掛けである。閉ぢれば、舊大ハンガリーの地圖が出來る、開けば今日の小ハンガリーが出來る。そして、チェッコだの、ユーゴスラビアだの、ポーランドだのに分け取られた部分がつきりわかる仕かけになつてゐる。

この繪葉書を旅行者に賣る。宣傳するつもりであらう。ハンガリーのあはれな状態を。そして、舊地圖に取り戻すのは、當然だと訴へるのであらう。一枚八十ペンスは高いと思つたが、數枚買ひ込んだ。

この地圖を、ホテルの帳場の先生に示して、開けたり閉ぢたりして見せた。そして「君達はこれより（閉ぢて見せて）大きくなりたくはないか」と質問して見た。すると先生、僕の手から繪葉書を取つて、

「いや、これで十分だ、元通りになればいい。それ以上慾はかゝぬ」といつた。

咄嗟の場合に吐いた彼れの言はおよそハンガリー人の心であらう。この地圖は汽車の中でも、幾度か僕はハンガリー人の前で開閉して見せた。これを見た時の、彼れらの態度は恐ろしく毅然とする。そして、國土を取り戻さねばならぬといふ、遠慮なくいふ。

ブダペストからウキンへ行く汽車の中で、この地圖を話題に、或る男と話した。その男は日本についてかういふ説を吐いた。

「日本人は日本語を忘れちゃ駄目だ。自國の言葉が重んぜられなくなると、その國民はもう弱者の地位に立つ」

中央ヨーロッパの小國を旅行した者は、誰でも知つてゐる筈だが、ドイツ、フランス、英國の言葉がチャンボンに通用する。純粹な自國語は却つて通用しないといふ奇觀を呈してゐる。

英國が、あんな小さい國でありながら、英語を世界の標準語にしてしまつた由來を考へ合せると、言葉のもつ重要性が、事新しく考へなほされるのである。

ハンガリー人種は、日本人と同じ系統だといふ。水といふ言葉はミーズといふ。鹽はシオである。文章の綴り方でも、たとへば日付をかくのに、歐米人は日月年といふ順序である。ハンガリーでは日本と同じく何年何月何日と書く。

髪は黒く、目玉が黒い。面構へも、よく日本人と間違へるやうなのがある。説によれば、ハンガリー人は純然たる民族をなしてゐる。同じ戦敗國であり、オーストリー・ハンガリー

と並稱することによつて知られる仲間の老大帝國オーストリーの方は、猶太人が澤山入りこんで居る。往時交通の中心であり、國王が開放主義を取つたので、人種が入り亂れてしまつたから、ハンガリーに比べると領土が六分の一に減らされたに拘らず、敵愾心、愛國心が殆んどない、といつてもいゝといふ話である。

そのかはり、國家を超越して、ウキンは學術の都であり、音樂の都である。景色がいゝ、から遊覽地でもある。全人口六百萬の中二百萬は首府ウキンが占めてゐる。ウキンの宮殿見物に約八十錢拂つて共和國オーストリーの現状に對いさか感慨深きものがあつた。

ハンガリーの方は、王様のゐない王國である。王様を物色してゐる。日本から或る宮様を王に迎へようといふ運動が眞剣に行はれた位である。或は、領土が昔日通りに取戻されてから、王様を迎へようといふ考へ方もあるさうである。十八になる舊王の息を迎へる空氣が濃いともしふ。ブダペストでも空家の王宮に入場料を拂つて見物した。

ドイツでも、フランスでも、宮殿が名所見物の一ツになつてゐるのだから、日本人には一寸やり切れないといふ感がする。しかも宮殿の裝飾畫は、判で押したやうに戦争と武勳と、そして帝王が榮華の夢の跡である。

地續きで、利害が毎に相反する歐洲大陸の諸國の間に、永久の平和を望む者あらば、繪に描いた餅で腹がいつばいになると考へるおめでたい連中である。

パリ國際記者クラブの論争

フランス國際新聞協會（コンフェランス・ド・プレッス・フランコ・エトランゼエ）の午餐會。滿洲事變と國際聯盟を主題としての演說會に讀賣新聞特派員松尾邦之助君が日本側として一席辯じるのである。支那側からは上海の某新聞の特派員陳和銑といふ男が一席辯じる。その他「滿洲は誰のものであるか」の著者コーローブ・ヌーベル社長ロジェ・レヴィ君が辯じる。ロシア人では少々時代おくれの名士だが、ケレンスキー時代の外務大臣ミリユコフといふ亡命客が辯じる。等々々、イタリー、アメリカ、ドイツ其の他大勢約六十人位、このイタリー料理のシャンチ・ラフィノの三階の奥の室で、集まつてゐるのである。

主宰者はルブユ・モンディアル雜誌の社長ジャン・フィノ君、司會者はバリ・ミデの主筆でしばしば日本側の悪口を書くといふ色男のキャブリエル・ペルー君であつた。最初に取り

上つたのは有名な雜誌記者で「支那人は市民であつて國民ではない」と警句を吐いたスリー・ド・モーランといふ佛國の東洋通、日本へも支那へも遊んだことありといふ「消息通」であつた。彼は言つた「日本の文明は歐洲に近い。支那の文明は全く特殊である」僕は、松尾君の通譯的耳打で要旨をきいて「先生日本びいきだな」と微笑してゐると「滿洲に對する日本の主張も支那の主張も、兩々尤もである」と妙な所で氣を抜いて……「併しソヴェートロシアが滿洲を冒すことは、日支兩國の脅威のみならず世界人類の大損害である」と結んだ。

次はわが松尾君だ。僕は彼にけしかけて排日や條約違反や、の常習犯であるところの支那を眞向から叩きつけること、國際聯盟が飽くまで認識不足を發揮するならば、日本は脱退以外に途のないことを強調するべく計畫した。これを僕は、正當と思ひ、松尾君も當然と感じ、敢て僕のサポートを要求した所以だつた。

松尾君の演說中、拍手が起り、微笑が湧き、支那記者が途中で抗辯に起たんとして司會者から制せられた所を以て見るに蓋し彼の佛語は本物である。リットン報告の僭越さを辯じ上げる條で、松尾君は武者ぶるひしてゐたらしい。僕は彼の尻をついて「しつかりやれ」とけしかけた。

次は上海君である。タイプで打つたプリントを讀んだ。蒼白い顔をして、プリントを持つた手が、かすかに震へてゐたのを僕は見のがさなかつた。彼は、全然、國際聯盟を讚美し、世界人類の幸福に對し國際聯盟の有する使命を説く……といふより弱者の地位から要求した。後半に於て曰く「支那は無政府だといふ非難を聞くが、これからよくなるのである」と無政府の今日を承認しておいて、扱て「フランスだつてフランス革命には長年月を要したではないか」と屹然として見せた。僕は可哀想になつた。此の蒼白い青年も亦、僕等と同じく愛國心を有してゐるのである。

スリー・ド・モラン君は次に起つて、頻りに「ムツシユ・マツオ」といふ。松尾君が國際聯盟の認識不足と越權をこき卸したことに對し、不平を述べてゐるのである。佛人は、國際聯盟を米の飯と心得てゐる。たゞ日本人にとつて、腐つた牛乳であることを知らぬ。

ロシアの亡命外務大臣ミユリコフ先生の言説は、愉快極まる程支離滅裂だつた。「自分は日本と同じ利害に在る」と滿洲シベリアに就て述べたと思ふと、しまひには「日本はやがて、シベリアをも占領するであらう」と言ひ出した。「滿洲の馬賊といふものは日本が滿洲に進出してから出來た代物である」と述べた。

僕は、松尾君の尻をつゝいた「やれ〜」やがて、わが松尾君は、司會者に求めた。二分といふ制限を一分に切りつめてズバリと刺した。「シベリアはおろか、滿洲を占領して、これを治めるには金が要る。そんな金は日本にはない。滿洲の馬賊？ われ〜は子供の時分から馬賊の歌を知つてゐる。ミユリコフ氏の如き大家から斯くの如きオトギバナシを聞くことは最も愉快である……」あとで日本ビイキであるといふエコード・パリの記者先生が松尾君と握手していつた。「君の前の演説よりもあの反駁の方が餘程利いてゐる」それは其の通りである。

以上述べたフランス國際新聞協會の午餐會は、リットン報告の發表された直後、聯盟協會の開かれる直前十月二十六日パリの銀座、グラン・ブルバードのイタリー料理店で催された會合であつた。

異國の女

國際結婚が、國際聯盟とこつちやになる程さわがしい。國際聯盟に加入したのがそもそも認識不足で脱退しても差支へないなら、國際結婚なんかするのがどうかして居る。脱退しても構はぬだらう、とこつちやにしても構つて貰ひたくない。

僕の尊敬する友人で、巴里に長くるる松尾邦之助といふ男がある。獨り旅の便宜主義から、つい國際結婚に墮ちこむやうな貧乏繪かきから、H女史のやうにその書いた物によればフランス語を自由に話せて、勝手にフランスの文豪を訪問した様な、勇敢なホラを述べる人でも、さういつた連中は誰でも知つてゐるのみか、一通り税關のやうに厄介をかける男であるが、その松尾邦之助は、巴里の畫かき街モンバルナスホテルの一番高い——即屋根裏に、レッキとした日本婦人と、正式に結婚をして、住んでゐる。

僕も、松尾君を税關とした。彼のホテルへ室を取つてゐた關係から、一番高い屋根裏へ上

つて行つては、なつかしき日本婦人である松尾の妻君にうどんの積りでマカロニを醬油で煮て貰つては食ひ、安い葡萄酒を呑んだ。安く食つて酔ふてから、三人で近所のキヤフェエへ出かける。松尾は原稿をそこで書く、僕は手紙をしたゝめる。妻君は本を讀んで、幾夜かの静けさを費やした。

屋根裏の狭い室よりも、キヤフェエを書齋にした方が遙かに効果的である。(東京で、そんな眞似の出来ないのは遺憾である)ニフランのキヤフェエ一杯で何時間頑張らうと、誰も不思議に思ひはしない、手紙を書く、と給仕にいへば、紙、封筒、インキ、ペンを直ぐに持つて来てくれるから、書齋をキヤフェエに持つ人々は、多い筈である。

松尾は十年も巴里にゐる。國際結婚を一度もしない。三年許り前に日本へ歸つて「田舎者だよ」なる婦人と結婚をして巴里の屋根裏へ歸つた男である。彼の長年の見聞的經驗によれば、國際結婚程愚な話はない。巴里にゐるフランス人を妻君にした繪かき。誰彼は繪に活氣がなくなり、健康を弱め、下らん煩悶に時間をつぶし、實にだらしがなくなつて居る、——といふ實例をあげて見せた。

「買ふべし、めとるべからず」の原則を忘れた連中は(中には例外はあるけれども)大概く

さつてしまふのが通例だ、といふのである。

松尾君などはシツカリした男だから、認識が正確で、身を處するに誤まりはなかつたのだが、日本を出て、獨身で暮してゐる若き人々は、つい、枝葉根幹の區別を没却してしまふのである。そこで、日本の裁判所に、フランス女の離婚沙汰が持ち出されもするのである。

松尾と、妻君とが憤慨しつゝ、話した一つの話。巴里で、日本のある繪かきが、女と同棲した。男は日本に妻子がある。あるけれども無い様なウソを吐いて假りの夫婦になつた。女はモデルである。男に惚れて忠實であつた。子供が生れた。男は日本から電報が来て「一寸歸つて来る」といつたなり三年も巴里へ來ない。女は貧乏しながら子供をかへて、いまに良人が歸つて來るだらう、と日本婦人にも見まほしき貞節な女房ぶりを發揮してゐる。松尾夫婦と其の女は懇意なので、よく往來するが、扱て、如何にも氣の毒で、男がウソを吐いて日本へ歸つたこと、日本には妻子がある、そのことを話せない。話せぬにつけても男が悪い。女が可哀相でならぬ、と或夜しみとくと例の書齋のキャフェで話したのであつた。

在倫敦某會社の支店員久野太郎は、スコットランド生れの女と同棲してゐる。僕は久野夫婦(?)に招かれて彼等のアパートへも行つた。踊り場へも行つた。僕が招待しかへした

時、女のポーラ君が、遠慮なく一本一ポンドの三鞭酒を注文してはボン／＼抜くので、財布の勘定をしながら酔へなかつたこともある。

彼等夫婦は實に仲がいい。その代りお客である僕の前でも遠慮なく喧嘩を始める。或る晩、久野夫婦とポーラの友人ミッキ嬢と僕と四人で晩飯を食ひに行つた。久野は、何か用事があるといつて一足先きに歸つた。残つた三人は三鞭を抜いては踊り、踊つては抜いて、一時頃になつてから、そのレストランを出て、久野のアパート迄行つた。

乗り物は、ポーラと僕の趣味で、故意と自動車をやめて二頭だての馬車を選んだ。ミッキイと三人、霧のロンドンの夜を、ペープメントにカツ／＼と音たて、走る馬車の上で外套の襟を立て、ゐた。とポーラが、狂人のやうな聲を出して叫んだ。

「あれ……久野が、久野が」

指さす方角を見ると、一臺のタキシードが、吾々の馬車の數倍の速さで走り抜ける。女と男がたしかに乗つてゐる。が、男が久野といふ日本人か、どうか見分けがつく譯はない。だのにポーラは、たしかに久野と女と乗つてゐた、とヤキモチを焼く。折悪しく、久野のアパートへ歸りついて、三人が夜更けのウキスキを何杯飲んでも、久野は未だ歸つて來ない。ポー

ラは、飲めども楽しまぬ。久野の悪口を頻りにいふのである。私達には用事のある様なウツをついて外の女とランデヴをして居る。もう、あんな男との同棲は御免である——。

一時間位して三時近くに久野は歸つて來た。疲れてゐる。ポーラに分らぬ様な早口の日本語で、僕は久野に云つた。

「おい、大分黒こげだ。氣をつけろ」

ポーラは僕の口を手をあて、さへぎりつゝ、久野に、早口の英語を浴びせかけてゐる。實はかうなると、僕の英語では逆もわからぬが、久野は英語で夫婦喧嘩をする程達者である。

「イエス」はなくて、兩人共「ノウ／＼」ばかり使つてゐるところから見ると、相當な喧嘩であつたらしい。僕は喧嘩半ばにミツキイを誘つて、辭した。彼女をつい近所のアパートの入口に送り届けて、三時頃の街を下町の宿屋へ歸つて寝たが翌日、久野に「昨夜は外の女と浮氣したのか」と質いたところ、彼は苦笑しながら「俺にそんな、エネルギイの餘りものがあるなら幸だがね」

といつた。ポーラは久野に食ひ足りないだらうと僕は腹の中で考へた。

伯林のヴィクトリア。日本人の税關と稱せられるキヤフエ。日本人相手の夜の淑女が十時

頃から雲集して、日本人を待つ場所。

そのの淑女の、古顔にリゼルといふブロンドの女がゐた。廿五か六であらう。太つちよで眼がくる／＼廻轉して、下手なタンゴを踊り乍ら、ドイツ語の英語を話す女であつた。リゼルは、ある日本人の「土曜日情婦」であつた。

或日曜リゼルは僕を茶に招ぶといふ。勿論先方は夫婦(?)で、旅行者の僕を四時の茶に招ぶのである。

リゼルの机の上に子供の寫眞が飾つてある。どうも日本人の合の子だ。彼女がキツチエンの方へ立つてゐる間に、N君に訊いた。

「これは、マサカ君の子供ぢやあるまいね」

「ナイン／＼。それはあいつの最初の情夫との間に出來た子供でもう五ツになる。その問題でリゼルの奴昂奮するんだ。……君、日本製のゴム製品は安くて丈夫だね」

と答へた。リゼルは最初から「夜の淑女」ではなかつた。シーメンス會社の女事務員であつた。シーメンスと關係のある或る日本人と思ひ思はれた。彼女は合の子を産んだ。期満ちた日本人は命により日本へ歸つた。月々五十馬克の扶養料を子供の爲めに送つた。

リゼルは、生活の爲め、又情夫の面影に似た日本人戀しさの爲めキャフエに通ひ出した。勿論シーメンスは辭めた。もし、日本人が日本へ連れて歸つてくれたら、夫婦になつてくれたら、彼女はNの土曜日情婦になる必要もなかつた。

で、最近五十馬克が來なくなつた。横濱にゐるドイツの領事に頼んで、かけ合ひ中であるが、リゼルの要求は一萬馬克の手切れ金を呉れといふことである。一萬馬克(約一萬圓)來たら、もうキャフエに行くのをやめ、子供を姉の所から引き取り、アパートを一階借り切つて室貸しをやる積りなのだ相である。

「僕が日本へ歸つたら、其の男に會つて、早く一萬馬克やれ、と勸告してやらうか。領事や手紙でかけ合つてゐるより効果があらう」

するとN氏は「つまらん義憤を起こすものぢやない」とたしなめた。

伯林の或る日本會社の人の話であるが、日本で、石部金吉といはれた様な人は深入りをするから却つて危険である。道樂もし、酒の味も知つて來た様な人は、限界を心得てゐるから女の世話をしても結論を安心して居られる。

英、獨、佛、伊、スペイン等々歐洲では比較的日本人に對して、侮蔑の目をむけないから

國際愛だの國際結婚だのが成立し易いけれども、アメリカは、支那人と日本人がもてぬ國だ。僕など、涙をのんで、エレベーターの中の女に對し帽子をぬいだ位だ。敵愾心の方が先に起きる。

ロサンゼルス以來紐育まで大分厄介をかけた大阪毎日の高田市太郎君は、半分アメリカ育ちで、事情にも通じ、言葉も達者で、巴里の松尾のやうな男だつた。最近倫敦支局へ轉じたが、この高田君は獨身者である。閑があればテニスをして、疲れて眠る工夫をしてゐるといふ妙な男であつた。

「アメリカ女なんかと結婚して見たまへ、萬事休すだよ」

結婚の相手は日本の女でなければならぬ、といふ鐵の様な決心を持つて居る。けれども、彼は十年位日本へ歸る機會がないので、つい三十幾つの今日まで獨身のアパート住居に、なれてしまつたのであつた。

彼の、紐育の、百九十何丁目かの、アツプターウンのアパートには、かつて女の訪問を許さないといふ、病的と思はれる程潔癖な男である。

「アメリカ女は駄目だ。圖々しくて、せい澤で男を男と思はない、假りの女房に？ 危険々

ロサンゼルスで、米國の市民権を有する所謂第二世、日本移民の子供である娘がオリンピックの幹部と準國際愛を營んだ話は、一寸悲愴であつた。

彼女等はひどく結婚難だ。白人は相手にしてくれない。といつて日本人の第二世では馬鹿に見える程アメリカかぶれがしてゐる。そこへオリンピックで國際的英雄が乗りこんで来る。併し選手は籠の鳥でオリンピック・ビレエヂに收容されてゐるからサインを貰ふのが關の山である。其の他の連中といつても監督や何か選手と直接關係にない連中は都ホテルに陣取つてゐる。

ホテルの近所に密會用の室をかりて、室賃を女が拂つて、オリンピック期間の長からんことをのみ祈つたといふのである。勿論、日本から行つた男には、妻君も子供もゐる。女には貞操觀念なんていふ古くさい道徳がないばかりでなく、相手とする男がなかつた。たゞあるものは、南洋産するところのゴムで日本の産業の輸出的一部門をなす物品が安全を保證してゐるだけであつた相だ。

僕は紐育へ行き、其の男は横濱へ歸つたので、彼等の其の後は知らなかつたが、東京へ歸つて見ると、其の第二世の事など忘れた様な顔をして妻君には毛皮の襟巻をまかせ、子供に

はアメリカ土産らしい毛絲のスエタを着せて銀座を歩いてゐた。

これで、僕は安心なのである。

銀座の女を見るがい。世界有數美しい。少くとも紐育の第五街の、夏の夕暮に歩いてゐる女と日本ギンザ街を濶歩してゐる二十前後の女とは、世界の兩大關である。

かゝる女を有ちながら、外國の淫賣にうつゝを抜かしたり、モデル女と國境を超越したり、それから裁判所へ離婚沙汰の厄介をかける連中に到つては國際的物笑ひである。汝の額を鏡で見よ。黄ろいではないか。女の額を見よ。白いではないか。

國籍のない女

十月の中旬、伯林の夜はうすら寒かった。

カイザアの都市建築方針によつたといふ四階以上のないガツチリした建物を照らす十三夜の月は、晩秋の色を旅愁に染めて私を憂鬱にした。

明日はこの伯林を後に、日本へ歸る旅程を先づ中央ヨーロッパの方へ進める。今宵が、最後の伯林なのである。親切に世話をしてくれた下宿の神さんのグリーゼマン夫人や可愛い通譯、案内娘のイボンとも左様ならである。

私は、今イボンと肩を並べてブラーガア、ブラッツのほとりを歩いてゐる。月は兩人の影を堅いペーブメントの上に落して長くひく。これが戀人だつたら、さしあたり小さい悲劇になるであらうと思ふ。

お別れの晚餐をイボンの好きな日本食にして、トキワを出たのが九時であつた。日本のや

うに、日が暮れた時が夕飯といふ習慣でなく、日ぐれに近い五時頃、お茶をのんで、八時の夕飯が普通になつてゐる歐洲では、この時間が、丁度食後の散歩、でなければ食後のダンスなのである。明日の朝は七時の汽車で、ブラーグへ發つのであるから、今夜は早く靴の始末をして寝なければならぬ。一時間も散歩をして別れやうといふので始めた散歩であつた。

「誰か隨いて來やしませんか？」

イボンは速足に私の前の方を歩きながら、速口の英語で訊いた。

「誰もついて來やしない。何故？」

「ではい、けれど……あそこ（トキワ）に座つてゐた兩人の女の人の人あつたでせう。あれ母子なんですの。母子のくせに姉妹だつていふ風について、そしてお人好しの日本人からお金をまき上げるのを専門にしてゐるんですの、その内情を私が知つてゐるものだから、あの兩人は、逆も私を悪んでゐるらしいの。だから私こわいんです。」

「何だ、馬鹿らしい。僕が金をまき上げられはしまし……君も餘り、餘計なおせっかいはしない方がい、せ、君が心配したつて、馬鹿な日本人が利巧になりはしない。」

「あなた見たいなことをいふ人があるから、日本の政府は貧乏するんでせう。」

とイボンはうがつた皮肉をいつた。いや皮肉ではないかも知れぬ。彼女は、馬鹿に日本人が好きで、ドイツ女の悪性を憎む。伯林に来る日本の紳士、學者、留學生などが、どんなにお人好しで、ドイツの女に金をまき上げられることか、それを一々實例をあげて私に告げるのである。私から見れば、決して心配なことではない。學者や、留學生や、役人や、會社、銀行の人々が、さう澤山まき上げられる金を持つてはゐない。

たゞ、イボンのやうに貧しい生活をしてゐる人から見れば、官費や社費で伯林へやつて来る日本人の生活がぜい澤に見える。一ヶ月五十圓も収入があれば、上等の方であるところのイボンなどから見れば、五百圓から千圓も使ふ旅行者の生活が飛び切りぜい澤に見えるのは當然であり、その上前をはねる爲めに存在してゐる様な、或る種の女が悪く見えるのも當然なのである。

が然し、イボ公が或る種の女……總體的にドイツ人……を悪む原因には、も一つ重要なものがあることを私は見のがさなかつた。それは、民族であり、血である。ドイツを敵とする血である。

イボンの、母が巴里つ子であつた。父はポーランド人であつた。父は世界大戦で死んだ。

母の血は濃くイボンに流れてゐる。ドイツ國民としての國籍はあるけれども、イボ公の感情はフランス人である。獨逸とフランスが、殆ど永遠の敵同士であることは、今更私がこと新らしく述べる迄もない。

イボ公……(私は日本語で、かう呼んでゐた。)は殊に巴里を讚美し、あくがれてゐた。伯林はいやだくと口ぐせのやうに言つてゐた。私はドイツとドイツ人が好きなので、つまりつかりドイツをほめると、イボ公は嫌な表情をして黙りこんだ。

イボン母子の生計は大體日本人に語學を教へることと立つて行つた。母は獨、佛二ヶ國を話しイボ公は、獨、佛、伊、それに英語が達者で日本語が少しわかつた。英語で、僕はイボ公の世話になることになつたのである。通譯と案内である。其のイボンに別れの晚餐の前、約束通りの通譯謝禮をした上、志に何か贈物をしやうと思つた、彼女の靴が破れてゐるのに氣がついたから、

「君の足のサイズは？」

と訊いた。敏い彼女は、直ちに僕の意嚮を悟つた。

「忘れてしまつたの」

彼女が日本人の僕の財布を軽くさせまいとする好意が讀めた。

下宿の神さんにもチップ代りに贈物をする必要から、イボンの通譯で買物をした。神さんは酒が好きだから、コニヤックを一本買った。イボ公は酒が嫌ひだからチョコレートを買つて上げやう」といつたら、

「ノウ、サンキュー妾もつとく甘いものがほしい」と冗談を言つた。甘いものは何だ、といつたら「日本」と答へた。彼女は日本に戀人がゐるのかも知れぬ。結局、僕の彼女への贈物は眼鏡のケースであつた。それも新品ではない。使ひ古しい代物である。二三十錢の安物である。紫外線よけの僕の眼鏡が碎けて、ケースが不要になつたのを見た彼女は、それを呉れろ、といつた。彼女が手提から取り出した彼女のケースはポロ／＼に破れて居るのであつた。

さういへば可愛相に、この若い娘が裏の破れた、型のない外套を着て、帽子はといへば毛絲の手あみである。それでゐる少しも物をほしがる風がない。着飾つた街の女、カフェの女、なる程イボンには悪性に見える筈だ。僕はイボンをいぢらしく思つた。

僕の下宿してゐた家の神さんのグリーゼマン夫人といふ未亡人は、僕が室を見に行つた時

「英語を話すか」と訊いたら「少しばかり」と英語で答へた。

ところが、いよ／＼下宿して見ると「全く少しばかり」でドイツ語を解せぬ僕とは用が辨じない。

イボンが来てくれる様になつてから、急に三人が陽氣になつた。話が通じ出すと神さんはのべつに饒舌つた。

此のグリーゼマン夫人は、又實にお人好しである。朝飯、風呂付一日三馬克(三圓)といふお客なるに拘らず、イボンが來ると兩人を茶に招んで、蓄音機をかけてダンスをやらうといふ。自分が酒好きなものだから、僕にも馳走してくれる。これで三馬克は只見たやうな安さと思ふ位であつた。

神さんは四十がらみで獨身である。

後家さんといへば、前にも書いた様にイボンのお母さんも後家だ。ドイツ語とフランス語を日本人に教へてゐるが、貧乏だ。親子二人で稼いだつて、貧乏な日本人から語學の教授料が思ふ様に上るわけではない。

このおふくろも四十一寸趣した女で矢張り酒が好だ、ビールとお刺身が特に好きだ。

或晩十二時頃、下宿のかへりに、獨りトキワへ寄つてビールを飲んでみると、其處へ、イボンがおふくろを連れて入つて來た。おふくろのビール飲みの先達を承はつたらしいのだ。飲めぬイボンは、淋し相に黙つて母親の飲む姿を見てゐた。僕はおふくろと盃をあげた。それから、そつと勘定を拂つた、先方が氣の毒がらぬ様にして帳場へわたして先へ出た。

次の晩には、イボンにビールの大瓶を托しておふくろへの贈物にした。

「母は幸福です。有難う」

新聞に包んだビール瓶をかゝへ小雨にぬれ乍ら歸つて行く小娘の姿はあわれであつた。

彼女一家は貧乏しながら仲がよかつた。相互扶助であつた。西洋には珍らしい親子であつた。

親父が遺産でも残しておいてくれ、ばい、のに、亡國の民共通の、語學の天才だけを殘して行つた。それを糧にして生計を立てねばならないけれども、不景氣な日本人から充分な報酬を得ることは困難である。「日本へ行つたら、さぞい、生活が待つてゐるだらう」とイボンは空想するらしかつた。

祖國をもたぬ彼女は、淋しかつた。私が、日本へ歸る話しをすると、きまつて彼女は憂鬱

になつた。

「貴方は幸福だ、私には故郷がない」

と吐息をついた。そして、未だ見ぬ日本を永遠の故郷として空想してゐるらしく、窓のそばへ行つて、街路樹の落葉に見入つてゐるのであつた。

祖國にめぐまれたる日本の令嬢達よ、イボンに戀愛でもあるだらう、と空想するのは大きな見當ちがひである。彼女には生活の窮迫と、フランス人がドイツに國籍をもつたところの壓迫感とがあるのみである。そして、たゞ日本人が好きだ、日本はさぞ美しい國で、いゝ生活と何かしら、結婚の相手が待つてでもゐる様に空想してゐる丈けである。

「わたし、日本に行つたら、日本人と結婚して髪の毛の黒い子供を産むの」

ブロントのイボンが、こんな空想を話した。それとて戀心から來てはゐない。生活の窮迫がもたらす夢として、私はイボ公をあわれな世界の旅人の一人として見た。

小

說

篇

政治小説 失はれた政權

官邸の正門も首相の住居になつてゐる日本間の方の門も嚴重に閉められて居る。アゴ紐をつけた、新撰組とよばれる人々が、硬直して櫂の棒を斜にかまへてゐる。

毛利は、その嚴重な警戒裡に更けて行く夜の、日本間の方の側門を開けさせ、目だたぬやうに地續きの書記官長官舎に入った。

昭和七年五月十五日の夜、十二時過ぎた時刻である。記憶をよび起こす迄もなく、政黨政治の燈火が、旋風に吹き消されたその夜であつた。

彼は、いそいで二階へ上ると、自分の寢室にとびこんで、卓上の電話機を握り、陸軍大臣の官舎を呼び出した。

『こちらには毛利力、江崎中將がそこに居る筈だ、電話口へ』

『ハツ居られます。少しお待ち下さい』

『江崎君？ 毛利だ。君の傳言は聞いたが、何しろ抜けられない、電話で話さう。こつちには人がゐない。そつちには？』

『ゐない。至急話したいことがあつた、が何しろ官邸では行けません。電話もかけられん』

『話は何だ』

『政黨の方も大分昂奮しとる様ぢや。それは尤ぢやが、こちらの若い者も大分昂奮してゐる』

『聞いた。君が、荒井君の旅行の留守で、そこに頑張つて大分骨を折つてゐると聞いた』

『まあ、今夜來た連中にはよく話しを聞いてやり、間違ひを起さん様にいうてかへした。もう皆歸りをつたが、お互に戒心せんと危ないぞ』

『事態が擴大しさうか』

『放つてをけば擴大しかねん。そこで君に相談がある』

『ム、聽かう』

『貴様、政友會を押へろ、俺がこつちを受もつ。どうぢや』

『よろしい。引受けた。何としても押える』

『陛下の赤子が内に争ふ秋ではない』

『貴様も悪まれ者になれ』

『俺一人が悪まれて、國の災厄のがれるなら本望ぢや』

『後をどうするのか案があつたら聽く』

『俺は軍人ぢや、その方は君の本職ぢや。國家百年の計を樹てなければ、一時押へぢやいかん』

『俺も其の積りだ』

電話の内容はたつたこれ丈けであつた。

毛利は再び官舎を出て、隣りの首相官邸へ入つた。そして、いまは頭首を失なひ、各々自分の行く先がわからないので不安に捉はれた閣僚達が、さて何を決める元氣もなく雜然と打ちつどふ閣議室のドアを排した。

中心人物ともいふべき荒井陸相も、漸く旅行先からかへつて來た。閣僚中の最長老高橋清藏相は、かつて夜の外出をしたことがないけれども、この場合はその方針をなげうつた。凶

變に急遽駆けつけて一旦邸へ歸つたが、再び相談に呼び出されてやつて来た。

毛利の頭腦は、後始末のプラン、次の政權に對する計畫、總裁を失つた母黨政友會の黨首決定などでキリ／＼まひしてゐた。

彼は文相の鳥山を廊下に呼び出した。

『臨時總理は高橋さんに頼むとして、總裁を至急決めなければならん。床波がせり出して來ない中に機先を制してしまはんと面倒になる』

『さうだ。徒らに悲嘆に暮れてゐる場合ぢやない。それにしても早速手をうたねばならないが』

『その手は僕が、今から第一石を打つ。君は知らん顔をしとれ。惡まれ者は一人で澤山だ……』

毛利は次に、秘書に命じて清水代議士を至急さがして來いといつた。清水は、臨時に代議士室に充てられた大廣間で、皆といつしよに昂奮の渦中にある。開議室前の廊下へ連れて來られた。

『清水、君にひとつ頼むが、決して昂奮するな。君達が憤りを押へなければ全代議士が湧き

立つてしまふ。この際、死んだつもりで靜かに靜かに誘導してくれ』

『それや無理だ。この昂奮憤懣の情勢を誘導すれば、始めて腰の抜けた代議士がふるひ立つ好機會ぢやないか』

『そこなんだ。それは僕も知つてゐる。が起つのは自殺行爲だ。マア好い。この俺が故意に腰をぬかしてゐるのだ。君等も其の積りになつて、堪へ難い所を暫く堪へて貰ひたいのだ』

『ウム……』

『それから、總理は、實は絶命した。早急に後任總裁だ。鈴木さんだ。この方は猛烈に起つてくれ。その方法は……』

わづかに、耳うちで濟す、懇談してゐる時間など有りやう筈がない。けれど清水は毛利に、底の知れぬ深い考へがある、と觀て取つた。指令は、批評をぬいて、同士の耳から耳へ電流のやうに傳はつた。

總理大臣官邸の夜は、軍人の往來、警官の行動、役人、代議士の右往左往に、物凄い空氣の中に更けて行つた。

日本間の方は、既に生命を絶つた老首相を繞つて家族親族が悲しみの裡に靜かに遺骸の處

置に順序をつけて行つた。

本館の方では、首相が既に死んだといふ事實に就て知る者は閣僚、書記官長、その他数名にすぎなかつた。發表の時期に就ては、いろいろの關係上、極めて慎重を期さねばならなかつた。戒嚴令を布くべしといふ議論が軍の方から出た。新聞の掲載を禁止すべしといふ主張もあつた。もちろん、内務省側では絶對反對であつた。

兩論を調和して行くのは書記官長毛利の仕事であつた。毛利は、あちらへ行つて大磯陸軍次官と立話したり、こつちの隅で河原内務次官と耳うちをしたり、或ひは閣議室から荒井陸相や鈴木内相を廊下に呼び出さなければならなかつた。

書記官長室は警視廳の出張所になつてゐたし、次室は内務省の警保局が占領してしまつた。應接室、その他の室も、密談に用ひ得る場所はみな公開に等しい状態にあつた。

『まるで廊下荒だね』

鳥山が慰めを冗談にまぎらして言ふ程いそがしく活動する毛利の頭の中では、早くも次の政權に對する思慮がめぐらされてゐる。

江崎は『一時押へぢやいかん』といつた。江崎の考へは、あれは若い者の考へである。火

事が猛烈な勢で燃え擴がる暴風の中では、周圍の家を破壊して、一定の區域から火事を擴大させぬ工夫をする。その破壊を惜しがつてゐると、それこそ全町燃え盡してしまふ。

毛利は、ある計畫を、既にたてゝゐた。

二

茶室めいた六疊の眞中には爐が切つてあり、茶釜がチンチン音をたてゝゐる。

床の間より風呂あがりの丹前姿で胡坐をかいてゐるのが内閣の毛利力である。その左に毬栗頭に背廣の膝をやはり胡坐に組んでゐるのが陸軍の杉貞三。もう一人は羽織袴をつけ、白足袋の爪先を、おなじやうな胡坐の間からのぞかせてゐる。外務省の黒井正三である。場所は赤坂の待合田川の二階。

毛利の密談、策戦、たいがいこの室が中心である。特に茶室作りを選んだのは、茶釜の音に、浮世ばなれの響があるからだといふ、妙な趣味によるものである。で、晝間會ふ人間と、夜、田川で會ふ人間とは、毛利の數多い面會人の中で、全く色別されてゐた。

それをすつかりのみこんで、痒い所へ手の届くやうに、電話の取次から呼出し、來客の匯

類分け等を、受持つのが、おつるといふ年増の女中で、おつるは、毛利の書記官長だ、と仲間から冗談をいはれて得意になつてゐた。無口で、寧ろ色氣がなさすぎる程枯れてゐる、それで秘密が保てるので、毛利はひどく、おつるを信用してゐた。

そのおつるも遠ざけて、例の浮世ばなれのした音を聴きながら三人は胡坐の膝をか、へこんでゐるのである。毛利が、いつも一人で飯を食ふ小さい餉臺の上には、ウイスキーの瓶と、ソーダとコップがある丈で、室はまことに蕪然としてゐる。茶室に坐る心構への連中とは想はれない。

『東安寺はけふ駿河臺へ入つたきり動かないんだネ。それはいゝとして、けふ羽野の奴、汽車の中でお爺さんを脅かしたのは少し薬を効かしすぎやせんか。平野内閣が出来ると、羽野の様な奴がぞろぞろ出て来て今にも天下がひっくり返る、位に考へさせたのぢや永遠の計が水泡に歸する』

毛利の心配をうけて杉は言つた。

『羽野さんは、極力政黨内閣阻止をやつたんだ。いろ／＼と過去の罪惡史を數へたてた上、最近の個人々々の調査表までひろげて、もし政黨が再び政權を握るやうなことがあれば、五・

一五事件の再来を防ぐこと不可能だ、と結論つけた。東安寺は、黙々として聽いてゐるが、意見は一つも述べなかつた。だから、反應はなか／＼判らん』

『僕は妙な噂を聞いたよ』

黒井が口をはさんだ。

『齋藤の地下運動が相当猛烈に行はれてゐるといふ噂だ。伊澤竹雄が本尊だといふ……』
『それは僕の所へも入つてゐる。伊澤にすれば、僕等の方で三百名も代議士を當選させたのが癪で仕様がな。そこで、政友會は、犬養内閣成立早々には櫻田門不敬事件がある、今度、總理大臣自身が殺される様な事件が起きる、警衛の責任も時局擔當の能力もないから、當然野に下つて謹慎すべきであるといふ宣傳を始めたのが序幕だ。といつて、最少數黨の民政黨に政權をわたせ、とは言へないものだから、官僚の古手、小玉だの角野だのと朝鮮組を動員して、齋藤擁立、民政黨參畫、政友會除外、解散と、手をうつてゐる』

毛利の情報網にはとうにそれが入つてゐる。黒井の噂よりもつと詳しく具體的である。たゞ彼はその實現性について全然問題にしてゐないのである。彼は軍部の狀勢に照して、平野以外に人はないと信じ切つてゐた。

『齋藤なんて妖怪の出る幕ぢやないヨ。民政黨を土臺にして、又白原外交のむし返してもやつて見ろ、日本は愈々亡國だ』

杉は吐き出す様に言つた。

『こつちは、誰でも構はん。が白原外交だけは困る。支那を増長させたのは誰なんだ。まるで支那人の手先のやうな外務大臣ぢやないか』

白原閣で固まつた外務省の中で、軍部のロボットだ、と異端視されてゐる黒井である。

『毛利君の前だが、犬養内閣だつて随分だらしなかつたぢやないか。たつた半年の壽命だと言へばそれ迄だが、一體何をしたのだ、井上財政の綻びを縫つて金の輸出再禁止をしたぢやないか。支那對策だつて、いつでもわれ／＼に引きづられてゐる。引づられて隨いて來る。隨いて來ないよりましなんだ。三百四名をとつたといふから少しは積極的に出るかと思へば、祝酒に酔ひしれて、外に對する非常時を忘れちまつとる。政黨内閣の駄目な譯は、三百四名取つた君等が如實に手本を示したのだ。若い者が警世の爆音をたてるのは故ある哉。この上、政黨内閣でも出來て見ろ、爆音が大きくなる許りだ。政黨撲滅運動をキツカケにどんな騒ぎが起るかもしれない』

杉は、ウイスキー・ソーダをぐいとあふつて、眉を上げた。卓を叩かん許りの光景である。

『杉……昂奮しちやいかん。こゝは貴様、待合だぞ。おつるが、杉さんは可恐い方だといつてをつた。貴様も少し藝妓買でもして見ると角が取れるんだが、どうだ取りもつてやらうか、若い綺麗なのを……』

『藝妓買ひはせんが、おつるに嫌はれちや出入禁止を食ふ恐れがある。ハ、ハ、ハ、黒井君、どうだ君は、女ぢやないから僕の意見に賛成ぢやろ』

『勿論だ。毛利なんか、政黨に未練を残してゐるのは死にかけて情婦を抱いて寝るやうなものぢやないか』

『俺の親父は自由黨で血を流した。俺は親父から忠義の教育を叩きこまれた。死にかけて情婦ぢやない、とうに死んだ親父の血が俺に流れてゐる。俺は政黨をも一度仕立て直す義務がある。その爲めに、俺は貴様達と手をにぎるのだ』

毛利の死んだ親父といふのは作太郎といつて日本の政黨創造時代に刃の下をくつた人であつた。

毛利は續けた。

『俺は、君達が何ういはいはうと、私情からいへば鈴木單獨内閣が作りたいたんだ。その片棒を擔いで居れば政黨の反逆者扱ひも受けなくて済む、ナア杉さうだらう』

『出来ないから仕様が無い。もし出来たら其の日に潰れる。若い者は、俺達をまでダラ幹だと言つて居る。維新の志士は無名の青年だつた。今日の志士は無名の軍人だ。それを認識せずして國政を運用しようといふのはコンパスなしで荒波を横切らうとするものだ。平野内閣に依つて、強力政權を樹て、對外問題をまづ片つばしから片づけて行くより外に内をまとめる途はない。さうと知つてる筈の君が、今更ら、私情で愚痴をいふのは可笑しいぢやないか』

『やらう。一身の利害を考へて居る時ぢやない。もう此話はよせ！』

『お呼びでございますか』

おつるが襖をあけた。

『腹が空つたな。黒井も杉も未だ飯は食つちやるない。何か食ふ物をもつて来てくれ』

もう夜の九時である。毛利は飯時を忘れる程頭の方が回轉する數日であつた。

『僕は天ぶらそばを二つ取つて貰はう』

杉である。

『もう少しまい物を食はんと身體が持たんぞ、牛肉か鰻でも食つて精力をつけて、お前も睡眠不足を補充するさ』

これは毛利である。

『天ぶらそばとはさすが田舎漢だ。質實剛健だ』

黒井がひやかした。

『これでもせい澤だ。自首した若い者に天ぶらを食はせて呉れつて錢を渡して来たんだよ。

だから俺もこれでいゝのだ、君達は勝手に食ふがいゝ』

事件で自首した若い人々を思ふこの純眞な將校は、飽迄天ぶらそば二個を主張して譲らない。

おつるは、黙つてこの問答を聽いてゐたが、杉といふ將校を、頼母しいものに思つた。だから、すべて杉の思惑を亂すまいとして、料理も酒も運んで来なかつた。勿論、酌人を招ぶことは絶対に避けねばならぬこと、おつるは心得た。

『どうも、何だな杉、政治家も外務省も、軍部に追隨するより外に道がない様だな』

毛利は愉快さうに笑つた。

『天ぷら迄、引づるんだから叶はないよ、兵隊つて奴はうまい物を知らんから向ふ見ずなんだ』

と黒井が相槌をうつて笑つた。

『さあ杉、来たよ、お前の最もせいたくな食物が』

『暖かい中に何卒召し上つて下さいまし』

おつるは先づ杉にすゝめた。

『おつるさん。さつき毛利君が言つてゐるが、僕は君に評判が悪い相だね、悲觀したぜ』

『まあ……何故で御座います。先生、何かおつしやつたんですか』

『ウム。杉にな、女を世話してやらうかと言つたら女でもおつるの様なのは好いが、若い妓ぢや不服だとさ』

『まあ……杉さん、ほんとうで御座いますか、お人の悪い。もう天ぷらそばを御馳走して下さいませんか』

『それや困るナ、天ぷらだけは食はして貰はんと、この勢で政黨を潰すんだからな。ハ、ハ、ハ、』

、

杉は冗談から、眞面目に飛躍した。

『おつるさんの様な女が満洲へ行つてくれるとい、んだがな。吾々仲間のおふくろ見た様になつて世話してくれるとい、んだがな。全くあつちにいる女は、人を食ふ事ばかり考へやつて少しも同胞の爲に計らうつて氣がないんだ』

すると毛利は眞顔になつて言ふ。

『おい杉、何か陸軍の宿屋かクラブ見たいなもの出来るんだらう、新京へ、そいつをおつるに經營さそうか、資金は俺が出す』

『それや好い、名案だ。軍人會館が出来るんだが、食堂とか料理部とかは誰かに受負はせにやならん。この人ならうつてつけた。どうだ、おつるさんやるか』

『やるもやらんもない。やるな。お前と俺でお膳立てしてやればい、。これも重要國策の一端だ……ナアニおつるは金を貯めて親父やおふくろや子供を樂にしてやれやい、』

『子供があるのかい。驚いたナ』

『あるにも、三人もあつて、亭主に死に別れだ』

おつるはさすがに女の身の上をさらされて羞かしいか、顔を赤くしてうつむいてゐる。然し、毛利が、冗談に人の將來を約束する様な男でないことをわきまへてゐた。

『いやですわ、先生。今夜はウキスキーを召し上り過ぎはしませんか』

黒井が口を入れた。

『おつるさん。僕が證人だ。大丈夫だ。平野内閣が出来上つたら、賞與に、滿洲のお母さんになるサ。杉も何れ參謀で行くだらう』

『ありがとうございます。お證人さまお忘れなく……』

おつるは冗談とも本音とも分らぬ微笑を浮べて黒井のそばのフタを取るのであつた。杉の方は、もう、二ツ目に箸をつけてゐる。

毛利は腕を組んで唇を噛みしめてゐる。そばに箸をつけようとしめない。おつるは、彼の氣象をのみこんでゐるので、召し上れともいはず、何れ密談が續くものと察して室を出て行つた。

三

おつるはやがて一片の紙きれを持つて來て毛利に示した。

『土屋様、清水様、川崎様御來訪』

と書いてある。客の名前、電話の取次、他と對談中は一切口頭で言はぬことになつてゐる。これは注意深い政治家だけが用ひるやり方であつた。

『あつちの室で待つてゐて貰へ』

斯ういふ場合に、待合はその效用を發揮する。室の構造が、隣室と隔絶してゐる。客と客とが容易に顔を合さない。誰の私邸でも、餘程大きく、室を幾つも取つてない以上、來客の鉢合せで困ることが屢々ある。毛利の私宅は小さかつた。官舎は開けばなしであつた。新聞記者が、役人が自由に出入した。

『それぢや又明日の晩、會はう。今から向ふの客と會つて、それから又出かけて來る』

杉と黒井が歸ると、入れ代りにいま來た三人が毛利の居城へ案内されて來た。坐るか坐らぬかに土屋は口を切つた。

『大將、成功しましたよ。總裁がわれ／＼代表者の要求を容れて、貴下を副總理、内務大臣として組閣する約束をしたんです』

毛利はギクツとした。

『總裁は、君の力で總裁になつたことをよく承知して居る。副總理は當然な話だ……』
最年長で、毛利の兄貴分にも當る清水が言ふ。川崎はこれに和す。

『鳥山氏が、後で茶々を入れても總裁の決心を覆へすことは出来んと思ひます』

毛利は、腕を組んだまゝ一言も發しないが、心の中では、困つたことになつたと思ふ。

この訪客三人は、毛利幕下の三勇士といはれる程の間柄である。毛利を主盟とする政友會代議士數十名は、殆ど祕密結社ともいふ可き團結力と爆進力をもつてゐた。犬養總裁が凶弾に仆されて、扱て後繼總裁を急速に決めなければならぬ時に、候補者は鈴木友三郎と床波竹二郎が對立した。

この兩人に差し支へあらば、前に一度總裁をやつたことのある大藏大臣の高橋清を暫定總裁にして時の推移を見るといふ床波派の、表面的穩着論も亦有力に傳へられた。

何しろ、その凶變直後の政界常識では、當然政友會内閣の再出現といふ輿論だつたので、誰にも後繼總裁即後繼内閣總理大臣として考へられた。だから、總裁を奪還するといふことは、黨内各勢力派閥に取つて、死ぬか生きるかの問題だつたのである。

鈴木は、毛利と文相鳥山の兩翼に支持されてゐた。この兩翼の新興勢力に對して反抗せんとする舊派の人々を主とし、毎々に毛利、鳥山に壓せられてゐる弱少ブロックは勢ひ床波を擁立して彼等の勢力に對抗の機會を掴まんとした。

もし、何等の工作も施さぬ間に、黨内の一般投票を行つたらば床波派は散票を集めて當選したかも知れない。然し乍ら、毛利は、凶變直後に、彼の幕僚長清水に急命を下した。『鈴木をデツチ上げるんだ！』

その晩から、清水、土屋、川崎を中心とする毛利の手兵數十名は、山王ホテルに陣を構へて、まるで戦争のやうな徹夜の活動をはじめたのである。一方鳥山の方は、自分の邸を本據にして情報を集め、中立と目される者の勸説手段を講じた。けれども山王ホテル組は、より以上に動いた。殆ど非常手段ともいふべき強力金力工作、潜入、あらゆる手を盡して、連判状を作つた。鈴木擁立同盟のそれである。そして三百四名の過半数は忽ちにして握つてしまつた。

毛利一派がかういふ強硬方針を進めるので切角獲得した未曾有の大勢力が眞二つに分裂しはせぬかと恐れられた。が割れ、ば割れたで、却つて脂肪過多症の脱脂法的作用をなして健

康になる。構はんから押せ〜といふのであつた。

鈴木擁立派は、既に大分裂しても惜しくない丈は連判を集めた。集めてをいて、扱て次の手はといふと、總裁は公選すべしといふ論を樹てた。公選すれば鈴木が勝つに定つてゐる。しかも黨には死んだ規則ながら、總裁は公選とし、その任期を七年にするといふ明文がある。表面きつて陰謀だ、とケチをつける餘地は残念だけれどもなかつた。

大勢がかう定ると、之れに反抗する者は逆に黨の攪亂者といふことになる。それが嫌なら脱黨しなければならぬ。

反鈴木といふべきいはゆる巨頭岡崎邦太郎、餅月慶助、久原房太郎、といった人々は、逆に床波を説服して鈴木擁立を全黨一致の形式にもつて行くといふ風向に變つたのである。床波は岡崎、餅月、兩説得使の來訪を受けて即坐に鈴木推戴を承知した。

だいたい、かういふ筋書で鈴木總裁は出來上つたのである。

鈴木政友會内閣は目の前にぶら下つてゐるかに見えた。

清水、土屋、川崎達は勿論信じ切つてゐる。毛利は當然副總理である可きだ。さう思つて運んだ仕事であつた。なる程毛利自身から内命を受けてはゐない。大體毛利といふ男は、口

が腐つても自分の獵官運動などする男ではないことを承知してゐればこそ、幕僚が獨斷でやつた仕事である。不服をいはれる筋は少しもない筈である。

然るに、毛利は腕を組んだ儘黙りこくつてゐるのである。

『僕が悪かつた』

毛利は吐き出すやうに言つた。

『君達は、僕をそんなに迄思つて呉れてゐる。なのに、僕の考へてゐることは、君達と違つてゐる。僕は、鈴木さんの内閣が出來ても入閣しない！』

これは、三勇士にとつて、爆彈である。何故爆彈が仕掛けてあつたか、判断の仕やうがない。年長の清水は然し自らの思慮不足を感じたらしい。

『僕等が悪かつた。獵官運動なんかして君の氣持を壊したのは悪かつた。總裁をデツチ上げた返禮を寄來せと迫る、ナル程君の氣象には合はん……』

『大將、烏山氏に義理をたてゝゐるんですか、當然副總理、内務大臣を以て自他共に許す烏山氏を押しのかたと思つてゐるんでせう』

土屋は叩いた。

『鳥山氏は、軍部にボイコットされてるます。あの人のあけすけな自由主義が容れられない。よしわれ／＼が一致して内務に推薦して、もし就任したとして、その結果はどうなりますか、これは僕等より大將の方がよく知つてゐる筈だ。鳥山氏に關する中傷の怪文書は既に横行してゐる。こゝで無理すればあの人の將來が斷たれる。むしろ閑な椅子にゐて將來を築く方が鳥山氏の爲めでもあり、黨の爲めでもある……』

川崎の説明のあと、毛利は重い口を開いた。

『獵官も時によつては志を伸べる手段だ。鳥山を排斥して僕がその地位を奪ふといふ事も、それが時艱を救ふ唯一の手段なら私交を犠牲にせねばならぬだらう。……然し僕の志はもつと飛躍してゐるんだよ。手つ取り早く目の前の現象に就ていへば、平野内閣を造るんだ。政友會と軍部と組む、民政黨を叩き潰して一國一黨にしてしまふんだ。さうして強い政治をやる。滿洲事變の後仕末。支那を手も足も出なくしてしまふ。勿論國際聯盟なんぞ脱退してしまふ。アジアに還るのだ……日本の生きる道はこれしか無いんだ。然し非常に危ない仕事だ。周密敏速な作戦が要る。愚圖々々小田原評定をしたり、元老重臣の思惑から英米の鼻いきを氣にしてゐたのぢや何にも出来ない。後手になる……』

三人は、餘りにも事の意外に度膽をぬかれて黙りこくつてしまつた。それでは、五・一五事件を機會にしてファツシヨ政治を計畫する或る一部の陰謀と同斷ではないか。政黨政治への反逆者ではないか……われ等の大將が……。

『かういふと君達は僕が兵隊に降参したと憤慨するかも知れん。だがこの荒れ馬は口をとつて引つばらうとするよりも、ヒラリと背中に乗つて走らせる方が上策だ』

『君なら乗れる……』

清水は重い口と目をいつしよに開いた。

『ぢや、黨の方はどうします』

川崎は不安さうな目をした。

『鈴木内閣だつて、差支へないぢやありませんか。軍と手を握れば』

土屋は、不満さうに言つた。

『僕も、情に於ては鈴木さんを總理大臣にしたい。が實際問題として到底望みはないのだ。それは僕の情報網が確實に示してゐる。鈴木さんが、いゝ氣持になつて單獨内閣を主張したり、軍部のロボットにはならぬと放送したり、すればする程駄目になつて来る。……あれ位、

僕が注意してをいたのに口が軽すぎてお話にならん……」

毛利は、また改めて、腕を組んだ。嚴然たるその顔は蒼い。彼は、もち前の冷靜さを昂奮の餘り失なひでもした如くに續けるのである。

「いゝか、おい、支那だよ。問題は先づ支那だよ。あの蔣介石に、すっかりなめられてる日本を見るがいゝ。四十そこそこの青二才に、支那通を以て鳴つた七十七の木堂でさへなめられた。これは支那人の本性を底の底まで知らんからだ。僕は君等も知つての通り二十歳からの支那屋だ。見ろ、あの蔣を始めとし、幹部といふ奴は、みな日本の留學生ぢやないか。日本の支那人教育は、即排日教育だつた。こんな馬鹿な算盤外れの話つて何處の世界にある。こいつを御破産にする、建て直しをして北支那を日本の別荘地にする。支那四億の人間に日本の品物を買はせるのが滿洲事變後の新しい僕の對支政策なんだ。白原外交は國賊だが、大養外交、吉井外交だつて一知半解の失敗を繰り返してゐる。いや兵隊も抜けてゐる。強がり一方で、賣つて儲ける事を知らん。毆つてをいて、撫でる、このコツは、僕でなくちやわかるまい……僕は、これ一つ仕遂げれば大半の政治目標は達成するんだ。その必要から國際聯盟を脱退する……内政は外政を整理する爲に、有ゆる政治勢力を單一化することしかない。

之れに内から邪魔するのは、誰でも國賊だ。元老も重臣もない。もし政友會がさうなら政友會もない。民政黨なんぞは消滅して可い」

聽いてゐる三人は、おぼろ氣ながら、彼等の盟主の志が解つたやうな氣がし出した。たゞ政友會内閣を主張しないのが頗る不満な丈である。總裁の側近では、政務官から祕書官まで内定してゐるといふのに、こつちは肝腎の大臣さへ逃げてゐるのである。支那問題もいゝが……いや毛利の前でそんな事を考へるさへ罪惡かも知れんぞ。

『わかつた。僕達が悪かつた』

いつの間に取り寄せたか、酒好きの清水はコップで三四杯あふつた後であつた。

『で、と毛利君。俺等は君の方寸通り火の中でも飛びこむんだから、方角だけは示しといつて貰はんと困るぜ』

『それだ。それだ。大將それだ』

川崎と土屋は同音に叫んだ。

毛利と彼等との間には、一種封建的な主従關係に似たものと、俠客の親分、子分の間柄のやうな單純で強い感情が結び目になつてゐた。

『さういつて貰へば嬉しい。いや俺が悪かった。も一つ言つてをくが、俺はまかり間違ふと生命が危ない。が慌てちゃ不可いよ』

『何故?』

『乗り手は御する積りでも、力が足りなければ振り落されて踏み潰される』

『わかつた。もうこれ以上訊くまい。野暮だ』

清水は結ぶやうに言つた。川崎と土屋は、感情をこめた目と目を見合せるのであつた。

四

『林君、昨日頼んでをいた計算、出来てゐるかネ?』

『はあ、みんなもつて來させてをきました』

『總計いくらかね』

『一萬二千五百二十圓五十錢です』

秘書の林は、ピンで綴つたひとまとめの紙片を毛利の前に差し出した。紙の数は十二三枚もあるか。赤坂、新橋、柳橋、日本橋の、いはゆるお茶屋から差し出した未だ受取の判だけ

押してない受取書である。毛利はバラ／＼と一通りめくつて見たが、目を通したのはお茶屋の名前だけである。内容は見なくとも、貴族院誰々。陸軍の誰彼。海軍のあれ、乃至大阪からわざわざ招んだ實業家の某。乃至は新聞記者と一夕の會談をした、などといふ類。いづれも機密事項に屬するものである。

『これ丈か、林君』

『はあ、この他に官邸の宴會費があります。まだ東西軒から届けて参りませんが、約三千圓と思ひます』

『それや、何だつたね』

『政友會の新當選代議士を、總理がお招びになつた祝賀會。それから貴族院の方々を、矢張り總理がお招きになつたあれ、それから……』

『ヨシ／＼。あの、毎日食ふ晝飯ね、あの方のも來てゐるかい。閣議の晝飯と、それから、下の連中の辨當なんかあつたね……』

『はあ、あの方は千圓足らずと思ひます』

『ぢや未だ全部集まつてゐるんだね。至急集めて合計を知らせてくれたまへ。明日は拂つて

しまふ……』

『田川のは何う致します？』

『あれは君が心配せんでもいゝ、』

『……しますと約二萬圓です』

『横水君を一寸よんでくれたまへ』

横水といふのは、内閣書記官である。

横水は、書記官長室のドアを排して毛利の大机の前に立つた。

『君、機密費は残つてるかい』

机のひき出しの手紙や書類を破りながら、横水の顔を見るでもなしに毛利は投げつけるやうに言ふ。

『……残つて？ はあ、五萬圓あります』

『五萬圓？』

『上半期の分はすつかりお使ひになりました。下半期の分が五萬圓……』

『今日は五月だね。書計年度は四月からだね。すると四、五の二ヶ月で五萬圓使つたのか？』

『さうです。兎も角、林君の方へ差し上げてあります』

『おい林君、受取つてあるね』

『あります。然し、手許には二三百圓しか残つてをりません』

『すると？』

横水は、こゝで、後継内閣の書記官長に受けつぐべき帳簿面を早くも胸算用してゐる。下手をすれば、自分の落度になるからである。

『翰長、月割りにして約三萬四千圓かへして頂かねばなりません』

『何だ、借金か、泣つ面に蜂かい、馬鹿々々しい。よし、解つた。よろしい』

横水は、自分が悪いことでも仕でかしたやうに、恐縮し乍ら部屋を出て行くと、毛利は例により腕を組んで、室の中を歩き出した。秘書の林は、金庫の側にいてある自分の机にむかつて、計算をしてゐるやうである。

『すると、五萬……いや六萬圓なくちや官邸を引拂へないんだな。小者その他の手當も要る

……』
ひとり、毛利はつぶやいた。

政權の中にある時であれば、金を作ることも比較的容易である。けれど、いまは内閣主班の凶死によつて、事實上犬養内閣は倒れて政權は宙に迷つてゐる。毛利は、官邸を引上げるための残務整理をしてゐる最中である。機密費年額十萬圓は、凡そ宴會費にも足りない。本年度、半期分は既に使ひ越しになつてゐる。政治資金として、書記官長の手で集めた金は、全部總理の手にわたしてある。死んだ總理から貰つて來る譯には行かない。さりとて、誰が來るか分からないが、後からの書記官長と事務の引繼をする時には、機密費が第一であること、自分にも経験がある。

『鈴木さんに二萬圓、鳥山に一萬圓出さすとして、あと三萬圓は、出せといつても出す奴がない。俺が作らにやならんか』

これから政權を取れさうだといふ時などは、電話一本でそれ位のものは、向ふか持つて來るのである。いま後繼内閣を待つ間の殘燭政權に對して、鏝一文も献金するものではないこと、實業界の情勢に通じてゐる毛利には、手に取る如くわかるのであつた。

『仕方がない。俺の手形で作る迄だ』

毛利は、室の西角まで歩いて、突當らうとする途端に、さう決心を定めた。

『おい林君、車を出してくれ。君はもう歸つていよ』

日はもう暮れた。初夏の夕暮に氣早い浴衣の人が街を歩いてゐる。毛利の車は、官邸の直ぐ下に在る田川の方へ下りて行つた。

『おい〜おつるはるないか』

上り口から毛利は急がしさうに、用事を頭に浮べてゐる。例によつて、おつるがゐないと、事務が一ツも運ばないのである。

『おい、おつる電話で鳥山を呼び出してくれ、それから風呂と飯だ』

さういひ乍ら二階の、例の六疊の方へ一人で上つて行つた。折よく鳥山は宅にゐた。毛利の非家庭的な生活と異つて鳥山は、宴會さへなければ自宅で家族と共に飯を食ふ永年の習慣である。非常事件の政變最中であるから、政府財界の人々に取つては、戒嚴令こそ實施さ。てゐないけれども、それと同様な異状感の下に、宴會といふ宴會は全部中止されてゐるれたゞ、毛利のやうに、待合を事務所にする政治家だけがかういふ街を必要とするだけであつた。

音響の洩れぬやうに、羅紗を張りめぐらして密閉した電話室の中で、毛利は鳥山文相と話

してゐる。

『……で、總裁にニツ。君に一ツ振り當てたんだ、後を濁さぬ様にしたいからなア。何？ 舞田にも出させろつて？ 出しやしないよ、これから大臣になるんぢやないんだ……呑氣な こと言つてるね、どうせ次はこつちの天下だから、明日や明後日といはなくても可い？ さうは行かんよ。見當が異ふよ、もう番町を素通りして大久保の方へ近づいたぜ、アテにしてゐるとビックリして心臓麻痺を起こすよ。……まあいゝや、そんな事はどうでも、明日一本もつて来て呉れ、鈴木さんへはこれから行つてさういふから……ナニ？ 今夜三人で會ふ？ よからう、だがネ、新聞記者が寝ちまつてからでなくちや危険だ。——ウンさうだ、鈴木さんね、君から電話をして十二時になつたら門を閉めさせるんだ。新聞記者の引上げた後で落合ふことにする……いつたい其の電話の側には誰か人がゐるんぢやないか？ 何？ 奥さんと田村に飯野、仕方がないな、君はのんき過ぎるよ。君の方から、デマだの秘密だのが頻りに飛ぶんだ。それがそつくり其の儘僕の方へ入るんだ。困るね。君と僕の間をさいその間隙に乗じようといふ魔手が動いてゐるんだぞ、しつかりしないと、君なんぞは甘いから乗せられるんだ。僕と話したことは、絶対に洩しちやいかん。いまが肝腎な時だ。わかつた？』

ちや十二時半……』

電話を切つた毛利は例の六疊へ歸ると一人言のやうにつぶやいた。

『家庭圓滿もよしわるしだ』

鈴木新總裁の兩翼といはれる鳥山文相と毛利書記官長は、然し性格は全然異つてゐた。故にこそ夫婦の様に存在した。鳥山の方は秘密はもたぬ、毛利は極端に秘密を、愛好しさへする。鳥山は積極的に働らきかけて情報を取することをしないのに、毛利は、有ゆる方面から積極的手段で情報を蒐める。鳥山は潮にのつて自然に押し出されるのを待つ風があるに對し毛利は潮が自分と逆にさす時にも強引に潮を乗切らうとする男であつた。

鈴木とこの兩人との關係をいへば、何も鈴木の子分とか幕下とかいふのではない。鈴木を立てることによつて彼等の地歩に便宜を得ると共に、黨内の新勢力に對抗する足場を作るに在つた。だから、自分を持つといふ點からいへば、鈴木直系といふべき者十人位に對し、彼等に各々ついでゐるそれを合計すれば黨の半數を占むる勢であつた。鈴木は兩人の擔ぐ駕に乗つて進む客であつた。どちらかが、俺はもう擔ぐのは嫌だといひ出せば、駕は一步も前進しなくなるのみである。

毛利の幕下には、俠客風な気分があつて、親分の爲めには水火を辭せぬ強硬分子で固まつてゐたし、鳥山の方は、智識的な分子が集まつてゐた。だから、自然と兩派の氣風は異つてゐる。けれども鈴木新總裁を中心にして兩人が仲よく駕の前後を擔いでゐるから、大勢の者は、鈴木を焦點として集中してゐるのである。

これを、党内の反對勢力、または反對黨乃至政黨政治否認の陣地から展望すれば、極めて心憎い邪魔な一團である。この一角を崩すことは、己が力を伸ぶることになるのである。政變を機として攪亂の策謀は、有ゆる方面から伏兵となつて表はれ始めた。

毛利はファッシュヨである。政黨政治の攪亂者である。鳥山を押しつけて自分の權力を伸べんとする、といふ放送が飛び出せば、一方毛利に近い方面からさへも、鳥山を陥れる爲めの怪文書が飛び出すといふ有様であつた。中間のある者が毒ガス作業をやつてゐると注意する者は少なかつた。政變に對する兩人の觀方、考へ方に相當の距離あることがだん／＼判明するにつれて、兩派の幕下達は、魔手を反省する隙もなく、鳥山派は毛利を、毛利派は鳥山を各々公然と中傷しはじめさへしたのである。

毛利が電話で、鳥山に注意したのは、この故であつた。兩人の力を加へれば三人前四人前

にプレミアムがつく。割れ、ば額面以下にしか買はれない。それを毛利も鳥山も各々肚の中
で心得てゐた、けれど、幕下はそれに對して反省をもたなかつた。危機はそこに在つた。

五

政變の幕は、上京した元老を中心にして、靜かに進んで行つた。一夜を、駿河臺の邸で默
考した東安寺公爵は、その翌朝、まづ臨時首相の高橋藏相の來邸を求めた。

臨時首相から責任ある「政府當局」の話を聽いて、次に内大臣の牧山、樞密院議長の高橋
など、いはゆる重臣が招かれた。民政黨の總裁である若月は、總裁の資格ではなく、前の總
理大臣として意見を徴されたし、清原子爵、山川權兵衛伯などもその意味で意見を聽かれ
た。

不思議な現象が消息通の間に、早くも知られた。高橋は現に政友會の最高顧問の地位に在
つたにも拘らず、政友會の鈴木總裁を推してゐないといふことであつた。また若月は、政黨
人の立場から立憲政黨は暴力によつて破壊さるべきでないといふ新聞記者への談話から推論
しても、當然政友會内閣の延長を進言すべき筈であるのに、矢張りこれをしてゐないことで